江戸名所圖會

八

W245
20

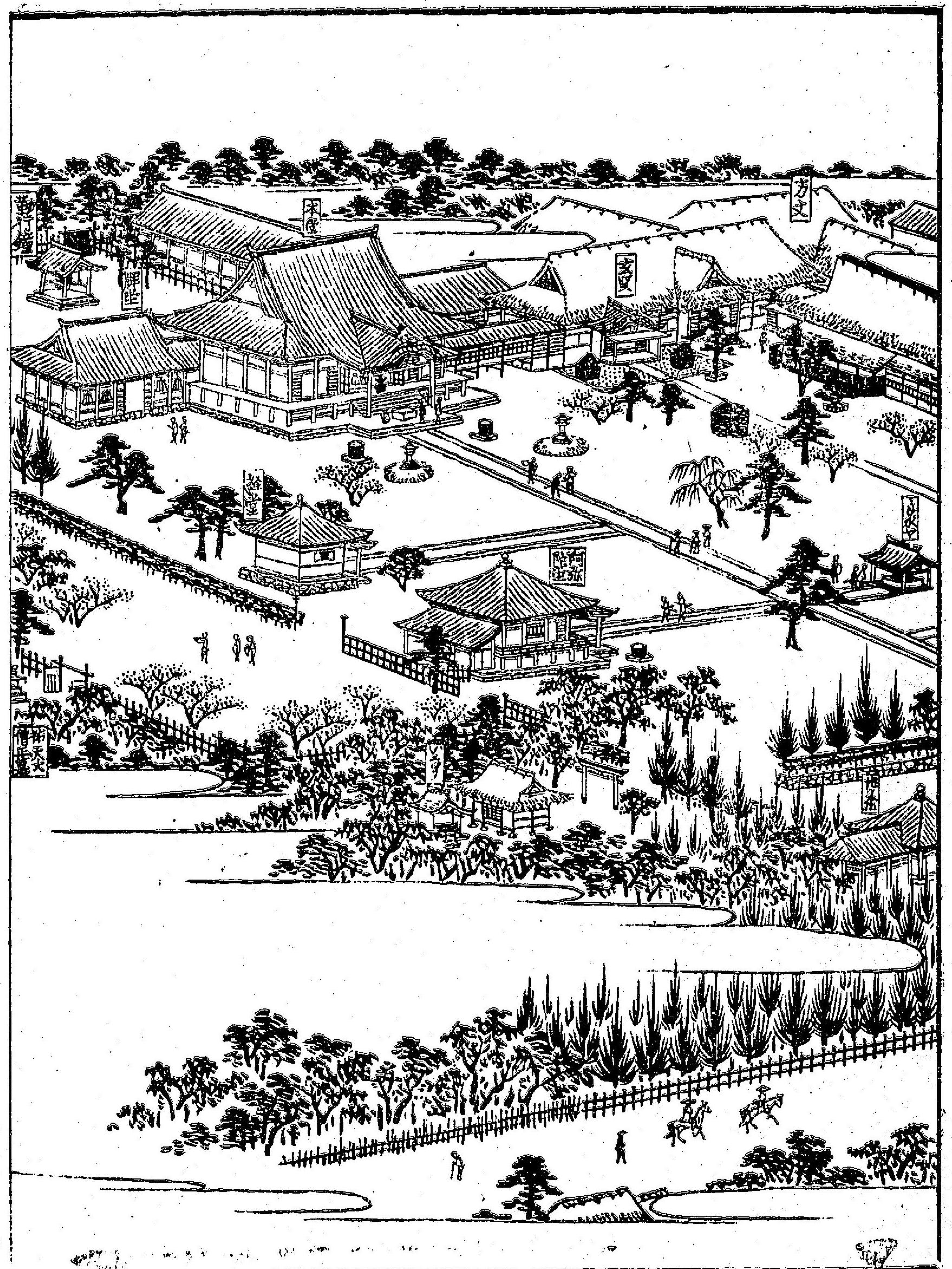
明顯山祐天寺　同所西の方五丁斗を隔つ善久院と号せ享保年間二世祐海和尚祐天大僧正の遺跡の地を奉して當寺を草創し則祐天大僧正を開祖とせ常行念佛の道場ゆして鉦鼓の聲ハ山林に谺せり（此称名ハ開山祐天大僧正臨終の期開闢ありしより連綿として絶えまとなり）毎年七月十六日より同廿五日に至る迄の間阿弥陀経千部讀誦修行道俗群参す

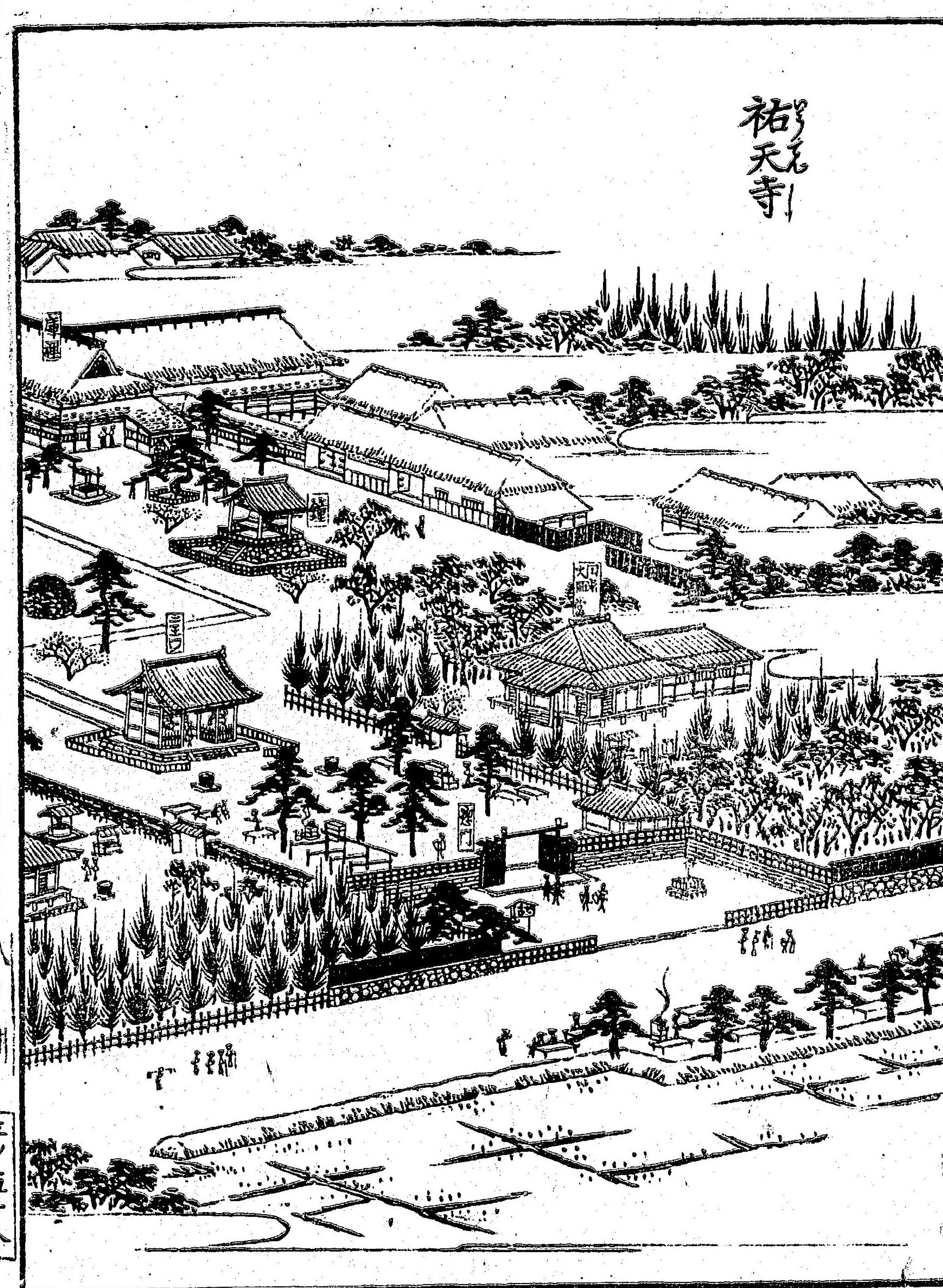
本堂　本尊阿弥陀如来（ゆ長一尺五寸斗）恵心僧都の作ゆして開山生涯持念の尊像なりと　開山祐天大僧正真像（本堂の龕前に安置す）等身佛ゆして八十二歳の影像三輪利鑑の作なり

鯨鐘（堂前右の方庫裡の前にあり一位大夫人桂昌院殿御寄附）　圓光大師堂（同じ並びにあり法然上人在世の時河内國の天野四郎と云強盗ありしが終に上人の化導に帰入し出家して教阿弥陀佛と号く常に上人の側に随從して数化に預りしが後上人相模國川村と云へ下向の頃生涯の記念にとて自影造して送りまゐらし霊像なりとぞ故あって當寺にうつしおかるといふ）

經藏（堂前左の方にあり額経藏の二字ハ祐海和尚の筆之）　阿弥陀堂（同じ左に並ぶ開山傳授佛如来と称して恵心僧都の作佛と号す）

W245
20
国立国会図書館蔵書
寄贈
西村妙子殿
56.10.-5
81W51781





祐天寺

なるその是れなり 則僧都一代彫刻の如来ハ此尊像を拝して彫あらはすに此号ありと云

開山大僧正常に有信の輩に浄業傳法の時の結縁仏なりと縁起にあり寺僧に問へし

額阿弥陀堂の四字ハ祐海和尚の筆あり

稲荷祠 同し地にあり當寺の護法神とす

地蔵堂 同し並ひ二王門の外の左にあり祐天大僧正の本地仏と称しまゐらせし恵心僧都の作ふしぎ 丈長二尺五寸斗あり 元信州松本の光明院に安置せしに寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失ひ享保三年戊戌七月十五日開山遷化の日に至て此霊像再ひ光明院へ帰り顕れ給ふ 松本の城主出羽守水野忠周侯の夢中に開山の本地ハ地蔵菩薩なりし霊示あり依自ら其ゆゑを記し當寺第二世祐海上人へ送らせられける其書簡今當寺に傳へて秘蔵せり然るに寛政九年丁巳の夏松本の城下倉品七郎右衛門といふ人往来の因縁ありて後の城主丹波守松平光行是を乞ひ同年十二月廿三日當寺へうつし奉りぬ

二王門表の左右に在る那羅延密迹の二像裏ハ持國廣目の二天を置額 明顕山 祐海和尚筆

開山祐天大僧正廟 経蔵と阿弥陀堂の間より裏門へ行く左の方叢林の中にあり入口に石地蔵堂あり

開山八十歳影像 麻布一本松の禅室にて了月和尚親写し画くと云

同臨終真影 開山八十二歳の時 享保三年戊戌六月中旬より不食して身躰日々に衰へ七月十五日に至りて称念臨終し給ふ 同十六日遺骸を倚子に移して諸人に拝せしむ 此期に写せし影にて了月和尚の画あり

開山遺骨舎利 開山命終の後茶毘せしに全身悉く舎利となる 然れハ今廟窟に埋蔵せしを今ろうに宝塔へ収むる其の則諸人に拝せしむ

同舌根 是も茶毘の中に宛然として残りけるとぞ縁起に云 舌根ハ元火中にしても茶毘の中に壊せすと云ならし 然るにかく止るもの此ハ累年称名の功徳なり

その化導に妄語なき

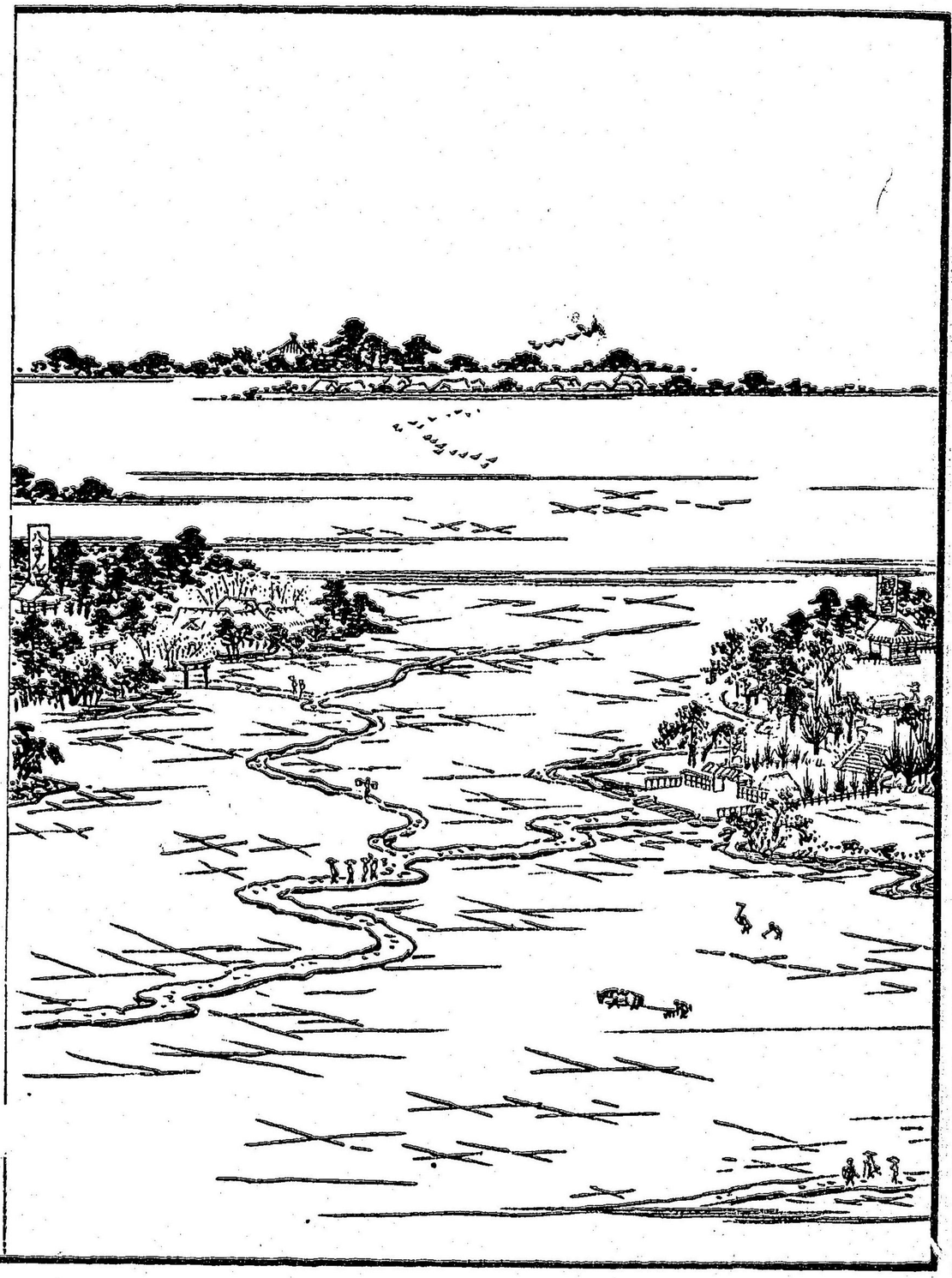
開山大僧正書写六字名号 奇特尤多し就中剣難七ヶ刀のがれありといへとも身代名号狼牙落名号火中出現不焼名号疱瘡守名号等の現益ハ普く世に高し故に毛挙にいとまあらす 寺記にありといへとも爰にのせす 其余の名号奇特尤多し

開山大僧正長悦像 開山小石川の傳通院在住の頃元禄年中瑞春院殿 御感賞のあまり御親にまみえ給ひし 大将軍家 御前において法問説法ありし 上覧ましまして長悦と賜へしと上意ありて鶴姫君様へ進せしと 御雛祭の首席につらねまゐらせたまひしを其後祐海上人へ給はりて當寺に収む 此故に毎年三月當寺にて雛祭の儀式執行あり

蜀江錦九條袈裟 増上寺在住の頃開山上人女院御所へ御血脉御法号をまゐらせし時の御観是を遣りあそはさる

累済度如法衣 二十五條なり 累ハ下総國岡田郡羽生村与右衛門といひしものゝ妻なり 顔形類ひ少き悪女なりしを夫心にあかず思ひて絹川といへる川へ突落し殺して与右衛門是を悪み情なくも 正保四年丁亥八月十一日後死骸を八同村にありし浄家法蔵寺といへるに葬るしかる其後妻五人迄累か怨念にとりつかれ狂死し猶六人目の妻の娘菊といへるをなやませしかハ開山大僧正の化益により寛文十二年壬子三月十日の夜に至て累か北六年の怨執悉く散して生死解脱の本懐を遂させしかハ普く世に知る所なり 其縁起くハしくハ解脱物語と号草紙にみえたり

開山明蓮社顕誉上人 愚心と号す 祐天大僧正ハ奥州岩城郡新妻邑の産なり 西村善内といへる者の子にて寛永十九年壬午正月元日生る幼名三之助と云 檀通和尚に従ひ縁山に修学を世に知る所の累か怨霊解脱の誉ハ尤著し 此ときハ師の歳三十六 其頃檀通師に従ひ北総飯沼に在住しける時の現益あり怨灵 後故ありて武州牛島に潜居す道俗 解脱物語といへる草紙に詳なり



碑文谷
法華寺

化を蒙る者夥し元禄十二年己卯　台命に依て下總生實の大巖寺に住持し（牛島の庵室より直に大巖寺に入院あり世以て希有とす）　同十三年戊辰飯沼弘経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未江戸小石川の傳通院に移り正徳元年増上寺に住せしむる（大僧正に任せらる縁山第三十六世なり）　後目黒の地へ隠栖せしが竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり（當寺は則祐天大僧正終焉の地なり）　一世の行状并書寫し給ふ所の名號の奇特は世人普く知所なり（開山臨終の頃まで名号書写怠らせられし人ありて是をとゞむ開山云く恵心僧都は一期の間如来を彫造し其中にして往生を遂られたり我も又弥陀の名号を書写して其中に往生すべしとて命終の日にいたる迄一日も怠らせ給はざりしとなり）

妙法山法華寺　碑文谷にあり祐天寺の南半道斗にあり吉祥院と号す天台宗にして東叡山に属す本堂本尊は釋迦如来脇士は文殊普賢なり（里諺に今存する所の堂宇は飛騨匠の作れる所なりといへり）

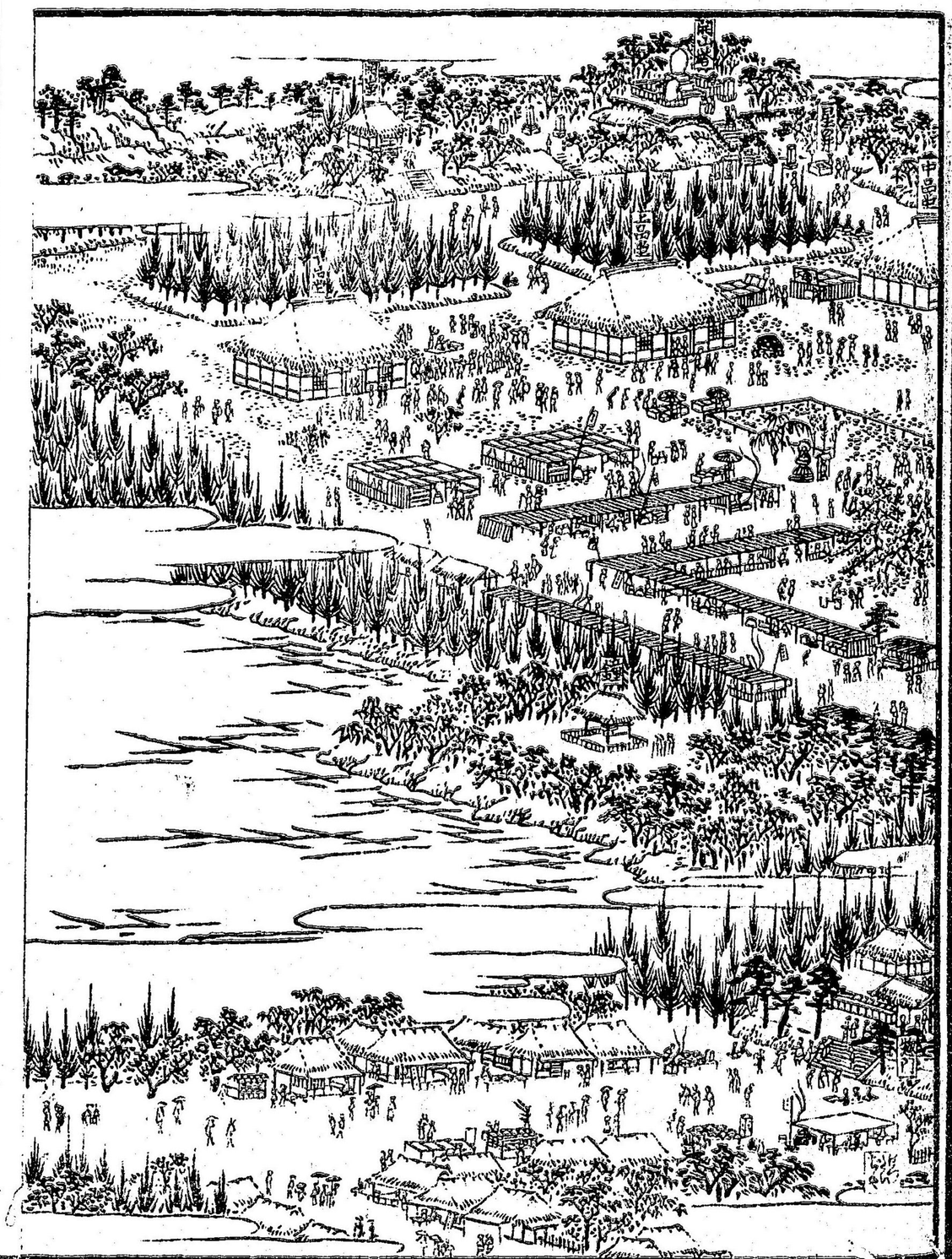
觀音堂（堂前左の方にあり本尊は十一面觀音の立像にて慈覺の作人此堂に通夜す）

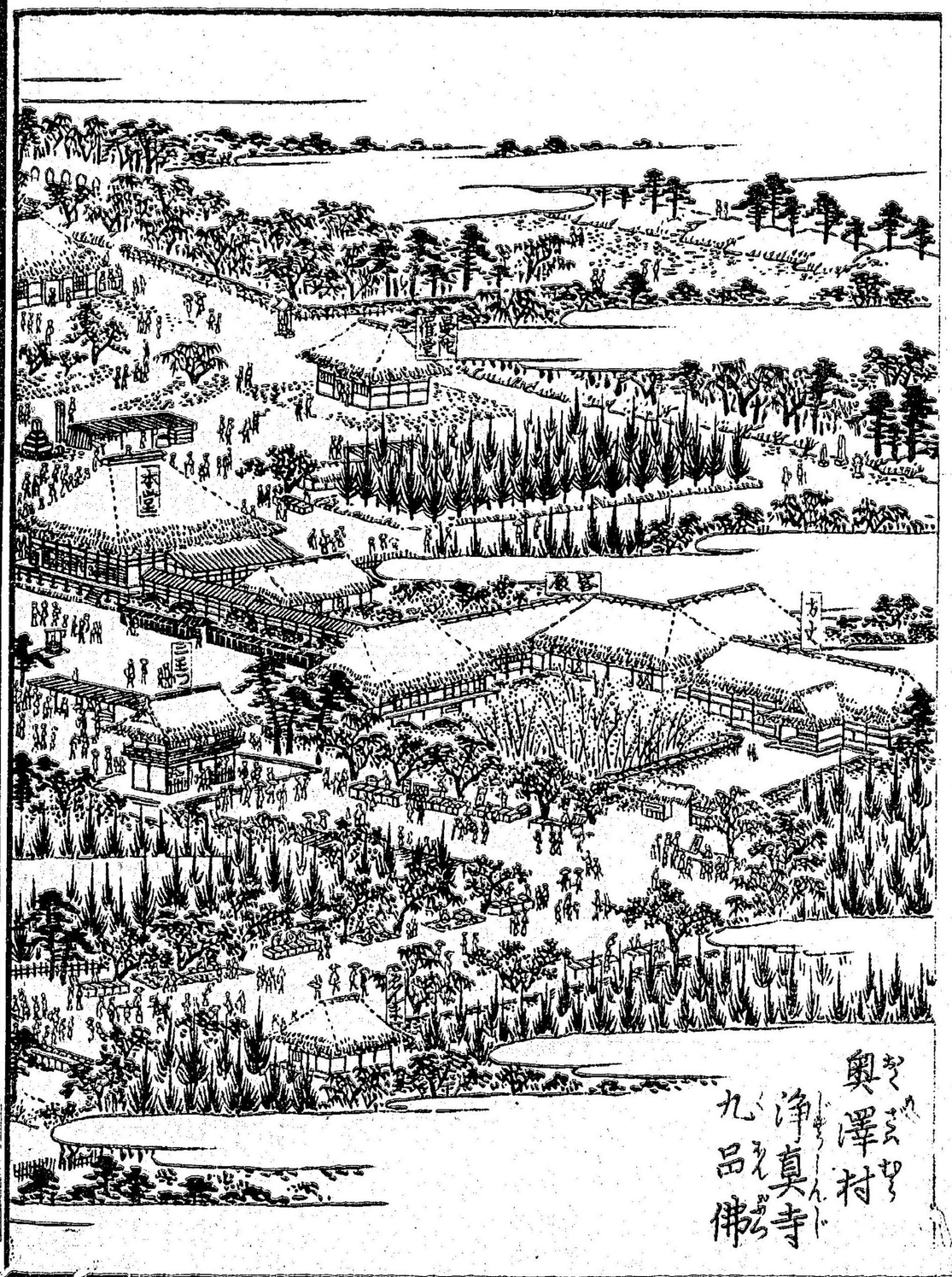
榎木（釋迦堂の後左の垣添にあり至ての古樹なり當寺開創已来のものなりとぞ其枝は垣を繞す）　二王門　金剛密迹の二像は佛工安阿弥の作なりと

いへり（靈感尤著き所にして世人の信をとる所なり寛政紀元の年己酉の頃より後十二年斗の間靈驗著しく殊に都下の人群参して道もさりあへざりしほどなりき）　當寺其先は慈覚大師の開創にして天台宗の古刹なりしが後日蓮の宗化に歸し日源上人中興開基となる竟に元禄に至て舊貫に復し元の天台宗を唱ふ（今堀内妙法寺に安置せし日蓮大士の像は當寺よりうつせるといへり）　境内櫻楓の二樹多く春秋ともに頗る壯観なり

碑文谷八幡宮　同所耕田を隔て南の方一町斗にあり相傳ふ畠山重忠の崇信せし御神なりといふ（神躰は秘物なりと云或は束帯の銅像なりとぞ）　別當は天台宗にして法華寺末神宮院奉祀す（昔は此地の農民の内宮氏の司なり此宮氏は重忠の家臣の遠裔なりといふ或人云八幡宮の西にあたる地は往古の鎌倉街道にして路傍に古碑ありしとあり或は日源上人大卒都婆に碑文を書して埋めし地なりともいへりされどもいかゞあるや此地の土民はその名をも知らず又江戸鹿子といへる草帋には忠亥といへる沙門卒都婆一基を建ありしとあり共に詳ならず唱ふる所をしるす）

九品山淨眞寺　碑文谷より一里あまりを隔て西南の方奥澤村にあり淨土宗にして唯在念佛院と号す（京師知恩院に属せり）　延宝六年戊午珂碩


中品
上品


本堂
廊下
こより
奥澤村
浄真寺
九品佛

和尚開基せる所の浄刹にして九品九會の霊場なり

本堂　本尊阿弥陀如来　丈六の木像なり　額　龍護殿　當寺珂慶上人筆

内佛　本尊阿弥陀如来像　聖徳太子四十二歳の時一切衆生の災難を除んが為に彫造ありしとなり　珂碩上人は年十八のとき深川霊岸寺の傍に庵室をむすび念佛修行す　ある頃暁一人の老僧此寺を背負来りて其来由をくはしく珂碩上人に附属あり　夫よりしてく上人の智徳盛にして貴賤の道俗利益をかうむる者少からず　是故に九品佛彫造の資財足しかば此霊像の胎より諸佛天三万六千躰悉く成就しけりとぞ

地蔵尊　本堂の向小堂の中に安置す　開山珂碩上人の本地佛と称す　恵心僧都の作なり　此尊昔丹波國其濃山に立せたまふ　その麓に住む大江繁時といふ者悪逆無道の狩人一時山に至て急雨に逢ひ件の地蔵堂に休らひし時堂宇破壊し佛躰雨露の為に浸されたまふを憐み自の冠りし笠をかぶせまゐらせ奉りし因縁にあり　一度死して冥府に趣しとき此尊像繁時の苦に代りたまひ再び娑婆へ返したまふとなり　其後故ありて高野山に移りたまひしを了山法印當寺開山上人の道光を慕ひ是を附属ありしとなり

開山珂碩上人像　客殿に安置す　上人生前如来の霊示再三なるに依て是を彫造ありしとなり　此背像に添置れし開山自筆の書あり　其文に曰

此像は如来の告三度に依て彫刻せるなり　末代の輩此像に結縁せん懇望の諸衆難を除き未来は必浄土に導べし

珂碩　四十二歳　印

万治元年戊戌七月廿四日

此故に世人除厄の影像と称せり

曼陀羅堂　本堂の左にあり　中尊は弘法大師の作の三尊の弥陀像を安置す　往古深川大島村の念佛堂にありしを堂守浄性といへる沙門當寺へ移しまゐらする　其餘五智如来および超載永劫佛五劫思惟佛などを安ず　此る像は面ぬくらかにして他の像に異なり

中品堂　同じ右に並ぶ　中品中生中品上生中品下生以上　三品の阿弥陀如来の像を安置せり

上品堂　本堂に倚ふ　上品中生上品上生上品下生以上　三品の阿弥陀如来を安す

下品堂　同左に並ぶ　下品中生下品上生下品下生以上　三品の阿弥陀如来を安す

以上九品の阿弥陀如来九體を安置せり　各座像にして一丈六尺あり　佛像一躰毎に圓光ありて附せる所の小佛一千十一躯　九躰共にあつまりなれども開山珂碩上人の彫造にして開山常に一日三銭を貯へ造佛の費に充　寛文四年より同七年に至て其間三ヶ四年竟に九品の弥陀像全く成就せるをもとより此所なる初は霊岸寺の地にありしか洪波の為に破らるる後延宝六年戊午ことごとく此地に移す　或云珂碩上人諸堂不成して遷化せらる　従弟珂憶上人河州玉手山安福寺よりすゝみて建立せしと云　九品堂の額はいづれも珂憶上人の筆なり

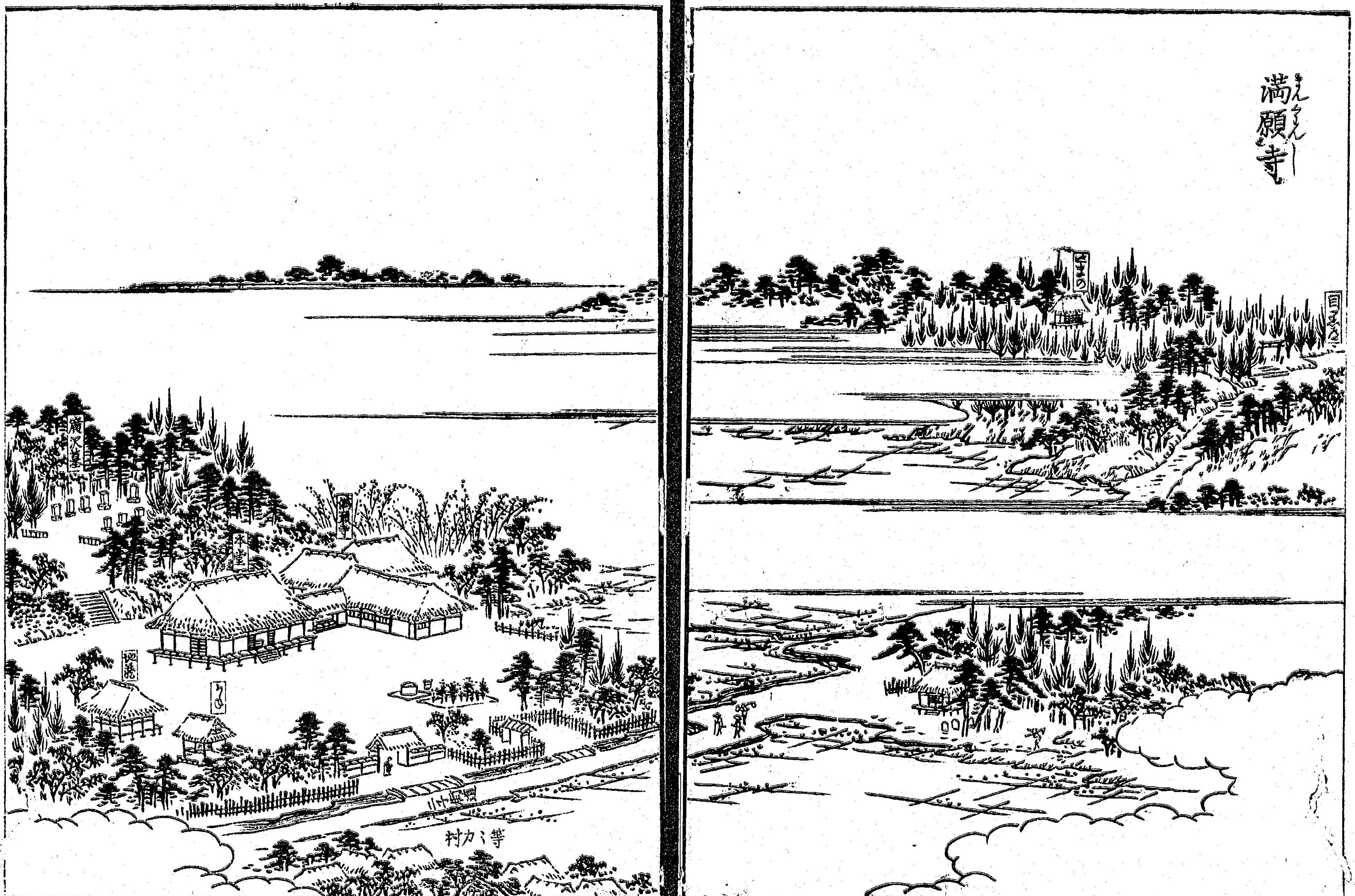
開山堂　上品堂の後古城跡堤の上にあり
開山珂碩上人七十二歳の影像なり　奥澤九品佛縁起に椅子にかかり杖を服に置とあれども立像にして合掌せり　躰相あり　按可孔

開山珂碩上人廟　開山堂の右のつきにあり　奥の院と唱ふ　近頃石の離を造り敬く

星の井　開山廟の前小坂の上にあり　有信の人偏に称名すれは白日といへとも水底に衆星の光を見るといへり

鐘楼　本堂の右にあり　九品の阿弥陀如来の像を鋳る　寛永五年に造る所の鯨鐘なり

楼門　同じ前にあり　楼に二十五菩薩の像を安置す　楼下にも金剛密迹の二王の木像を置り


満願寺
本堂
等ゝ力村

額 般舟場 當寺珂慶和尚筆

芝枯大名号一幅 長十三間巾九尺白布十反を合せ用ゆ珂憶上人の筆なり草木國土悉皆成佛の意也に住しく書れし故に草木に掛

芝ハ六字の通りて芝枯るゝ故に名とす

阿弥陀如来画像 珂憶上人の筆にして細字の六字名号をもて佛躰の姿を書つらねし像なり

十念名号 珂碩上人臨終の頃筆せられしとの徒弟の筆師の別れを惜みて請ふ故に名残名号とも号く其余なる傳の筆の名号数多し

亡者の帷子 昔芝西應寺町鳥羽屋三郎左衛門なりける人の妻難産にて死しけるを後珂碩上人の十念脈符を授て冥府の苦を遁れ成佛しけるよしをあらはし其證として亡霊の残し置たる帷子なりといへり

亡者の文 提氏何其の先妻女の死霊珂碩上人の徳化によりて成佛しけるよし此あまりかの先妻の亡霊後妻の一文不通なりしものゝ手をかり用ひて書る文なりと云

攝待大茶釜 當寺に収む毎年四月千部の修中此茶釜にて茶を煎じて衆人に施し寛文年中山城宇治の茶師宮本仁左衛門といへる人継母の怨念によりて病を受られしに當寺開山珂碩上人の利益にて継母の死霊佛顔をゑく仁左衛門病頓に平愈す其頃珂碩上人再興ありし深川大島村常念佛堂の堂守浄正のもとへ報恩の為に宮本仁左衛門より寄附ありしとなり来由ハ寺記に詳なり其銘に曰く

南無阿弥陀佛 奉寄附鑵子一口 為二親菩提
于時寛文八年霜月廿五日 當九百日 武州豊島郡
葛西荘大島村念佛堂常住物 沙弥浄性 施主山城
國宇治里宮本仁左衛門 鑄物師釜屋ハ右衛門

開山大蓮社超誉上人珂碩和尚ハ松露と号す俗姓ハ野村氏武州の人なり元和四年戊午正月元日に生る江戸覚真寺の圓岩に投しく難渋し十八歳にして業を珂山和尚に受 珂山和尚ハ下總生実大巌寺に住せ 和尚後年武陵の霊巌寺に住持せる頃師も亦従つてかしこに移る初越後國泰叟寺に住し後此地の郷民の招に應じ歳七十七の時武州に帰て世田ヶ谷奥澤に幽棲せ 當寺 遂に元禄七年甲戌十月七日化寂せ 本朝浄土高僧傳に元禄八年報壽八十許にしてく入寂せとあるハ誤なり 師の姿貌温雅にしく慈恩尤深く奇験孔多し凡在世の感應ハ勝数せへからく其うち最煥灼として人々是を傳ふ 以上浄土傳燈系図上之傳本朝浄土高僧傳の意を採る

當寺ハ不断念佛の道場にして閑寂玄隠の浄舎なり 毎年四月三日より同十二日に至る迄十日の間阿弥陀経千部讀誦修行七月十六日より同十八日迄虫拂して當寺什宝を出し諸人に拝せしむ

此寺境内ハ昔小田原北条家の属将吉良家の老臣 大平左馬 或ハ弱守とも とひし人の構へられし塁隍の旧跡なりとして今も北より西南の方へ

繞らく堤の形空堀の跡を存す後門の方ハ大沼なくありしとあり今ハ耕田となれり

大平山　奥澤新田村にあり大平出羽守の砦の跡なりといへり按に等々力村満願寺所蔵の天文弘治の古文書に大平清九郎といへる名出て見え又大平左馬と云も此人の事なるへし

致航山満願寺　二子街道等々力村道より右にあり新義の真言宗にして山城醍醐報恩院に属せり開創の時世詳ならす中興開基を定栄法印と号す慶安年間寺領に寄附の朱章をあたふ本尊ハ大日如来なり当寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈願所にして其頃ハ頗る盛大の寺院なりしとあり世田谷私記追加に云当時住古政忠の男経弁住職を豪徳寺所蔵の吉良系図にも政忠の子経弁満願寺留とあり当寺には天文弘治天正等の年号ある吉良頼康北條氏康氏政等の證状或ハ書簡あるを凡て十八通許あり其文中に世田谷深澤村の満願寺とあるハ其故を知らす昔等々力ハ深澤に属し小名なりしにや又ハ深澤より等々力へ引移りしにや今考へからす文明古文書の中一通には医王山満願寺ともあれは是ハ後世致航山に更めしなるへし猶可考のみ總門の額致航山の三大字ハ小篆にして廣澤先生の筆又本堂の向拝に掲く満願寺にハ

息男九皐の書なり

大義村年貢七十貫文納 石井戸新開郷内満願寺へ一貫分
丈残七百五十文之内 ○夫々二百五十文 勝未之
某村十一貫文皆納 高田分二十貫文皆納
江戸河東十二貫文皆納 熊谷分五貫文 皆納
弘治二年丙辰十二月十六日 吉良家印

世田谷之内満願寺之事 為前々同様分之田畑任為永代連々改寺家
再興為之 於様以下動之事之様之者也 委細於来法修寺之事分に
成之致候

天文廿一年壬子二月大吉日
左兵衛佐判
宝音寺

世田谷之内 弦巻村満願寺分之事 於年 諸役之事一向不可有之候
為後日証状如件

天文二十三年甲寅卯月大吉日
左兵衛佐頼康判
満願寺

於(?)世田谷山満願寺再興之為永代 諸役不入者也 而無之 不可有(?)
不之有此旨於為後日證状如件

甲寅二月吉日
刑部大輔頼康判
満願寺

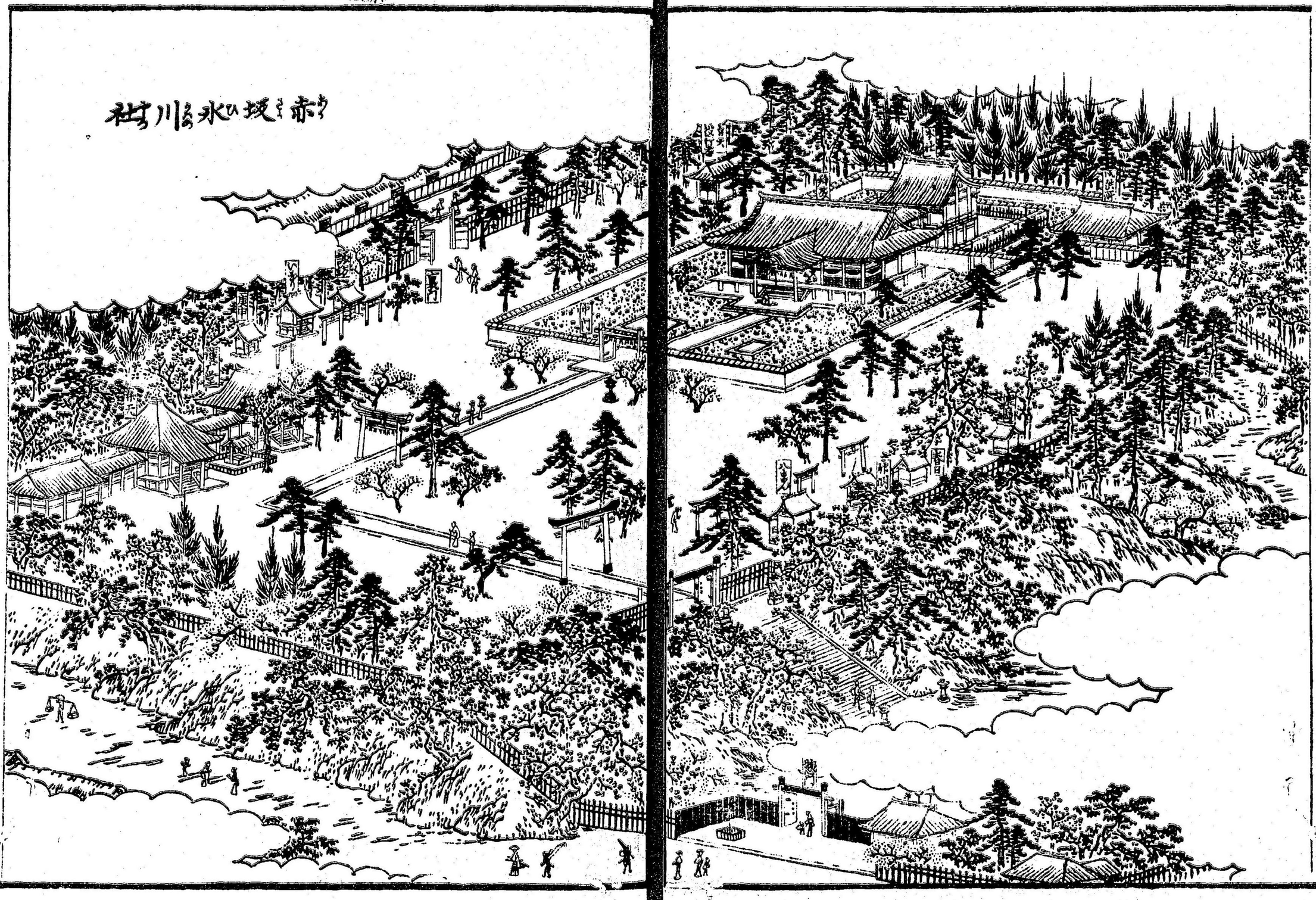
此古文書満願寺并に農家等に散在して全からぬをとゞめり

廣澤先生之墓 同境内堂より後の方岳の上にあり
廣澤先生ハ細井氏通称を次郎太夫といへり 或ハ思貽庵蕉林庵等の号あり
もと江戸に遊んで書法を雪山にまなび 若冠にして柳澤侯に仕ふ 後致仕して城西
青山に隠る 紫微字様 観鵞百譚 撥鐙真詮 篆體異同歌 奇文不載酒 字林長歌
等の著述あり 碑面左の如し

正面 廣澤先生細井君之墓
左面 豪德院不孤有鄰大居士
背面 諱知慎字公謹號廣澤 姓藤原氏
細井父知治母山本氏
萬治元年戊戌十月乙亥八日壬申
生遠州懸川
享保二十年乙卯十二月己丑廿三
日戊子卒于江戸城西于寓享年七
十八
右面 孝子知文建

其余先生の父母及び息男九皐等まで悉く細井一家の塋域と為して塋をならべ
なる中にも同姓の人の墓碑あり 孝子知文とハ則九皐のことをいへり

赤坂御門 糀町の方より青山へ行く道 赤坂への出口なり 此御門ハ
北斗形とて江戸御城の御構へ多きが中にも殊更勝れて縄張


社ノ川ノ氷ヒ坂ヨリ赤ク

なりといふ　或人の説に赤坂ハ茜山の辺の坂なれハかく云と按に赤坂の地名ハ永禄二年小田原北条家の所領役帳に江戸赤坂六ヶ村千葉殿所領也とあるも武蔵国風土記に荏原郡赤坂庄とあり今ハ豊島郡に属せり

氷川明神社　赤坂今井にあり　此所を世に三河臺といふ天和の頃松平参河守殿の屋しきありし故に名とす

聖護院派の触頭にして大乗院と云　祭神当国一宮に相同し

赤坂の総鎮守にして祭礼ハ隔年六月十五日永田馬場山王権現

と隔年に修行す　江戸名勝志惣鹿子等の草本には当社元一木村にありしを享保十五年己酉今の地に遷座社を御造営ありと云く

按に当社を古呂故宮とし又享保中一木より今の地にうつしまゐらし諸書に見えあれとも詳ならす寛文江戸図に古呂故宮と称せるものを今の一木に記しく氷川明神ハ同絵図に今の地に記しありもつとも然ハ各別の社なるへし江戸名所記に天暦年間江州甲賀郡に讖林と号す沙門あり天台四明の法灯をかゝけ一念三千の観行を凝し東国遊化の頃此あたりに一夜を明し夢中に霊示を得く土中より十一面観音の像を感得しこゝに安置しく一本観音と称す讖林化後治暦二年丙午関東大に旱す万民当社に雨を祈るにしるし験ありしより氷川明神と崇めまつるとあり

古呂故天神社　同所一木の地赤坂田町にあり或ハ小六に作る別当ハ

洞家の禅宗にして清徳寺と号す

武蔵国風土記残編曰　荏原郡赤坂庄小六天神或

古呂故圭田三十五束　三年田天武天皇三年甲戌

十一月始行神禮有神戸亜戸所祭大已貴與少彦

名園韓神也號小六者以古呂故岡之名也云云

按に紫の一本に此大明神元当国八王子の辺に氷呂子と云所あり其所の氷川明神を此所へうつせり道灌の書に氷呂子の某と云すありと云又同書に及ひ江戸名所括の書に慶長の頃関東の小六とて美貌のきこえある馬追ありく此赤坂に住を常に氷川明神を尊信し後其家富るに依て社の破壊を再修す故に後に小六の宮とあれとも誤と知るへし江戸めくりに小六明神と日本武尊の垂迹ありとあり諸説紛々として詳ならす始く風土記の説を用ゆへき歟猶可考の

信康山龍泉寺　同所一ツ木町道より右側にあり浄土宗にして花洛

知恩院に属せり開山を随流和尚と号す寛永十一年の開創なり

当寺仏元和尚ハ扶宗の志厚く曽て字信録千巻を著し刊行

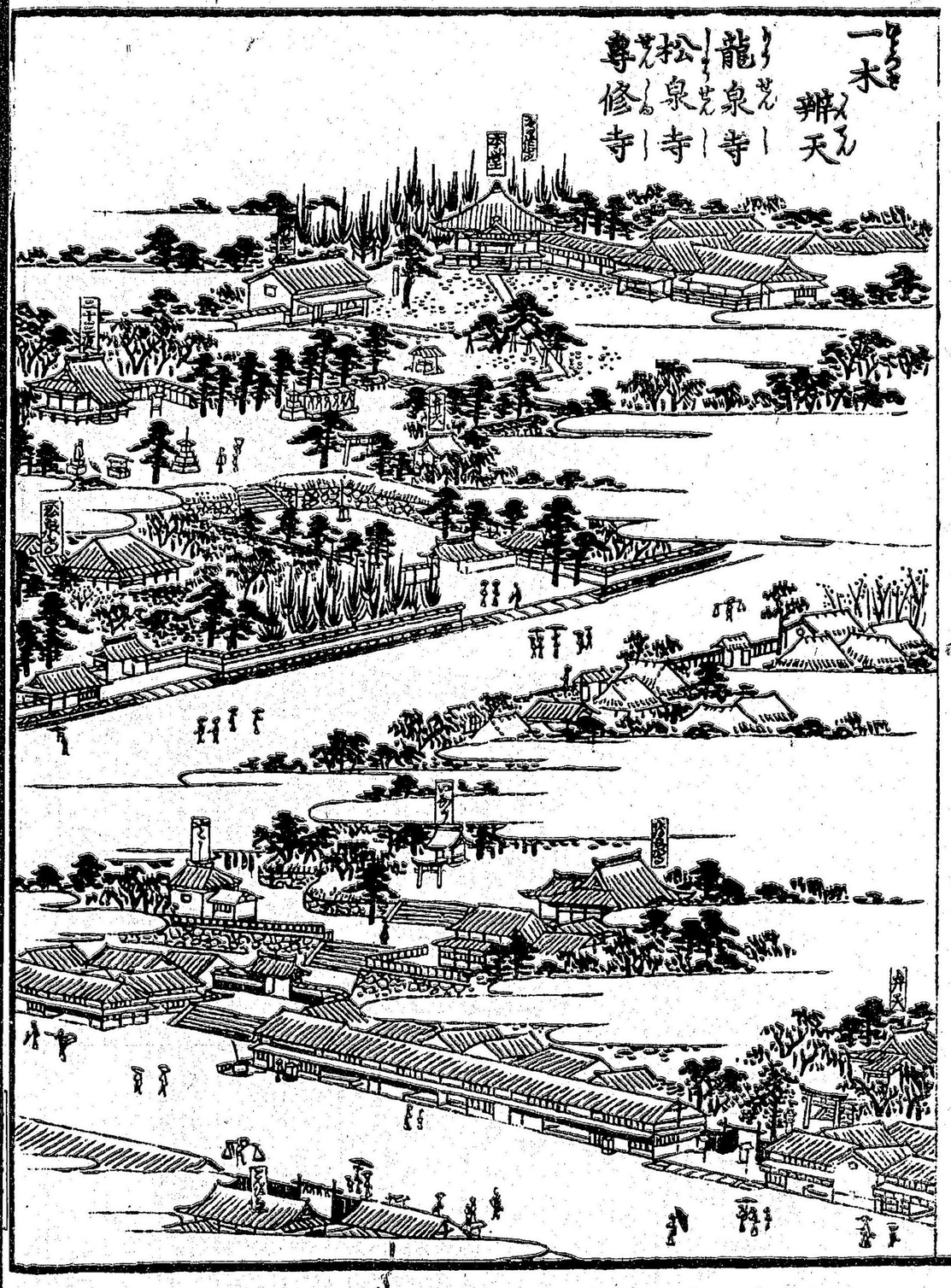
して普く学徒に示せり尾州の産なり当寺に子安観世音を安

置せり聖観音にして伝教大師の作なり又同し相殿に薬師仏

をも安せり同作なりと云世に一木観音一木薬師と号す本尊ハ立

像にて丈三尺余の弥陀如来行基の作なり脇士観音勢至両

像ハ作者しれす又境内天満宮の宮ありく稲荷を相殿とせり



天満神の神像ハ東叡山慈眼大師作らせらるゝ由なり
云伝ふ

平河山浄土寺　源照院と号ス同所龍泉寺より半町程南の方
同一側にあり浄土宗にて縁山に属す本尊ハ阿弥陀如来ハ座像
四尺餘作者詳ならず開山ハ敬誉聖公上人と号せ中興を源蓮社
誉利覚一故と号けるを當寺昔ハ城内平河口の辺ありしを
元亀三年今の地へ移されしと云

一行山專修寺　同所寺町ありこれも縁山に属する浄刹
にて本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作丈三尺開山ハ敬蓮社
曇誉上人と号ス昔ハ青山にありしを勢至菩薩を安せし草堂
なりしを永禄年間開山上人一宇を梵宇とし其後赤坂水川
明神の辺へ移せしを又寛永年中元禄年に至り同寺町へ地をめぐらし遂に
元禄より至る今の地へ移せり（往古より安置の勢至菩薩の霊像ハ今ハ當寺に存せり金銅
甚古仏なり）

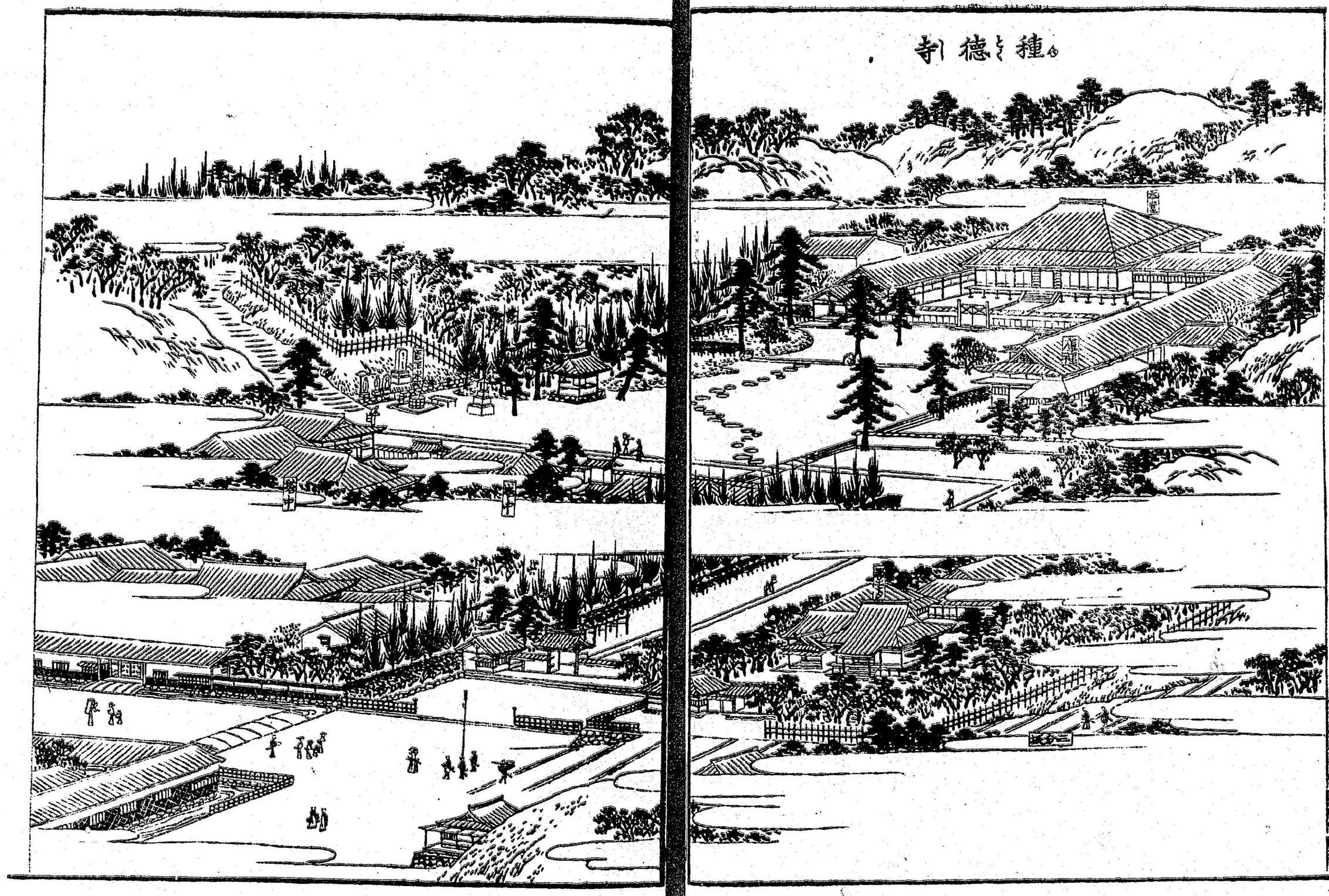
一木原　今赤坂傳馬町の裏通り僅に一木町の名を残せり昔ハ此辺なへて一木原といひ矢盛荘七郷の中なる古き名なりと云　中古より上下と二ツに分ち川上一木ハ四谷鮫が橋の辺をいふ今四谷にある坂下禅閣薬王寺といふ薬師如来の霊場あり昔其境内に大木の榎あり是を一木と云又下一木ハ此赤坂中にて同所清岸寺中にも薬師あり是も薬王寺の霊像と同体御にて共に一木薬師の称あり昔ハ此寺にも大木の榎ありしとぞ其のちを人次と書しを彼大榎かれしより後一木と書改めらると云伝ふ　北条五代記大永四年正月十三日北条氏綱上杉朝興と打勝敵の首とも實検し一木原に旗打揚作法の如く勝鬨を執行ふよし見えたるを　北条家の所領役帳に大田大膳亮所領の中に一木貝塚の地名を加へたり貝塚を糀町にありしそれハ糀町の辺も一木の内なりしとぞ或人云此地町屋にありしハ天正十九年の頃なりと

狩野興意墓　同所三分坂下霊鳳山種徳寺の境内にあり當寺ハ大徳寺派の禅園にして昔ハ相州小田原にありしを天正十九年糀町に引き後又當所に移さる開山ハ東光知灯禅師と号す医王水も當寺の霊泉なり

今井古城址　氷川明神の西北の方松平藝州侯の中屋しきの地をいへり今井四郎兼平が城址ありといへり紫の一本と云る草紙にハ齊藤別當實盛の城とし或ハ田子先生義賢の出城なりともいひ傳へたれとも共に詳ならず　北条家の所領役帳に大田新六郎渡辺丹後といふ人此地を所領に加ふ又此辺氏家系に宮内少輔勝行北条家より此所を所領にありといふとあり

赤根山　紀州公御中屋しきの地をいふなり昔ハ此地に多く茜を産せし故に茜山とよびたるとなり今紀伊國坂と呼ふ地昔ハ赤坂と称へしとなり赤根山の坂なれハかく赤坂とぞ号けたりと云

圓通寺舊跡　同所寺町にあり此地申の方より寅の方へ向ひて下る坂を圓通寺坂と云も此故なり今此地に佛智山圓通寺といへる日蓮宗の寺あれとも古の圓通寺とハ異なり往古廢せし圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といへる沙門建立せる所なりとぞ銘ハ深草元政法師の撰せる所なり其鐘今ハ亡ひたりといへとも古き銘存せるが草山集に出るを以てこゝに記して其旧跡を失ハざらしむ


種々徳寺

赤坂圓通寺鐘銘並序

武州赤坂圓通寺募鑄千斤銅鐘備乎十二辰之候
按大集經菩薩應類悲願化作十二獸在宝山中
修法縁慈而為一切精懸之主制彼時亂護持世界
圓通之舉其意在放住持僧某介於人乞銘於余因
以十二獸弁之句勒為十二韻贈焉客曰雖然如其
似遊戲何余曰諸佛菩薩為羣類示種々身現種々
土設種々法以至吹螺擊鼓鳴鐘悉是真不遊戯故
云遊諸世間如幻師如兒戲余亦窃學之人也會作
此銘又遊戲翰墨為佛事其為似遊戲也亦宣
銘曰

鼠山流光人未驚
虎狼野千氣縱横
龍宮高處擊華鯨
馬腹忽變聖胎成
猿啼霜降月色清
狗不夜吠王舍城

牛王出世振梵聲
兎角方便誘群情
蛇室睡破覺心生
羊鹿牛車休後裏
雞人未唱客先行
猪觸金山轉峥嶸

崑崙山玉窓寺　同所右側青山家の邸弟の間にあり禪宗なり
開山ハ普光禪師開基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉なり故に
寺号とせり本尊觀世音の像ハ中将姫香を以て是を製する所と
とぞ（青山ハ赤坂の西澁谷より八北なり此地のもとより麻布の郷に屬せり天正の後此地を青山因幡守忠俊にたまふ其頃ハ澁谷麓への街道も共に攔への中にして殊に廣かりしより其中間に路を開き兄弟路を隔て住居せられしより忠俊の寺ハ道より北にありて玉窓寺と云則當寺是なり又道より南にあるを幸成の寺とせらる梅窓院是なり或人云此地ハ天正の頃山口重政の第宅なりしを後肇の高木主水正正次に地を割て與へられしとなり故ありて後此地を青山家に賜ふところ其地の廣かりしよりひろく青山と唱へ来るなり）

百螺山鳳閣密寺眞言教院　當寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と
號し諸國兒驗末寺の總綱たり本坊ハ和州吉野郡鳥栖山に在て
開基根本理源大師諱を聖寶僧正と號す光仁天皇乃皇子
葛聲王の令子なり弘法大師の肉弟真雅僧正に投して剃度し
螢雪の功年を積南都の諸名公に叅して法相三論華嚴唯識を
學ひ慧業日々に進ミ給ひしかハ萬乘の聖主一時の公卿尊師
の徳を仰慕しまふこと浅からされハ時に宇多天皇寛平元年己酉
尊師年五十八大和國金峯山に毒龍栖とあり霖雨洪水五穀
登らされ山中修歴の徒もこれかために廢絶せしに於て天皇宸襟
を惱し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉り

金峯に分入て法威を震ふて龍を伏し抖擻修行の道を再興し
次て奏聞を經て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり即
尊師の上足貞崇僧正をもつて第一世とし昌泰三年始て此處に
於て峯受灌頂の密法を興行しなふ爾来七百餘年を經て元禄
年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總綱の役寺
とし　神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して
天下泰平國家利民の御祈願所とし毎年の四月八日七月十九日
にハ順逆二峰の神事柴燈護摩の儀式あり此日諸人群参に
當寺本尊不動明王ハ靈驗の尊像にして里人出世不動尊と
称して常に詣人あり脇壇にハ神變菩薩理源大師の像を
安置す寺内に三峯權現稲荷の小祠あり境内に櫻樹有暮春
の頃清賞あり此樹ハ當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を
取りてもと昌平坂の舊地に殖て高間櫻と名つけたる名木

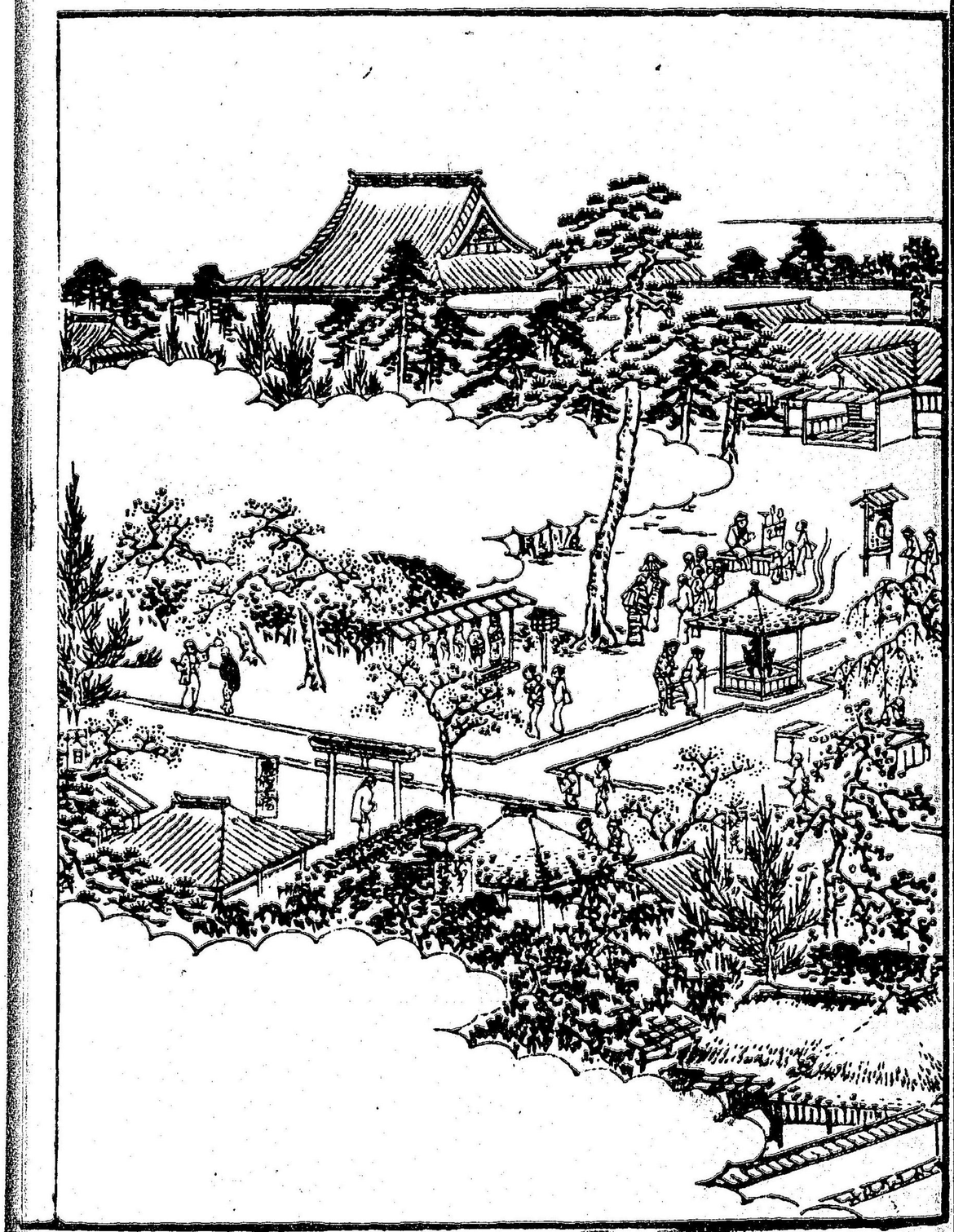
なりしか寛政年中聖堂御造營の節替地を賜ひて當寺は
今の處に移されし刻舊樹ハ枯て僅に蘖生の若木を存し
高間櫻の名を遺せり當寺の西隣ハ即梅窓院なり

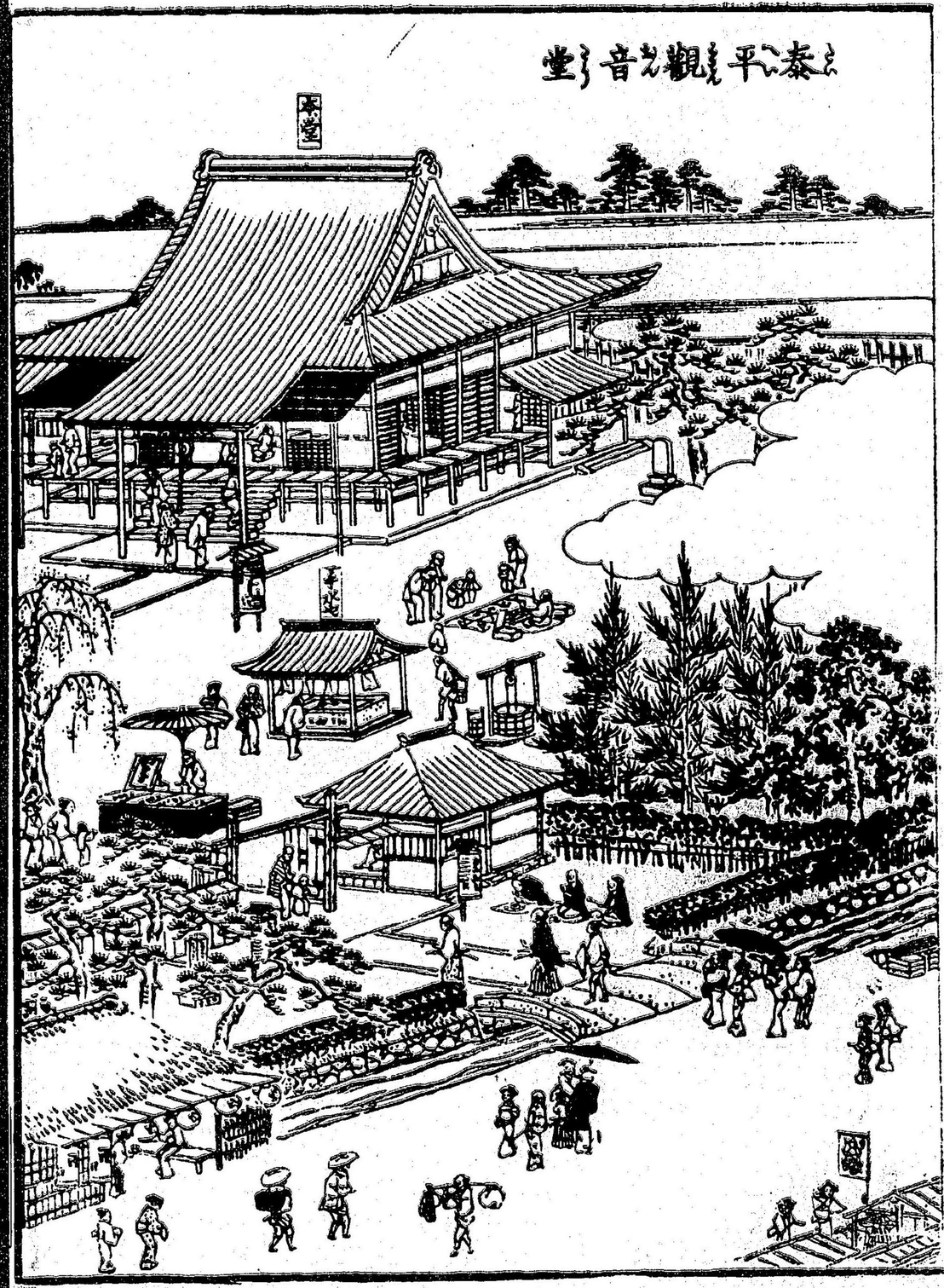
長青山梅窓院　寶樹寺と号す青山久保町道より左側にあり
淨土宗にして京師知恩院に屬す　當寺ハ青山家累世の布金の佛閣なり　本尊阿弥陀
如来の像ハ聖徳太子の作なり當寺ハ寛永年間戴蓮社頂誉
冠中南龍和尚開基し觀智國師を請して開山祖とす　國師ハ縁山
中興開山なり　惣門の額長青山の三大字ハ黄檗悦山の筆なり

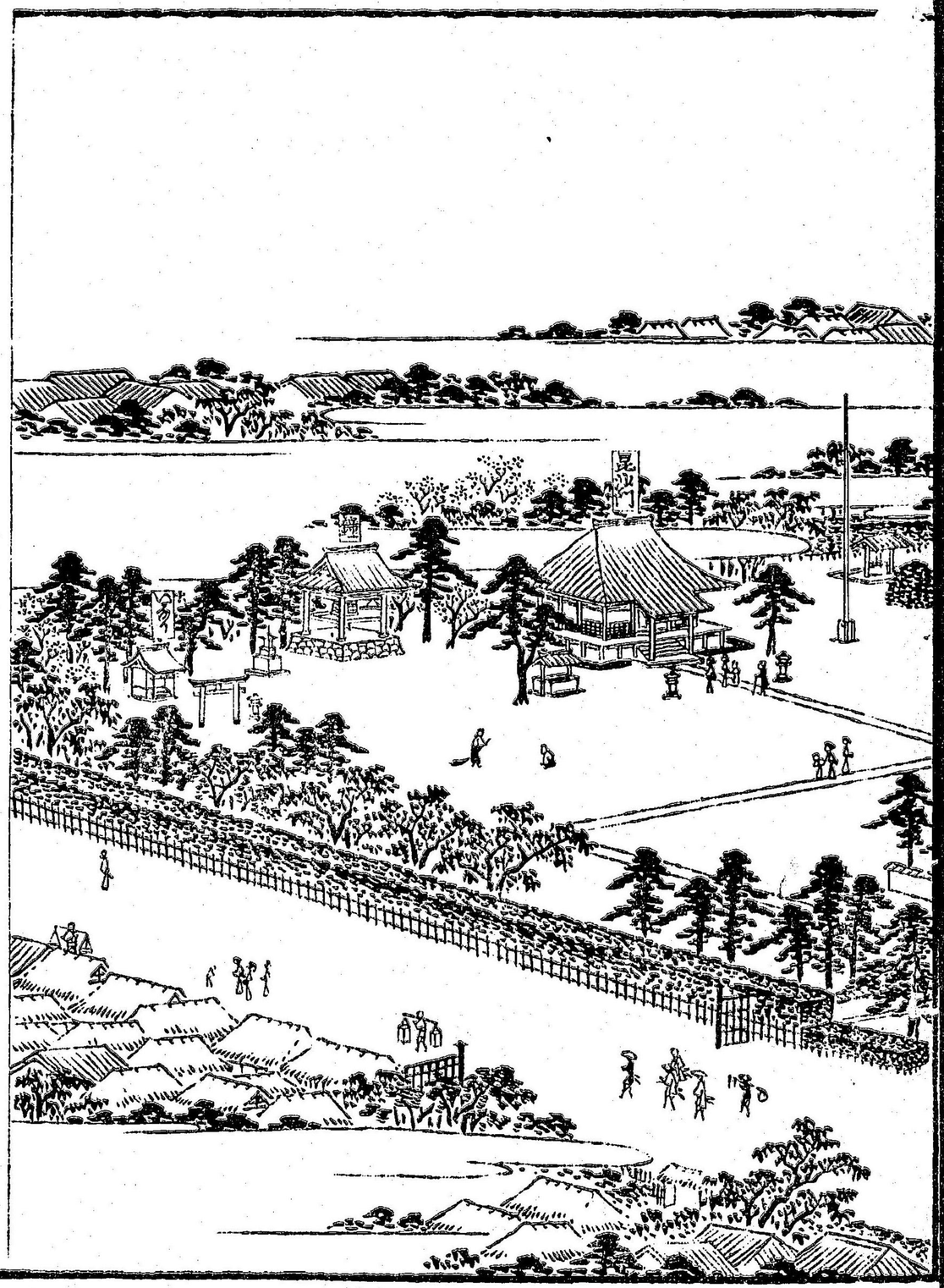
泰平觀世音　自然銅の立像三寸五分の千手大悲の靈像なり天竺佛と称して
聖武帝より獻り南都大佛殿の像にありしを源頼義公兄弟奥州追討の頃此靈
像を奉持して陣中守護とし凱陣の時奥州伊達郡に安置ありしを故ありて
青山家に傳り後又當寺に寄附せらるしと云　羅漢堂　中尊ハ銕銅の釋迦左右ハ
其驗いちしるしとぞ常に参詣絶す　十六阿羅漢および二十五
菩薩等の像を安置す　鯨鐘　樓に掛る寶永七年十一月當寺第八世法蓮社壽
譽上人の時旧鐘を鑄改んとせしに或夜龍女
夢中に告て我今畜身を解脱せんが為一面の鏡を投来らん願くハ
是をかへて鑄まじへ衆生をして佛果を得せしめ給へとあり夢覺て後枕上に一面の

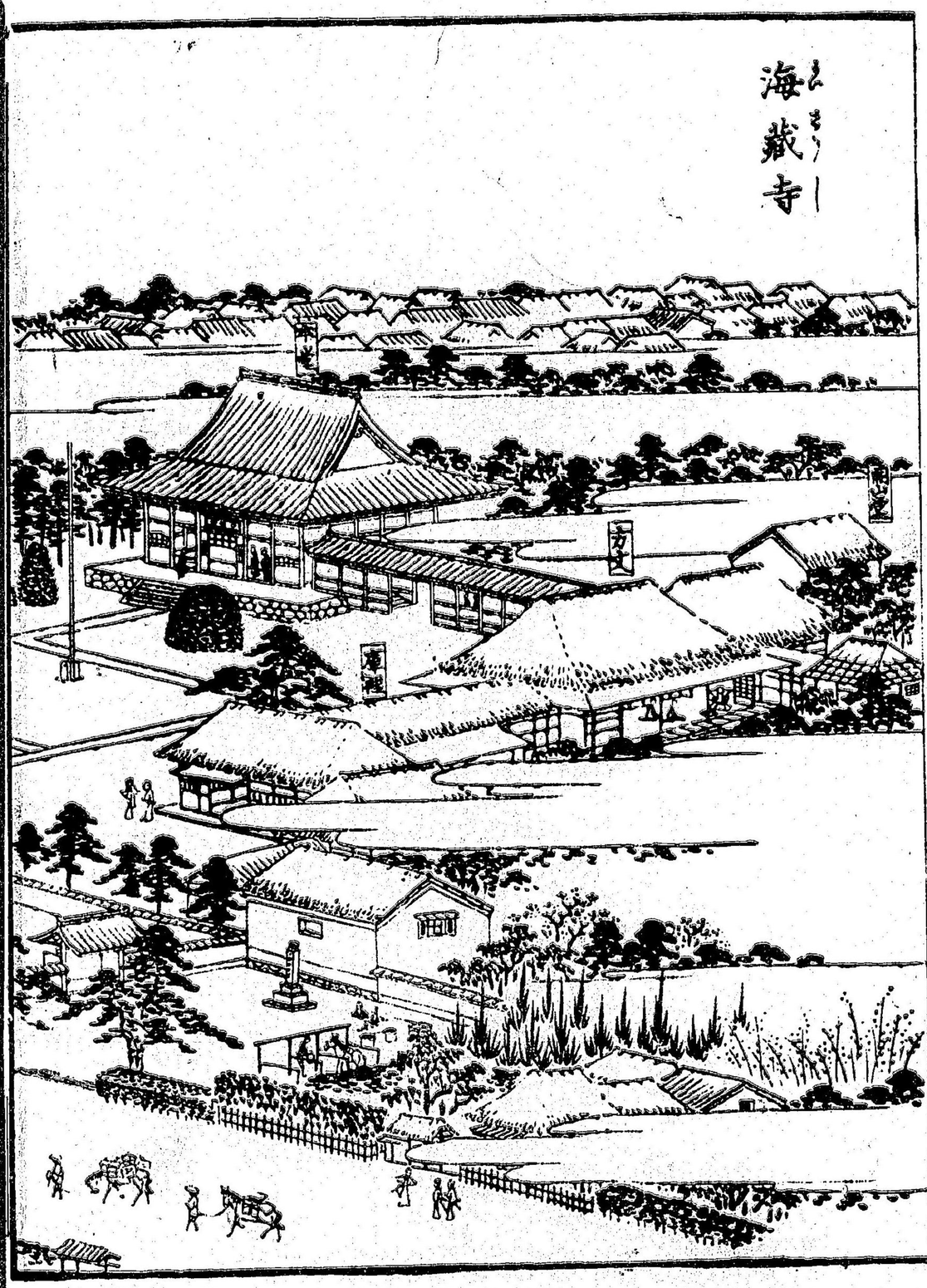
泰平観音堂

本堂









海藏寺

鏡を存せり所是を奇とし其鐘とも加へて終に洪鐘成就を依其證として夢に
みえし所の龍女は宝光裕龍大姉と法号を授へられし鏡の面に其号を鐫ましむ

揳地蔵尊 慈覚大師の作なりといふ當寺九世順誉上人北總行徳の海濱湊村の法傳寺にいませし頃夢中靈應によりて同所の海岸にして感得あり海岸揳ありて水を得さし然に其揳と思ひしハ則此なるなり故に名とす

百済稲荷 享保の始和州百済より縁山へ下向の僧に託して此梅窓精舎に鎮座ありて永く衆生を度せんとありしに依て一社に奉すと云ふ

拾櫻 當寺第二世峰誉上人門前にありし苗木をおほひ親栽られしとして今堂前に存せる所の無枝櫻是なり

虚空蔵堂 卵塔の奥にあり安置する八座像にして長二尺あまりあり當寺順誉上人作られしといふ

青山海蔵寺 同所一町あまりを隔て乾の横町右側にあり黄檗派の禅宗にして始ハ海蔵庵と号す寛文十一年井伊侯夫人掃雲院殿の営建なり其頃鉄眼禅師をしく此草庵に居らしむ竟に正徳三年に至て公許を蒙て一字の蘭若とす

菊岡沾凉云開山宝州和尚と云く 當寺より唐板の一切経を出せ

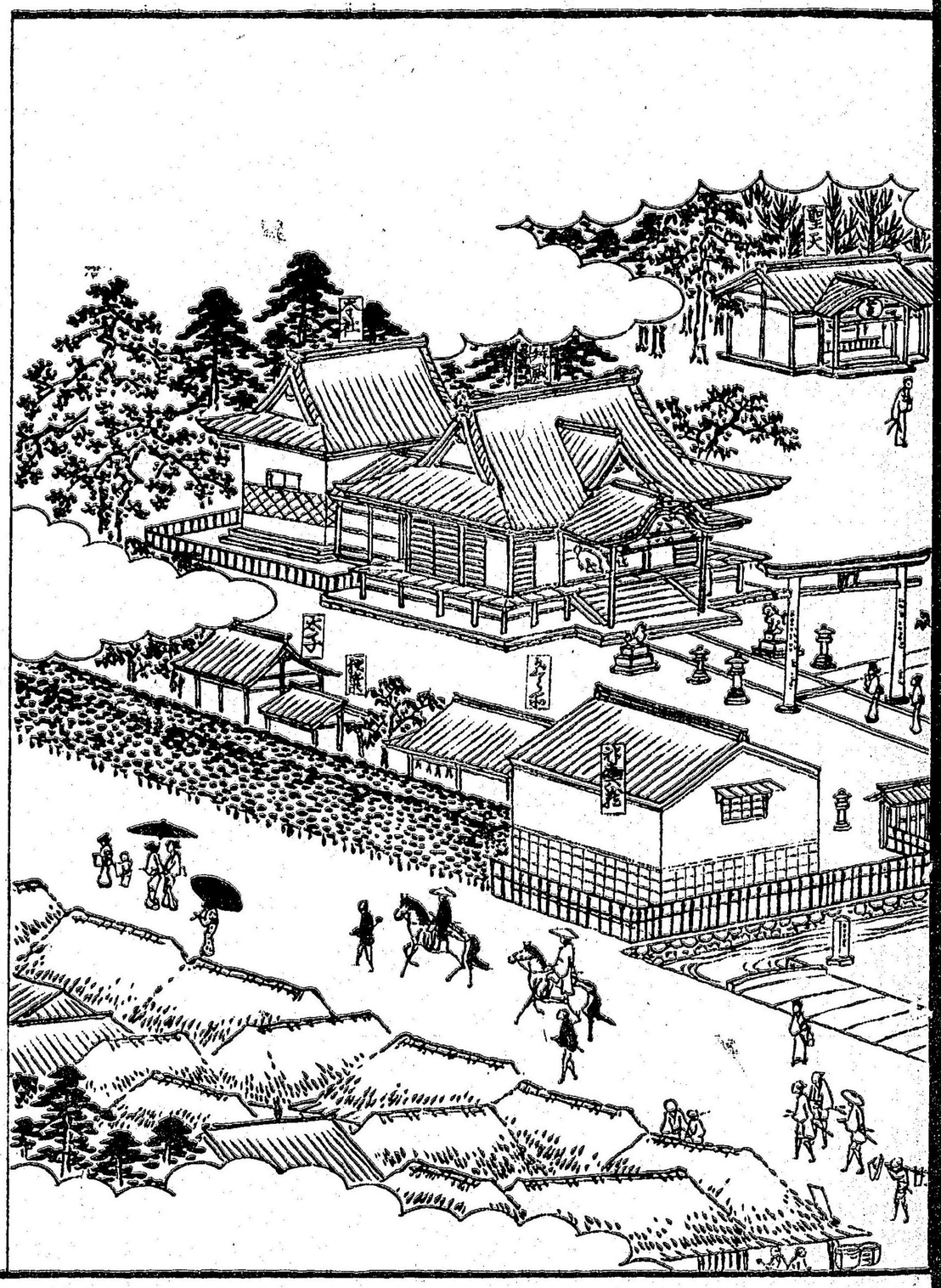
熊野権現社 同所東南の方三丁斗を隔て原宿町にあり祭る所南紀の熊野権現に同しく三社なり青山の鎮守にして祭礼ハ隔年九月廿一日に修行す別當ハ真言宗にして浄性院と号す

心見観音 同北に隣る天台宗にして竹園山教学院と号す本尊ハ聖徳太子の真作といふ

南命山善光寺 同所百人町右側にあり信州善光寺本願上人の宿院にして浄土宗尼寺なり本尊阿弥陀如来ハ長一尺五寸脇士観音勢至の二菩薩ハ共に一尺つゝなり称徳天皇の景雲元年八月十五夜法如尼和州當麻の紫雲庵にして念仏誦持の頃信州善光寺の如来来現ありしを拝し奉り直に一刀三礼にして其尊形を摸さる是則當寺の本尊なり

當寺ハ永禄元年戊午の創建にして始ハ谷中にありしを中興光蓮社心誉知善上人明観大和尚の時宝永二年台命に依て此地へ遷されるとあり 今谷中に善光寺坂と号るハ其旧地なるか故にして其旧跡ハ今の玉林寺の地なりと云 什宝に中将姫自の毛髪を以て製造せる所の六字名

熊野社



名号より

観音堂　本堂の左に並ぶ堂内観音百躰を安ず本尊ハ聖観音にして其丈二尺ばかりあり恵心僧都の作なり当寺むかし谷中にありし頃火災にかゝりし時自ら火中を遁れ出させ給ひし霊像なりとて故に字して火除とも又ハ火災の時擲て飛うつりたまひしより擲観世音とも称するとぞ

斥候塚　一名を去我苦塚ともいふとあり百人町の通を田村下総侯邸の中にあり相伝ふ渋谷の金王麿斥候の塚なりと此塚に登りて四方を顧望すれハ二三里が間ハ手にとる如く遠くハ冨士筑波信甲相武の青嶽房総の翠巒画くが如く憂悲苦悩を去依て号とすといふ　或人云此あたり塚のたぐひ府中むさしのあたりまでかしこにあり皆へ府中野火留のあたり近一向の原野にて秋も秋の果もなく月の入べき山の端もなき名にしあふ大原なれハ旅人の道に迷ハさらんために所々にかゝる塚を築き置て其上より望めハ道筋ことく見ゆる様にそなへしものなりといへり又府中の北に冨士見塚或ハ佛の岱八国山なといふたぐひ四五箇所に存せり此所にあるも又其たぐひなるべし又或人云去我苦塚と云ハ申楽塚の誤なるべし昔此所にて申楽興行ありし旧跡あるゆゑに此名あり斥候塚も又見物の人の登て居たる所なれバ物見塚と唱へしなるべしと云　未其是非をしらず　昔の鎌倉海道の旧跡此塚の下に僅に残れり

笄橋　青山長者が丸の谷間の小溝に架せり　里俗云昔ハ此川を龍川といひし大河なりしと云　或鶴が谷に作り鉤匙とす　菊岡沾凉云往古六孫王経基佩刀の笄を此地の関守に与へられしによりて名付と故に笄橋といひ又ハ経基橋とも号すといへども臆説なるべし　笄ハ和名抄に加美左之と訓せり髪掻としるし可ならん其余髪掻に因むの諸説ハ繁きをもつてこゝにもらしつ

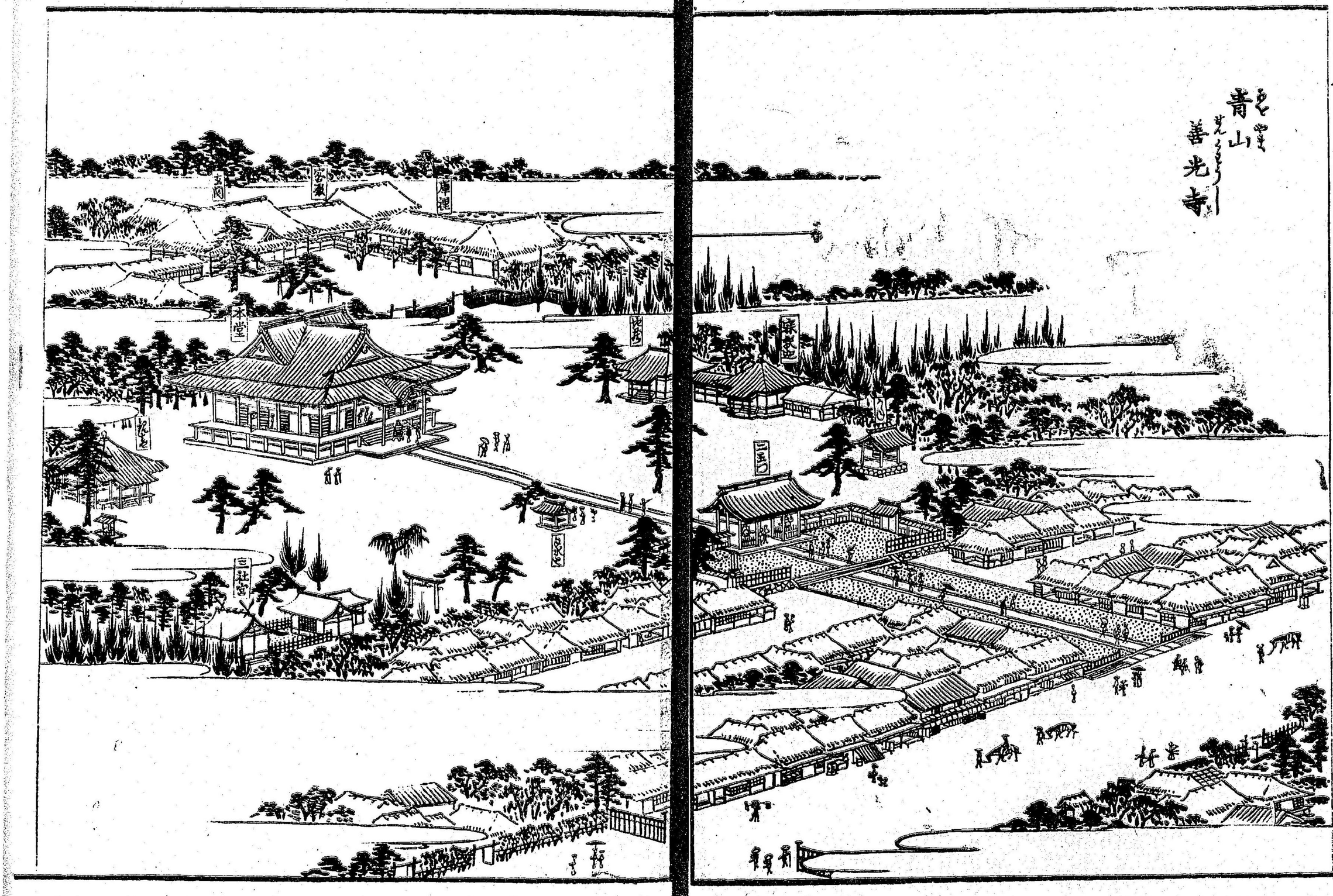
按に笄橋ハ国府が谷橋なるべし世に長禄年間の江戸の旧図と称せるものに青山の辺に国府方といへる地名あり永禄二年北条家の所領役帳にも森弥三郎といへる人の江戸の所領の内に国府方といへる名を注し加へたり是等を合せ考ふるに此所を昔国府方と称せし地にして其谷合に架せし橋なれバ国府が谷橋と唱へしなるべしやといへハ通音なり俗間市谷越谷鳩が谷などをがやとのみ唱へくるより後人髪掻に因てこの臆説をハなせしとおもへり

渋谷長者墳墓　同所松前家の第宅の地にあり小高き塚にして頂に松樹繁茂せり相伝ふ応安の頃迄此地に冨農ありて是を渋谷長者と称せしとあり　今同所百人町の南を長者が丸と唱ふるも其宅地の旧跡なれハさハいふとぞ其長者が子孫近き頃まで幽なる百姓にてありしとあり

按に江戸砂子に渋谷百姓町岡部家の別荘の地ハそのかみ冨民慶福といひし者の宅地なりといへり又青山恩田の松平摂州侯の別荘に稲荷の叢祠ありて其前に古き石の燈籠あり其棹石に康暦二年十月日願主四郎太夫とゑりて是を渋谷長者建立のものとせり按に四郎太夫慶福なと称せしやこれと其姓氏名もなく分らず江戸砂子にも渋谷長者の名ハ宗順といへるとあれど

通明観　渋谷岡部家別荘の号なり風景他に越四時共に美観なり

青山 善光寺



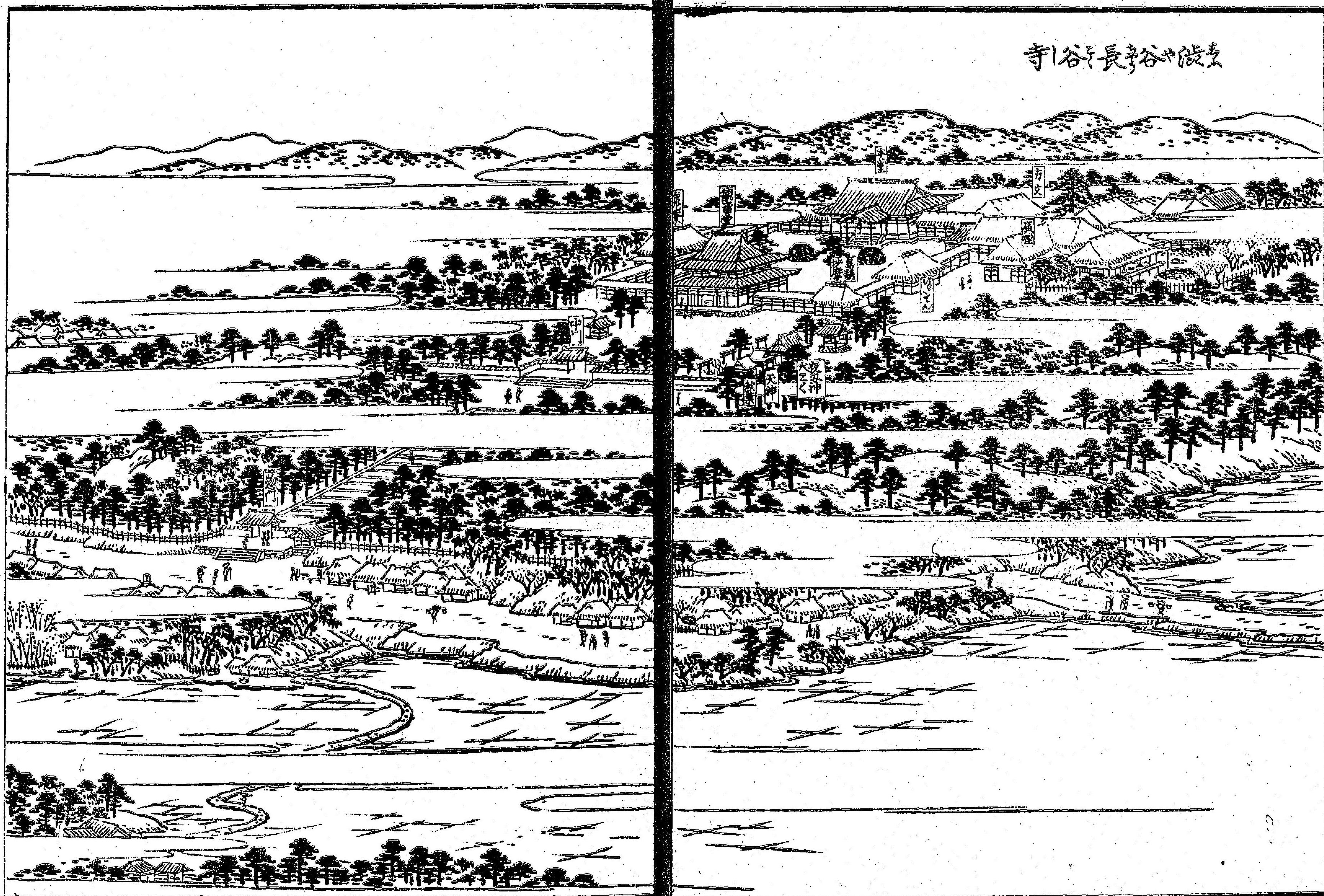
土民云此地ハ往古渋谷重國旧館の跡とも又ハ冨民慶福といひしもの住し跡なりともいへり

普陀山長谷寺 同所にあり曹洞派の禅窟にして江戸檀林の一箇なり野州冨田の大中寺に属す本尊十一面観音の像ハ和州長谷寺の観音の摸形にして立像二丈六尺あり御首の中に陸(?)丈四寸許十一面観音の霊像を安置せり則和州長谷寺の本尊と同木の樟にして同作なりといへり開山ハ門庵宗関和尚より当寺昔ハ赤坂溜池の上にありて龍雲院といひしを天正十二年甲申此地へ移し寺号をも改むるといへり 或人云当寺昔ハ山口氏重政の開基にして青山のやしきの中に建立し母堂龍雲院乃号を寺号とし山口家の香花院たりしとなりこれと其後故ありて離檀ありし由其家の記録にみゆるといへり

古仏倉 本堂の右にあり希世の霊仏霊神の像を安して庫中に充満せり此地の田中(?)鶴見内蔵助秀治といふ人当寺へ納め中にも殊に百四十一躰ありと云世に渋谷長者やとりつき題(?)なりとそ

当寺境内ハ古杉老松蓊欝として常に寂々寞々たりこれハ座禅

笄橋



公業の為に便ありしを佛目祖風をあふくゆゑ勤てよろしかるべくなん

氷川明神社　渋谷川の端にあり相傳ふ右大将頼朝卿の勧請なりと則此地の産土神なりとぞ祭礼ハ九月廿九日なり此日社前にて角力を興行す別當ハ天台宗にして恵日山薬王院宝泉寺と号す慈覚大師の開基なるハ薬師如来之作者詳ならず

渋谷川寺前を流る此北の端に源秀山宝泉寺といへる真言律の寺院あり閑寂玄隠の地なりここに住せり近頃法如比丘

金王麿守佛正観世音　上渋谷慈雲山長泉寺といへる禅院に安置す本尊観世音ハ運慶の作にして則金王麿が信ぜし霊像なりといへり開山ハ瑞翁和尚中興ハ不中的と号す

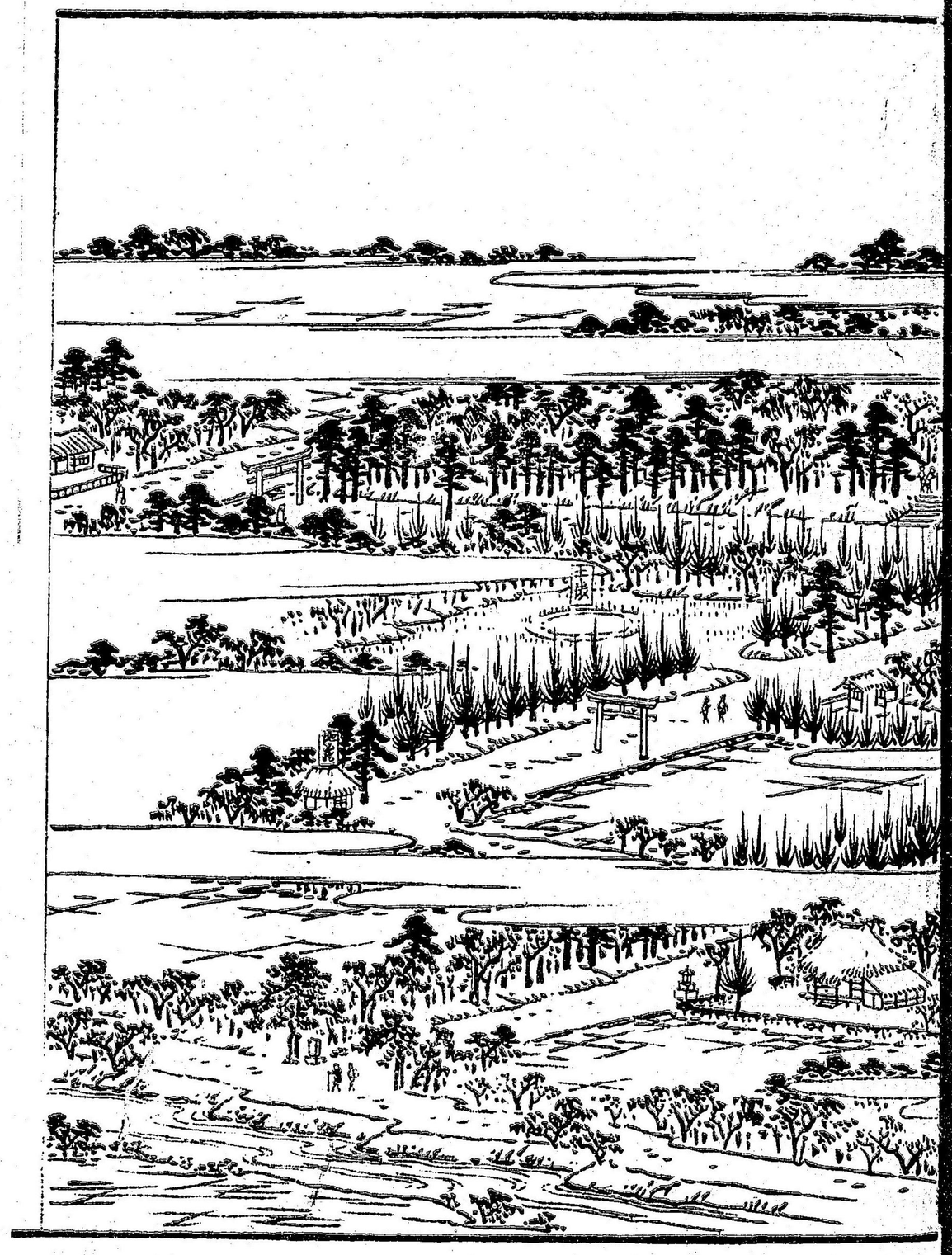
鶴谷　同所にありといへども今ハさだかならず傳云建久二年右大将頼朝卿飼ひ給ふ鶴此地に巣を作るゆゑに鶴谷或ハ又鶴澤とも云と

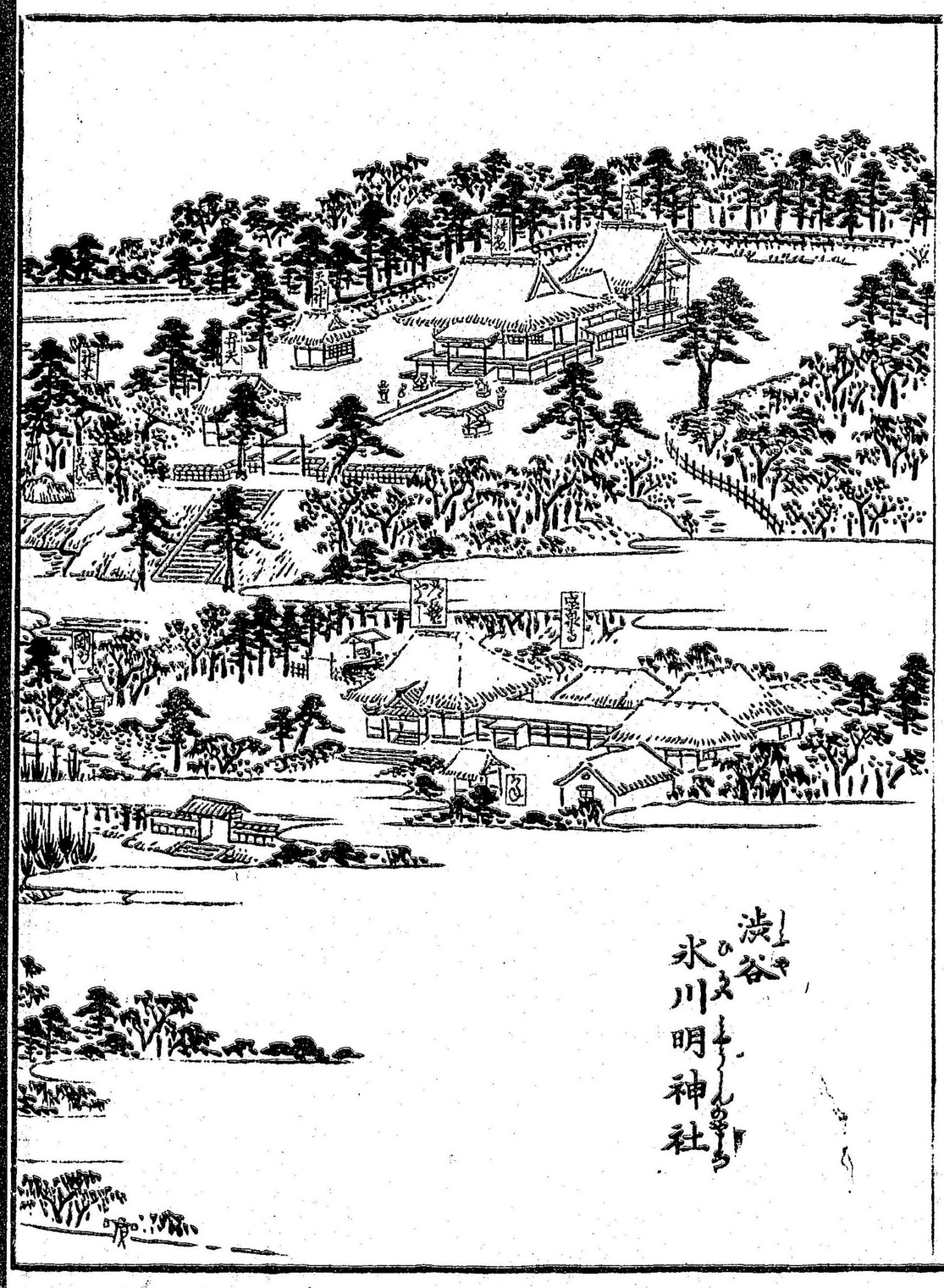
なり羽澤といふも同所にありといへり羽澤に龍洛妙心寺派の禅宗曹光山吸江寺と云ありき

朝霧が滝　是も同所にありといへども未だ其地をしらず里諺に云昔此地に渋谷宗順といへる富民あり女を撫子姫とよぶ容貌衆に勝れたり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んとして父母其女を誘引て彼寺に往けるに朝霧といふ可愛ありて姫を戀慕し竟に思を遂ざるを恨て此滝の下に身を沈めりといふ其傍に小さき岡あり願山といふ其塚なりと云又東の傍に圓證寺の旧跡もあり

渋谷八幡宮　同所中渋谷にあり此所の産土神とす祭礼ハ八月十五日なり

本社祭神　應神天皇一座　社記に云く此神像ハ上古弘法大師豊前國宇佐八幡宮の告あるによりて作らせしを山城國戦馬寺に安置しまつりしを渋谷次郎高重護持して当社の神躰とあがむると云く本地佛阿弥陀如来の像ハ慈覚大師の作なり圓證寺開創東福寺創建の時行脚の僧求りて寄附せしとあり





渋谷
氷川明神社

矢拾観世音 社前にあり本尊ハ慈覚大師の作にして金王麿が信の霊像なりとぞ社傳に保元年間の戦ひに此本尊戦卒に化現し敵の弓矢を多く拾ひあつめ味方の陣中へ入給ひしよりかく称しまつると云

子安薬師如来 同所にあり龍宮出現の尊像ありとぞ義朝誕生の時龍宮より出現し又頼朝尾張國幡屋にて出生の時も守護ありしとぞ佛躰に念珠をかけさせ世俗是を安産守護の念珠と唱へ大に崇信せり

金王櫻 一名憂忘櫻とも号たりしとぞ傳云往古久寿の頃源義朝鎌倉亀ヶ谷の館に植られしを金王丸に給ふの後此地に移し氏神八幡宮の瑞籬にうゑるとあり或社記に云文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の頃當社に詣あひ太刀一振を収めたまひ又金王丸の影堂に立寄り其誠忠を感しあひ鎌倉亀ヶ谷より櫻一株を栽らしむ金王櫻と号られたるともあり又此さくらの一本と云る冊子に紀州亜相頼宣卿の御母堂養珠院殿此櫻の実を此庭に植させらるとや生立く花も開んとせし頃八幡の社内にありける元木の櫻既に枯たりしかは家臣渋谷善入と云人ハ金王丸の遠裔なれハ他の人の植んよりハ祖先への孝養ゆゑあるへしとて件の実生の櫻を善入に下したまふ善入恭しく是を拝受して其枯株の跡へ植継たる今の櫻是なりと記せり

鎮座の松 境内末社の前左の方にあり大永四年五月十三日北条氏綱と上杉朝興髙輪の原にて合戦の時氏綱の後陣大道寺八郎左衛門小杉どもありて渋谷へ攻入放火せし其餘煙當社を焼ふ此時神躰を此松樹の上に遷しまゐらせしかハ此名ありとぞむかしハ社地に三十六株の神木ありしが今ハ僅に古松五六株社地の辺に存せり

什寳 月輪御旗一流 社記に云く後一条帝の長元元年五月平忠常北総に兵乱を起し近國を掠む源頼信朝臣忠常追討の祈願として秩父の峯に八流の旗を収めて其内日月の二流ハ武基に給ハり大宮の妙見山に収め八幡宮とあかむ其後河崎土佐守基家に白旗一流給ハり独り仙北金澤城を攻落せしを依て義家朝臣基家を召れ此軍勝利ありしは全く八幡の加護なりとて是を祈し寛治六年正月義家朝臣凱陣の時谷盛庄へ立寄らせたまひ月の御旗を八當社にとゞめおかれしとも此御旗をみだりに拝する者あるときハ必ず祟ありといふにより能證阿闍梨深く社壇にをさめ置く写しを出し置て人開帳の時節諸人に拝せしむるハ平を撰しなり

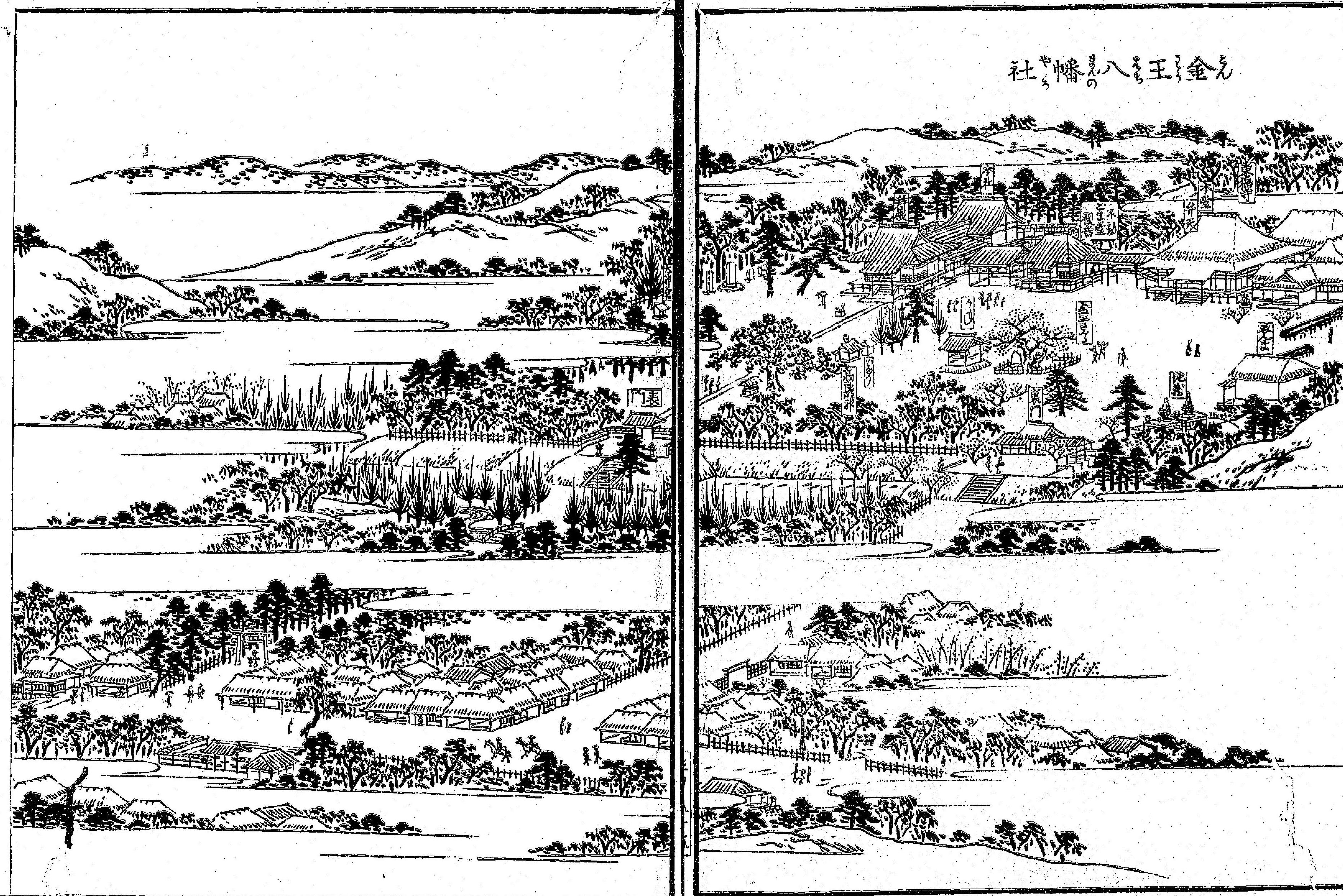
兜建観世音 社記云源義家公陣中奉持の霊佛にして後年基家に給ハり重家および金王丸まで信仰せりと云

獅子丸太刀 河崎土佐守仙北金澤にて猛威を振ひ城を攻破る功勲賞として義家朝臣より給ハれり

毒蛇長刀 金王丸長田が館野間の内海にて勢ひを振ひしも此薙刀の威徳ありしとぞ

六孫王経基髪撚 経基より推守興世に給ふを義家朝臣當社へ納められしより并摂是にあり

社記曰當社ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文が曾孫秩父別當武基の一子に同十郎武綱といへる英雄あり寛治三年六月清原武衡同家衡が猛威を摧き奥羽の間に勢を揮ひ名誉を天下に輝かしぬ故に将軍義家朝臣是を感し勧賞として其子六郎基家 河崎土佐守と云由社記に見ゆ に武蔵國谷盛荘を給ふ 谷盛一に矢盛に作る此庄ハ七郷ありしとぞ所謂渋谷 赤坂 代々木 麻布 飯倉 一ツ木 今井等是なりと云 依基家勝



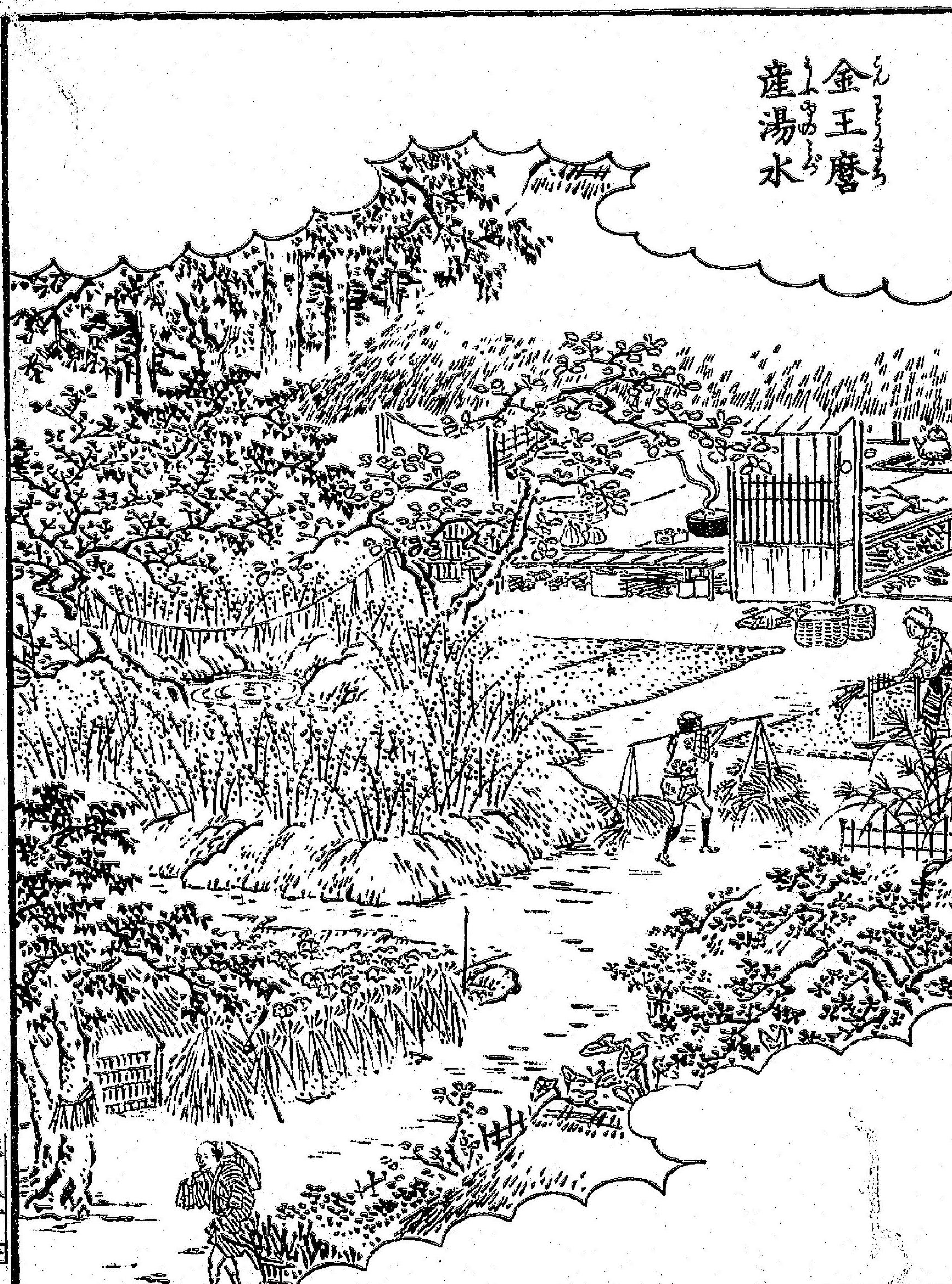
金王八幡社

地を擇ひ同六年正月始て采邑の地に當社を營建し金王麿迄代ゝ氏神と称しける莊嚴なりけるとぞ　別當ハ天台宗にして渋谷山東福寺と号ス　相傳ふ六孫王経基の開創にして昔ハ親王院と呼しとかり　開山ハ圓鎮僧正と号す　養和元年百十一歳にして化寂ありしと云云

金王麿影堂　同所向ふ側叢林の中にあり　八幡宮社記に云く金王麿十七歳の時主君義朝の命により鎌倉に赴く頃其母別れを惜ミ悲歎の泪に沈む　依て金王麿自ら姿を造りて母堂の許に残しとゞめけると云云

其像ハ鐵衣二刀を帯せる容形なり

按るに金王麿祖先ハ高望王より五代の後裔　村岡五郎良文の曾孫　秩父別當武基の子　同十郎武綱　其子を六郎基家といふ　此時に至りて始て渋谷を以て氏とす　同く一子重家　河崎平三大夫　後従五位下に任し土佐守と云　爾るに子なきをうれへ當社八幡宮に祈請しより永治元年一子をまうく　八月十五日に生る　金剛夜叉明王の化身なりし靈示あるを以て上下の文字を借用ひて金王麿と名附けなりとぞ　一説に金王麿ハ庄司重國の子なりといへとも　時代違へるに似たり　保元物語を以て考ふるに金王麿ハ左馬頭源義朝に仕へし童にして度ゝ手柄をあらハし頗る大功の者なり　義朝平治元年に大納言藤原信頼にくミしてむほんを



起し待賢門の軍に打負尾張國野間の内海にいたりし時家人長田庄司忠宗か
ところに落伸ましましを長田心かはりして浴室に義朝を弑する金王麿これ
を見て走り出てかの者共を切りふせ其後都に登り義朝の妾常盤に
かくと告け其ありさまをつぶさに語り後義朝の跡をとふらひせんか為出家して
諸國を修行し其終る所をしらずといへり金王丸より渋谷と唱ふる縁起にいふ
重家寛治六年渋谷の姓を賜るといへども違へるにや系図によれば重家の
子重國其子高重其子金王丸とあり社記にも重家一子なきを憂ひて八幡宮
に祈りて授かる金王丸といふ高重ハ金王丸より後にして文治年中頼朝時代の人
ありといふ
と述へり

金王麿産湯水 同所一町ばかり西の方堀の内といふにあり
誕生池とも号く八幡宮の社記に一度此霊泉に觸る者ハ
齢千歳を保つと云伝ふとあり此辺すべて渋谷氏居館の地
にして土人城跡と称せ馬場の形築地の跡など存せり古井
ここかしこにあり

東鑑 治承四年庚子八月二十六日入夜定綱盛綱
高綱等出営根深山之處行逢醍醐禅師全成相伴
之到于重國渋谷之舘重國乍喜憚世上之聴招于
庫倉之内密々羞膳勧 下畧

同 書養和元年八月二十七日渋谷庄司重國次男
高重竭無貳忠節之上依令感心操之慇便給知行

河崎庄司次郎高重宅舊趾　同堀の内にあり土俗傳へ云此重國へ
違論のゝち有りて六郷の河崎へ引移りしを其頃此地にありし
山王の社をも彼地へ引うつしたりしかば其旧地に稲荷の叢祠を殘し
留めしをも

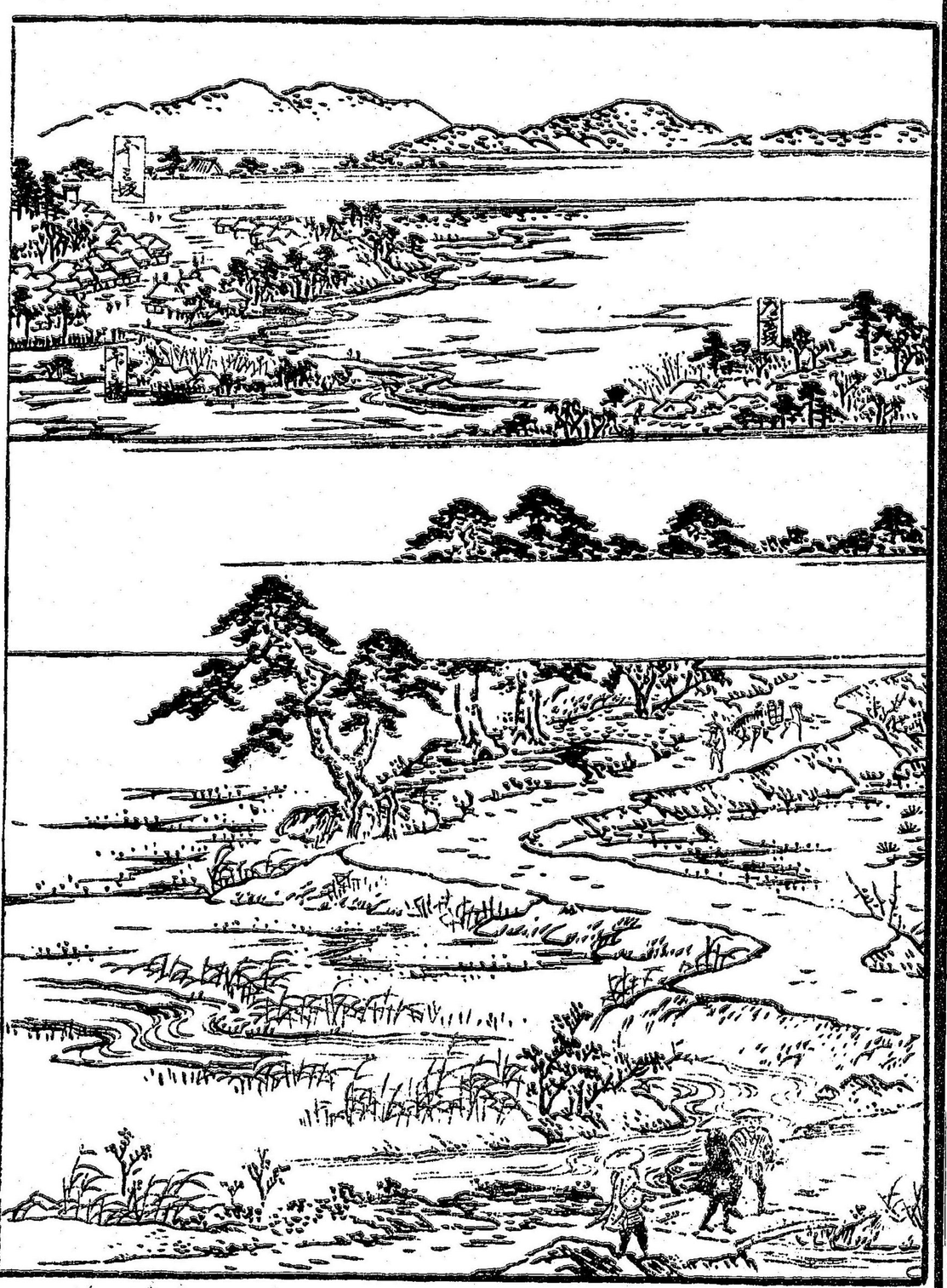
姉尾平次左衛門光景旧館地　是も同所にあり今も光景が馬を冷し
たりとつたふる小池あり旱魃にも涸ることなく霖雨にも溢ることなし常に岩間をとほり出でゝ清冷なり傍に駒繋捜と称する
あり光景が愛せし安達栗毛とかや駿足を繋ぎしとき水を飼ひ
しとぞ

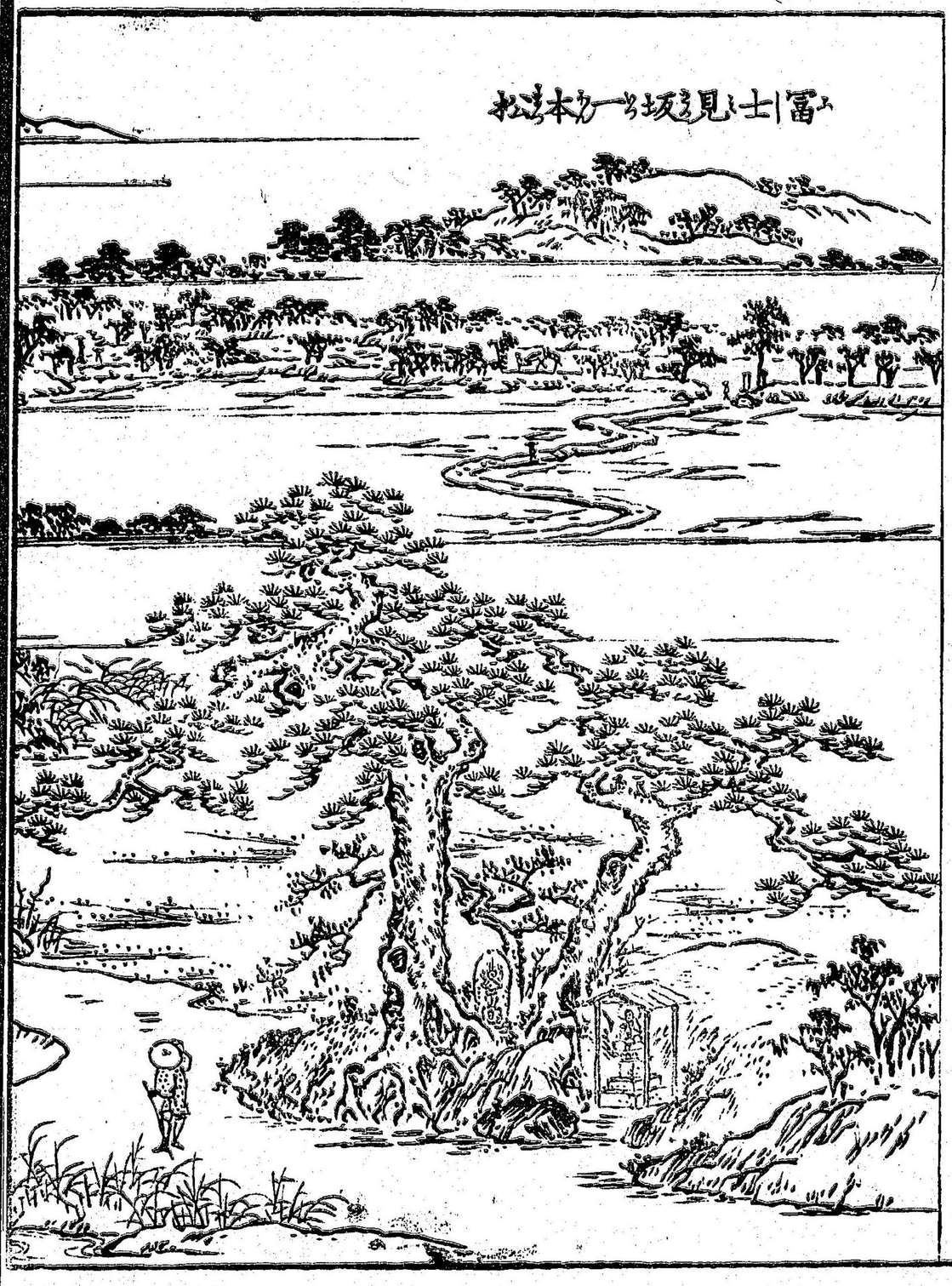
甘露水　同所にある里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地に
旅宿ありし頃此水を汲て味美にして甘露のごとくなりと褒詞
あるより名となせりとぞ

至池　同所にあり里人云く天文の頃天下大に旱魃し河水
流を絶し池沼も平地に異ならざる時此水涌出ること常に
倍せり此里に住る一女子水を掬んとして水器の中に鞠の如き
一顆の宝珠を得たり其女子が記しに云く是八幡宮の神器なり大永の兵火をさけて此井中にあり直に神祠に
収むへしとのり依里民大に恐れ謹て是を神祠に収めるとぞ
（此宝珠今渋谷八幡宮に収むと云）

神仙水　八幡の西にある相傳ふ往古空鉢仙人此谷に入て不老
長生の仙丹を煉しより靈泉となり故に神仙谷とも云とのり
鉢山とのゝ名も法道仙人の鉢此所に自ら飛来る故に号とぞ
とのり

富士見坂　渋谷宮益町より西へ向ひ低く下る坂を云斜に芙蓉の
峯に對ふ故の名とぞ相模街道の立場にして茶店酒亭


今の坂
八坂


富士見坂の一本松

ありて麓の小川に架せる橋をも冨士見橋と名づけたり
四十八ありとあり此冨士見坂ハ其首なりとぞ

道玄坂

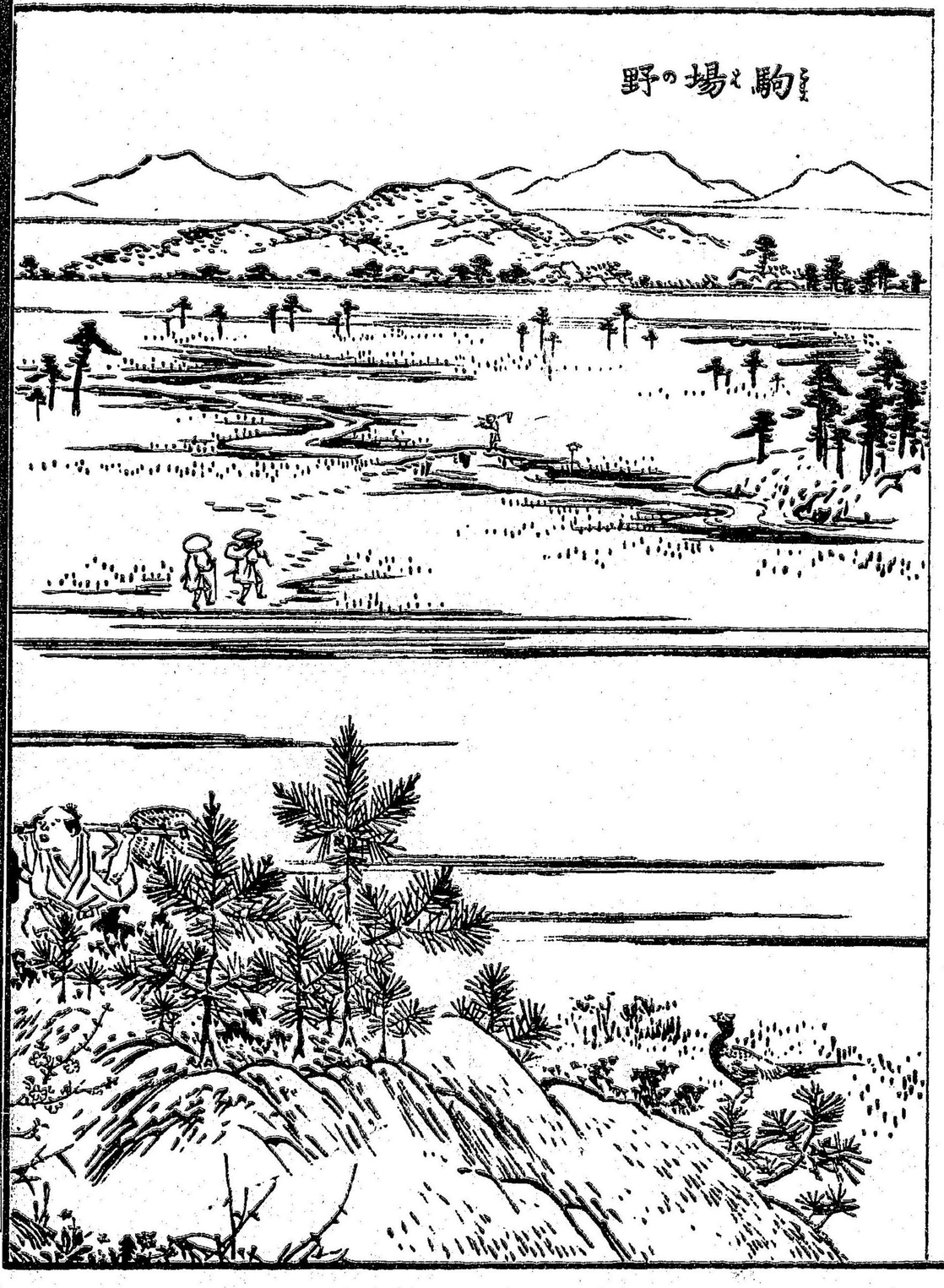
冨士見坂の下耕地を隔て向ふの方西へ登る坂をいふ
此坂を登ること三丁程行バ岐路あり直路ハ大山道中にして三間茶屋より登戸の渡しまで二子の渡へ通す右へ行バ駒場野の御用屋敷の前を通て北澤淡島への道なり
世田ケ谷へ行道なり（道玄坂ハ道元とも作る）里諺に云大和田氏道玄ハ和田義盛が一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡して其残黨此所の窟中に隠れ住て山賊を業とせし故に道玄坂とよべり

東鑑廿一云　建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左右衛門尉義盛率伴黨怨襲将軍幕下謂件與力衆者嫡男和田新左衛門尉常盛同子息新兵衛尉朝盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和田四郎左衛門尉義直五男同五郎兵衛尉義重六男同六郎兵衛尉義信七男同七郎秀盛此外土屋大学助義清古郡左衛門尉保忠渋谷次郎高重（横山権守時重）中山四郎重政同太郎行重土肥先次郎左衛門尉惟平岡崎左衛門尉實忠（實田与一義忠子）梶原六郎朝景同次郎景衡同三郎景盛同七郎景氏大庭小次郎景兼深澤二郎景家大方五郎政直同太郎遠政塩屋三郎惟守以下（中畧）和田四郎左衛門尉義直（年廿七）爲伊具馬太郎盛重被討取父義盛（年六十七）殊歎息於今者勵合戰無益云揚聲悲哭迷惑東西遂被討于江戸左衛門尉能範所從云同男五郎兵衛尉義重（年三十四）六郎兵衛尉義信（廿八）七郎秀盛（十五）以下張本七人共伏誅朝夷名三郎義秀（三十八）并數率等出海濱掉船赴安房國其勢五百騎船六艘云又新左衛門尉常盛（四十二）山内先次郎左衛門尉岡崎余一左衛門尉横山馬允古郡左衛門尉和田新兵衛入道以上大將軍六人遁戰場逐電云云

按ずるに大和田ハ大多和なるべし三浦一族の中に大多和と号せるあり東鑑に治承四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大多和三郎義久子息義成和田太郎義盛同次郎義茂中畧三浦を出て参向ふとあり或人云道玄ハ沙門にして此地に昔一宇の寺院ありて道玄寺と称しより故に坂の名に呼び来るともいへり一説なり

道玄物見松

道玄坂を登ること七町ばかり西の方同じ街道大坂と云より此方右側にありしが明和の頃枯たりしかバ代をと云
木の圍五尺程ありて根より三丈もありて上わかれて東西ハ廿間もありて南北へ十六七間もありてよ枝ならびに蒼くたりしゆゑ炎暑の頃ハ行人この樹下にやすらひてすゞしみとなりし今駒場坂の下用水堀の傍に一株の古松あるを混じて道玄松と称すれども一本松と称してこの松と別なり
里諺云道玄此松樹に登りて往来の人を見下し小賊に命じて衣服物の具を奪ひ採しめたりしとなり


野の場と駒と

駒場野 道玄坂より乾の方十四五町斗を隔て代々木野へ続きたる広原にして上目黒村に属せり 雲雀鶉野雉兎狐類多く御遊猟の地なり 此地の官林は享保の初御狩場に定させられたりとなり 又此地の里正加藤氏 其先は小田原北条家の臣加藤丹後守といへる人の後裔にして 小田原落去の後此地に縁あるを以て蟄居し終に農民となりしと 丹後守は武州多摩郡稲根崎にて討死せしとぞ 其一族の墳墓稲根崎円福寺といふに存せりとぞ

蛇池 官林の中にありと云 享保三年此地御遊猟の地に定させられし翌年此夏風雨烈しく此池中に栖ありし蛇ゐるを立去りしといふ故に此名あり

鍾鋳塚 駒場野の中にありと云 方九尺斗高サ七八尺斗なりとぞ 昔此所にて梵鐘を鋳たる旧跡なりと云伝ふれども何れの寺の鐘にや 或人曰 冨士見坂の下の水流下渋谷分水掛口の地の名に道場ヶ端と云あり されば此近辺に盛大の寺院ありしなるべし

去我苦塚 別所台と云地にあり 塚の高サ一丈あまりばかり 相伝ふ 昔渋谷長者某此辺の人民を語らひ時として此塚の辺にて酒宴を催し歓楽せしにより苦を去の所謂なりと云 此辺に古く古居館仏堂の類ありし地にや 近頃道路を作らんとして此塚を掘穿ちて土中布目の紋理ある古瓦数枚を得たりといふ

土器塚 駒場野の内なる里諺に云 往古此地奥州街道なりしに源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至りて酒宴ありし土器を後土人等此地に埋めて義家朝臣の武功英名を誉しとなん 是より土器塚と称せりと云 其塚の側を同勢山と呼ふは義家朝臣供奉の輩の居たりし旧跡といふ 按に此地に芦毛塚と称するものあり 疑ふらくは土器塚も駒塚と誤るものならん 往古は馬なとを埋めたる塚なるべし

足毛塚 宿山と小地名に称する地の里正金子氏構の内にあり 頼朝卿乗られたる芦毛馬の斃たるを埋蔵せし旧跡と云

氷川明神祠 駒場野官林より北方の岡にあり 祭神素盞嗚命一座 天正年間甲州郡内上の原といへる地にありしを加藤氏（加藤氏の先は駒場野の条下にあり）此地に移り住する頃産土神なるゆゑにこゝに此神を勧請なしまゐるといへり 祭礼は毎歳九月廿九日に執行せり（此神の氏子は古へより疱瘡の患ともなしといひ伝ふ）

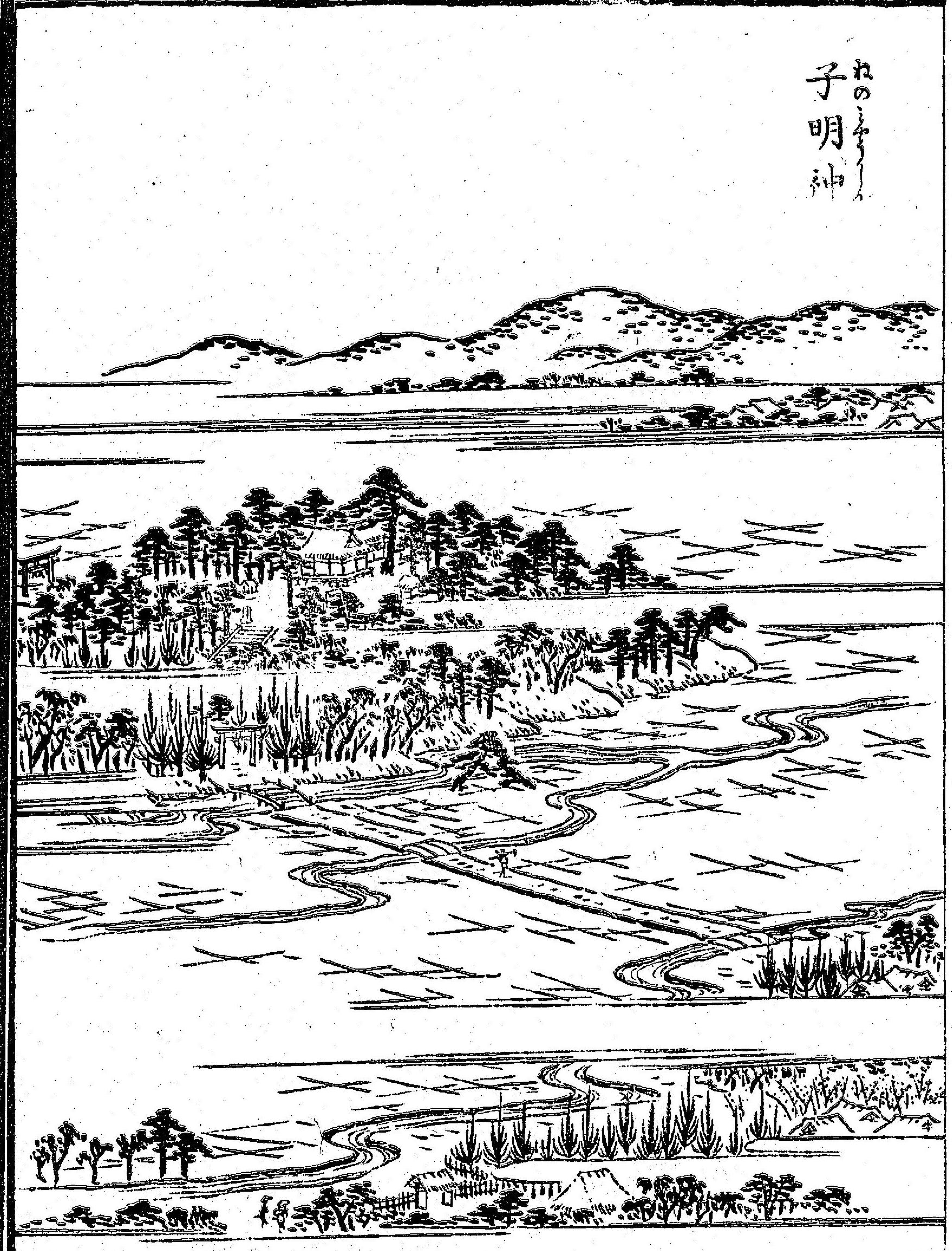
天満宮 同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方にあり 相伝ふ

別當

北澤
粟島社
池尻
祖師堂

往古此地の農民市兵衛
より印子の菅神の像を感得
宮居を営く鎮守と崇
菅神の像を宮中に安置
驗とす其松ハ宮居より半丁
石劔同一社地稻荷の小祠
往古菅神の霊驗を
北澤淡島明神社 北澤村
院より勸請す 當寺ハ此地八幡宮の別當
清誉上人 其師萬世上人の遺命を奉
開創 恵心僧都の作の座像一尺五寸の阿彌陀
男女の両像ハ行基大士の作と
同一画と称せり
祭神ハ紀州名草郡加太の淡島明神ホ同一
岡山清誉上人 紀州名草郡の産なり
創せらるゝ 當寺ハ此地八幡宮の別當
祈願を篭もり夢中靈示あるを以て
常ホ腰痛の患あり依年月淡島明神ホ
修形成就の浸當寺を開

其報賽とゝく紀州加田淡島明神の
神主ホ告く此地ホ勸請なゝまり法樂あるゝと云
此故よ累世の住僧連綿とゝく此灸治の法を口授相傳ゝ衆
病悉除のゐる毎月三八の日是を施せり依灸治を求むるも
華遠きを厭ハそゝて此地よ至る者少ゝ仍祭礼ハ三月十九日と云
除劍難日蓮大士堂 同所八町斗南の方池尻村二子街道の右側
常光院とゝく日蓮宗の寺よ安置を
日蓮大士の木像ハ丈二寸二歩あるも
十二日相州龍口よ於ゝく大士殊ホ伏せんとせゝれゝ時刀尋段ゝ
壊の奇瑞あるを以終ホ北條時頼の赦免ゆゝり誅を遁ゝく
同國依智よ移ゝ本間六郎左衛門重連ゝ家よ入ゆゝ重連
大士の化を感得ゝ大士手刻の自像をゝゝんゐゝを依自ら死
像を彫造ゝゝく重連よ附属せゝれゝりゝを後故ゝく



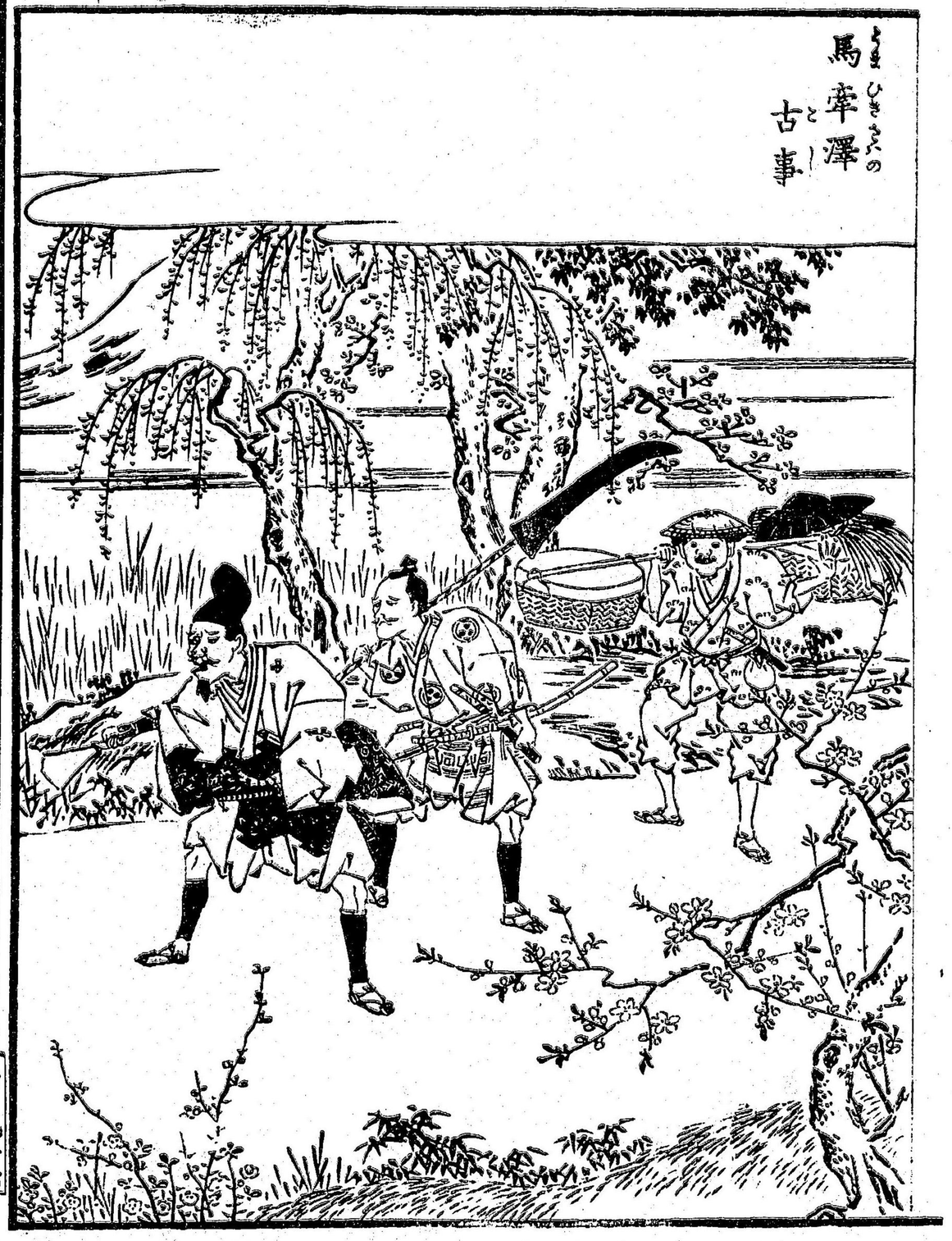
當寺に安置せるところにて靈驗昭くある故に指人常に絶す

正一位子明神社 二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を隔て丘の上にあり別當ハ天台宗宿山村壽福寺より兼帶に

馬牽澤舊跡 同所子明神の前今田畑となれる地の旧名なりとそこも今ハ上目黒世田ヶ谷へ跨て都て上中下と三つに分れたる邑名となれり 里諺に云 文治年間頼朝卿奥州征伐の時澁谷八幡宮へ參籠あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰んて献せられんとし此地を牽れしに顚なりしかハ是を止られしと云（或云頼朝卿御狩の時この地にて乗る所の馬嶺に驚き譯て澤に陥入て死せり故に塚に葬りぬるとも今も此地にて芦毛塚の名を下りて照し合せて見るへし 又云頼朝卿の葦毛なりしかハ芦毛塚の名ありとも馬を蓄ふすることありとしもあらすくれを蓄ふれハ必祟ありとて恐れつゝしめりとぞ）

若宮八幡宮 上馬牽澤村二子街道より右の方三丁斗入て小き森の中にあり 駒留八幡宮と称せし北條相模守時頼朝臣崇るの靈像にして神軀ハ一寸五分斗ありて左の手に弓を持し

馬率澤と古事



又像の背ニ木牌を建る其牌面ニ銘せる文左のごとし

經 最明寺時頼公守本尊
塚 駒留八幡宮
北條左近太郎入道成願

奉安鎮所徳治三戊申年十月廿三日

經筒 紫銅ニて造り合せ目をハ鉄にて留たるものとおぼしくあれども擦損して鉄の跡のミ存せり圍ミ五寸六分長五寸あまり

敬白
八幡大菩薩御寳前
奉加法書寫六部妙法蓮華經
奉讀誦妙法蓮華經一千部
志者為身心大施主現世安穏
生善所親類安穏福壽増長
南無法界平等利益

右後同

紫銅にて圍ミ八寸あまり長五寸あまり此二の経筒ハ共ニ天和年間當社修造の時経塚とて地より當社の神躰と共ニ穿得たりとあり

徳治三年戊申十月廿三日 沙弥見佛
左近太郎入道成願

按ニ皇朝年代略記皇代記如是院年代記等ニ徳治三年戊申十月九日改元ありて延慶とせしよしあり又將軍執権次第にハ十一月廿五日改元とありてこゝニ不審とす

田中辨財天祠 同し社地にあり常盤御前此地ニ崇ると云一説ニ常盤御前沒せるの後弁天ニ崇むといへり神躰ハ座像ニて丈一尺五寸ばかりある龕の背面ニ左のごとく記してあり

天文四壬未年七月
香林院殿海岸實樹大姉
田中辨天之施主 常盤御前御法号也

按ニ上馬牽澤村の隣村若林村ニ香林寺とよぶ洞家の禅刹あり其寺ニ常盤御前の靈牌墳墓あり過去帳ニ香林寺殿海岸宝樹大姉天文四年未七月七日とあり香林寺ハ即常盤御前の開創なりといふ常盤御前と称せるハ吉良家の令室なり

社記云當社八幡宮ハ何れの時世の創建なるをしらず社廟傾廃神躰も又あるかなし然ニ天和二年此地の領主大久保矦藤原忠誠當社を修造せんとして其頃経塚と云地を穿ち土中一の壺を得たる又其壺中に銅器あり前ニ挙ぐ徳治三年戊申北条左近太夫入道成願沙弥見佛等の名を銘し内ニ今存せる所の神躰を蔵めたり又其一箇ハ法華経六部を書寫し又一千部を讀誦せる由銘せり依て忠誠當社を修造

経営落成の日新たに法華経六部を書写して銅壺に収め社の
礎下に埋蔵し駿州建穂寺の僧隆範をして迂宮の式を
執行せしむるところなり
八幡山宗圓禪寺　同所二子街道の左品川上水の端にあり當寺は
若宮八幡の別當寺なりし
寺に属せし木造座像の釋迦如来を安置せり當寺は北条
左近太郎入道成頓の開創にして存應林可和尚中興なり北条
左近太郎入道成頓靈牌

文保元丁巳年十月廿三日寂

當寺開基　心覺宗圓菴主

北條家孫左近太郎入道成頓

長立山常光寺　弦巻村世田谷上宿の南にあり日蓮宗身延の
末にして天正十三年乙酉八月草創也開基は越後人泉藏院
日禮と号す日禮歿雲の頃此地青山氏の家にありし此人嗣子

慾ふ日禮妙経秘咒の奇特をあらハし一子を出生せしむ故ふ
此人宗教をすてゝ日禮ふ帰依し更ふ精舎を創立し日禮を
開山祖とし弟子の礼を儼く　清山氏後日林と号せ当寺の第二世なり
本尊釋迦如来額ハ如松の二字ゆしく廣澤の筆なり石水
盤ハ喜多見家寄附せしものなり又浅野内匠頭長矩の寄附の
三方あり　黒漆を以て塗松ふ雀の描畫あり此器ハ馬牽澤大敷寺ふあり ことくハ彼家の寄附なりしか浅野氏没しゝふ分散せりといふ

常盤橋　二子街道中馬牽澤村世田ヶ谷入口三軒茶屋の往還
角のかより向へ三丁斗入て小溝ふ渡せる石橋をいふ名清く
里諺ふ云く昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人不義のこと
ありて此所ふ害せらる然ふ其靈里人ふ祟を依其霊を弁天ふ
崇め其腹ふ出生の男子を若宮八幡と崇むるといふ何れにも
上馬牽澤村ふあり此常盤といへる女ハ大平出羽守が女なる
よし世田ヶ谷私記ふみえたり

按ふ此はしより二十歩ちかき東の方道より北側ふ松を植たる塚あり
是を常盤の墓と云上ふ不動の石像あり又同し南の方にも塚あり
是なりしとそいふところ実ならん

大渓山豪徳禅寺　常盤橋より五丁斗西の方ふあり曹洞派の禅
刹ゆしく江戸高輪の泉岳寺ふ属す当寺ハ文明年間吉良家
創建の精舎ゆしく旧ハ弘徳庵と号す其頃ハ済家ありしく馬堂昌誉
禅師開山祖たり　其後門庵宗関禅師今のごとく曹洞派にあらたむ　中興の開基ハ井伊掃部頭
直孝侯同中興開山ハ天極秀道和尚なり

佛殿　本尊釋迦弥勒弥陀等の三世佛の木像を安置す

額　佛殿の二重家根の軒ふ揭る月舟の筆あり

選佛場

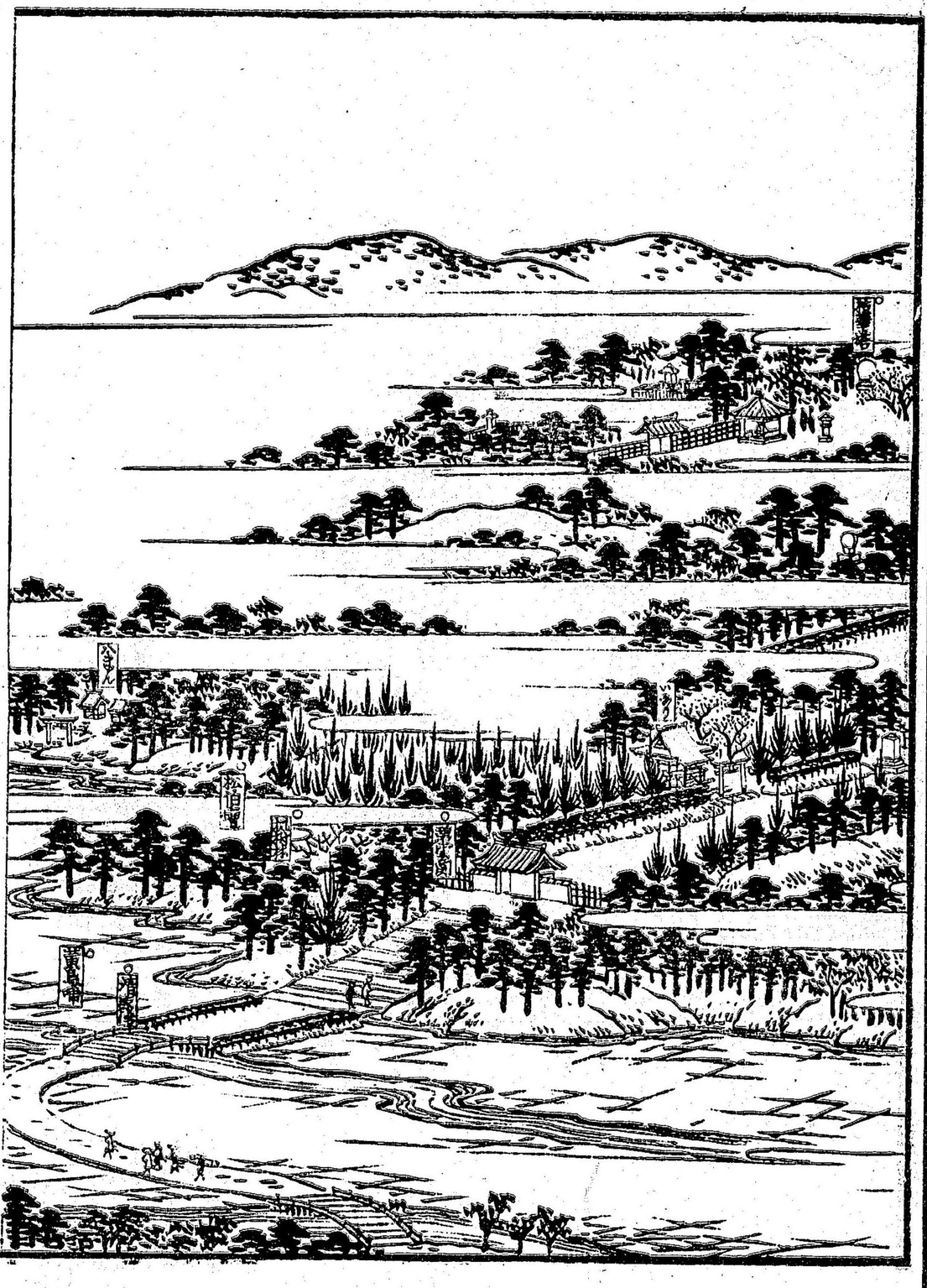
選佛場　佛殿の右ふ並ふ当寺十勝の一なり額ハ二重家根の軒ふ揭く当寺十五世靈潭の筆なり

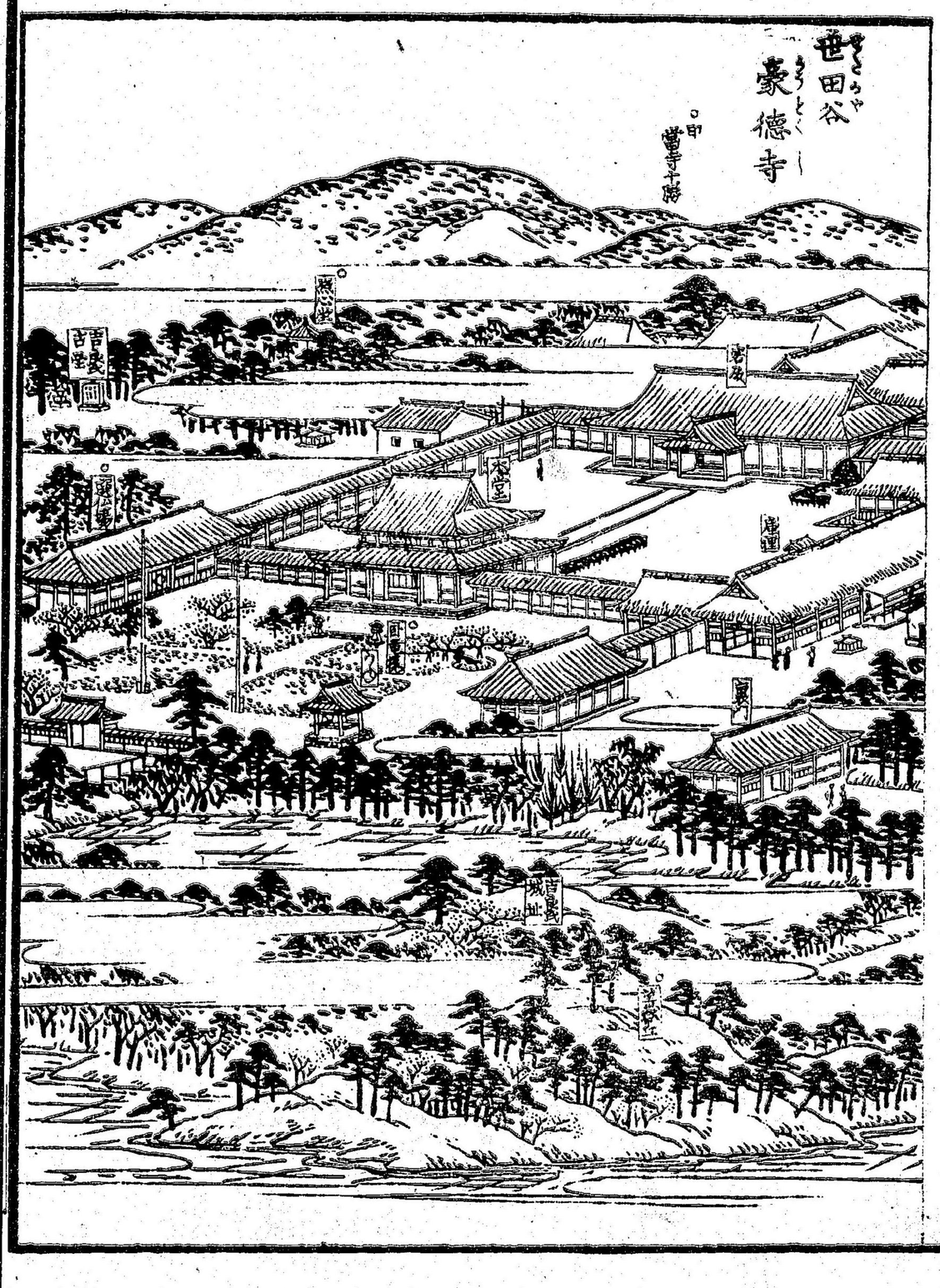
弐立佛

石燈籠　佛殿前左右ふ立る延宝五年井伊家
掃雲院殿の寄附なり

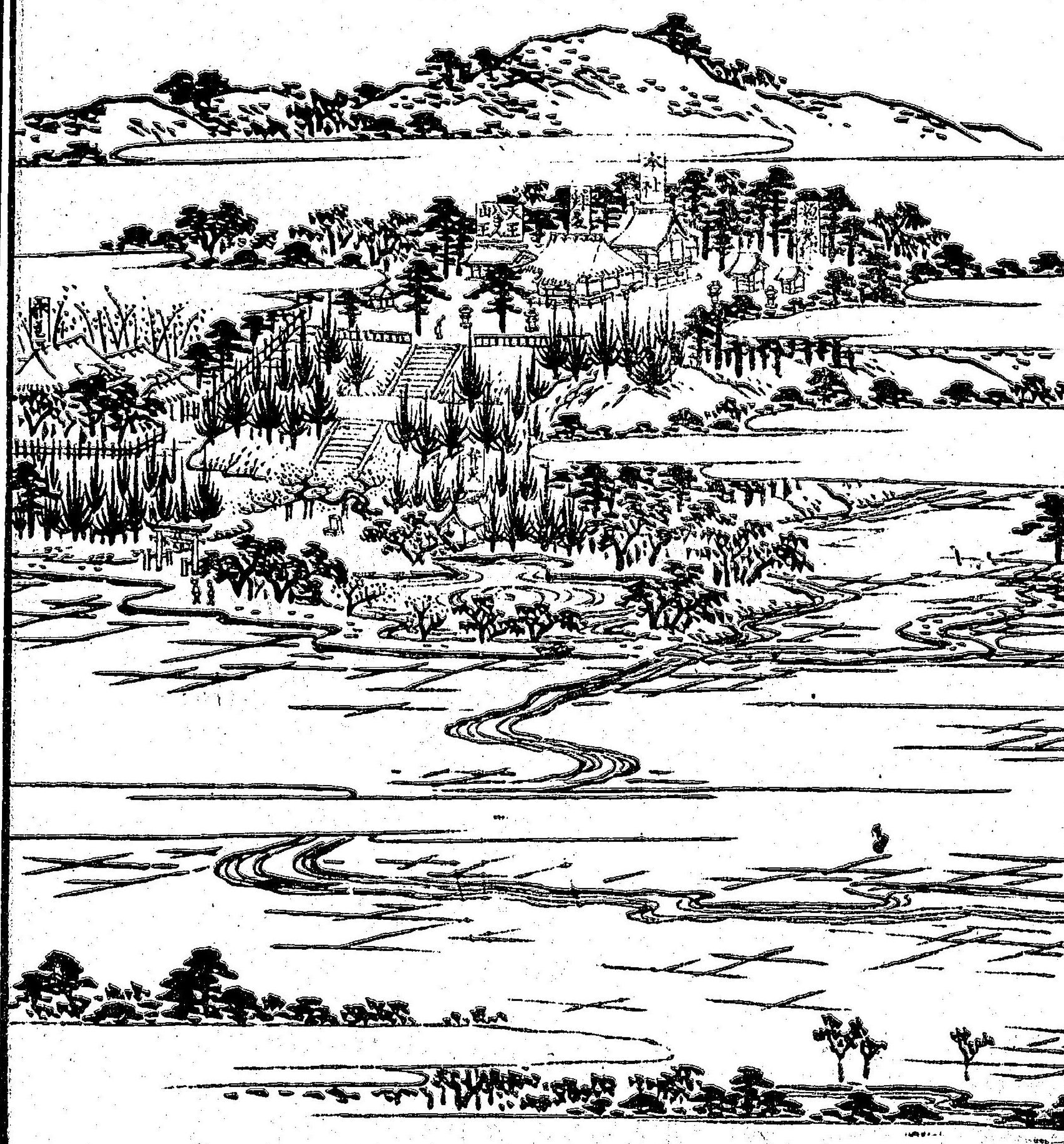
臥龍櫻　佛殿の前右の方ふあり当寺十勝の一ふして往古吉良政忠園中にありしと云今その老樹ゆしく單瓣白花なり

洪鐘　佛殿の前左の方ふあり旧鐘の銘ハ寛文十一年鐵牛和尚の製文ゆして和尚比自ら撰て揭る今存するものハ延宝七年中興天極秀道和尚銘せられたり




世田谷
豪徳寺
印
當寺十勝

世田谷
八幡社



照心堂　客殿の左林叢の中にあり　當寺十勝の一員なり　吉良氏古塋　照心堂の前卯塔の中大なる松樹の下にあり古き五輪の石塔並び立て一ハ世田谷御所吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり當寺過去帳よ前の開基洞春院殿照岳道旭居士文亀二年壬戌六月十七日卒とあり又一ハ政忠の伯母弘徳院久栄理椿大姉の墓なり弘徳院ハ當寺過去帳よ文明十二年庚子十二月二日逝とあり

古石燈籠一基　同し墓の前よあり政忠庭中のものありと云世よ云地蔵形これなり

當寺開基碑　佛殿の西よ立る寛政十一年の冬當寺十五世靈潭和尚の撰文にして往古吉良家ふ因ある者力を戮せて靈潭和尚の志を補助しこれを立るとしりよ

碧雲関　總門の名なりこれも當寺十勝の一なり其余黄鳥哺ハ同し門の左の叢林の中よある所の梅樹を云松柏壇も又同し方の樹林を云楓樹林も同し奥よあり晩秋の紅錦賞すへし

清涼橋　總門の前の小川よ架せる橋の名なりこれも十勝の一なり

當寺ハ文明年間（或云十二年庚子）開創にして世田谷御所吉良右京大夫政忠其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地よりして基氏より此世田谷郷を賜り初てここふ移住せしより遂世田谷殿と称せり伯母弘徳院殿久栄理椿大姉のためよ創建せる所の精舎なり（過去帳よ文明十二年庚子十二月二日とあり）直よ其法号を採て弘徳庵と号け昌誉禅師を請して開山

祖とせ（其始ハ清家の禪刹なり）天正年間に至て宗関禪師来て薰席し洞門になしむ万治年間江州彦根城主正四位上左中将井伊直孝侯此世田谷の地を賜ふ（或寛永十年癸酉ともいふ）万治二年己亥六月廿八日逝せ（法号久昌院殿豪徳天英大居士と号す）遺言によりて令嗣直澄其遺骸を當寺に葬せ故に弘徳を豪徳に更む（弘豪同音）爾後直孝侯の賢娘掃雲院殿無染了心禪尼先考の冥福を吊ひたまひ許多の浄資を喜捨して堂宇を経営し三世佛の木像を安置して良田数十頃を寄らるとなり

吉良氏古城趾　豪徳寺構の内右の方に續る地を云（今ハ井伊家の林となれり）堤の形二重に残て空堀の趾とみゆる所もあり其封内一町四方やしく櫓を構へたりしと覚しき跡三ヶ所迄存せり又居館の趾と称せるもの築地或ハ林泉の形残りて水を湛へたる地なとあり冨士見松とよべる老樹あり其地より斜に芙蓉の峯を眺望せり

旧ハ同しく御所櫻と称せしものありしか後世枯れたりと云て今ハ此樹なし

三州の吉良と称せし世田谷の吉良家ハ清和天皇十世の苗胤足利左馬ノ頭義氏に二子あり嫡男を義継と名け次男を長氏と名く長氏三州に居るこれを吉良と称せ是則吉良姓の祖なり義継ハ奥州に居る故に奥州の吉良と称せ義継六傳を吉良治部大輔治家と号く治家始武州世田谷城に住す時の人世田谷御所と称せ又六傳を吉良政忠と称す法号を同春院といふ其後頼久の世に至て吉良家ハ三州東城西城の外称号にへりくたり宜く蒔田に改むへき旨台命ありしかハ則ち久良郡の蒔田村に住せられ在名をともなひ小田原北条家関東を領せられし頃ハ其縁あるを以て許多の地を領せしよし云伝ふれとも其貫高さたかならす今世田谷領と称せし村数五十七箇村あり其頃一圓の所領なりしと云

宮坂八幡宮　同し寺より西の方北岡續にありて其間三町計を隔つ鎌倉鶴岡八幡宮の摸なしく勧請の年歴詳ならされ天文十五年吉良頼貞當社を建立すと云　或ハ義家朝臣勧請せられし御神義家勧請とあり　又吉良家再興とも云伝ふれとも疑ハしくなりし　祭礼ハ八月十五日なり　社司大場氏の奉祀する所なり
社内に存せる北櫻ハ頼貞親植なりと云伝ふ
按に頼定と云ハ頼康の事なるへし當社建立の棟札に注せる所の頼貞の花押と等々力村大平某所蔵の頼康の古文書に印せる所の花押尤同し然時ハ頼貞ハ頼康の始の名なるへくありしならんと思ハし

當社梁牌一枚 當社に藏む其文左のごとし

天文十五丙午八月廿日立柱 同十二月十六日上棟 同廿日癸卯御遷供養道師 鶴岡相承院法印大和尚位快元 □□□□□□□□□□
當社八幡宮新建立大檀那源朝臣頼貞（花押） 鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗 熊澤入道々弥
同 松原藤大夫 同 寺覚院権律師□□ 大工 青木右馬助安重
干時惣奉行江戸摂津守法名浄仙大全 奉行石渡戸新兵衛 常久 惣大工番匠 山井大蔵丞 西村左近將監吉重 番匠 由木内匠助 鶴岡兼任法橋 北面 法橋孔善

延命山勝光禅院

豪徳寺の前の道を隔て向ふにあり洞家の禅刹にして八王子安下の心源院に属せり本尊ハ虚空蔵菩薩にして座像二尺計あり 作者知れず 建武二年乙亥世田谷御所吉良兵部大輔源頼氏閑創の精舎にして往古ハ済家の禅宗にて龍鳳寺と号せり 豪徳寺所蔵吉良系図に左京大夫とあり又當寺に相伝ふ頼氏法号ハ與善寺殿月山清公と号す故に始當寺を與善山と号すと云ひ世田谷私記といふものに與善寺を治氏の法号とし又豪徳寺吉良系図の中に政忠の二男文貞といふ人の名の下に禅與寺ともあり 諸説紛々其實を得がたし 鎌倉建長寺の吟峯龍公禅師開山たり 文和三年甲午五月七日示寂せり 其後天文十五年丙午世田谷吉良家六世の孫左兵衛佐源頼康 豪徳寺吉良系図に正三位武衛左兵衛督とす法号ハ勝光院殿脱山浄森居士とあり 中興開基たり然るに天正元年癸酉同吉良家七嗣の孫左兵衛佐従四位下源氏朝 豪徳寺所蔵吉良系図に左兵衛督とし法号を實相院殿と号し巻の實相院と違へり 當寺の号を勝光院とあらためし又天永琳達和尚 琳達和尚ハ小机村雲松院の住持たりしを氏朝請して當寺に住せしむ 今の如く曹洞派の寺院とせり 當寺過去帳に延命院殿尚山栄久大居士と云法名を載す疑らくハ當寺の山号此号より出るならん歟 此延命院没卒の年号忌日をもらせり又何人なるをも按るに世田谷私記といへるものに延命院ハ吉良経家なりといへり 経家ハ奥州の吉良家にして又太郎と号せし人なり

愛染薬師如来 丈二尺斗木像運慶の作なりと云 相伝ふ往古北条氏康卿の息女崎君常に此霊像を崇信し天文六年の春此尊像の霊示により 蒔田の地にて三千石賜ひ 後に永禄元年世田谷御所頼康卿の室となれりと縁起にみえたりといへども中興のものなれバ拙文ところ疑しきこと多し 故に其文ハ略して記さず

按に崎君ハ氏綱の女にして氏康に[illegible]

廣戸備後又三郎正之碑　當寺佛殿の右にあり正之ハ駿州の産にして柳営社稷の臣なり高祖五郎入行（二階堂山城三郎行村十三世孫其先ハ京都）江州廣戸郷を管領せるに因て氏とす永禄十二年己巳召に應して　御當家に仕まつり後仕を致して世田谷の地に退居し慶長十七年壬子十二月十二日行年八十八歳にして終る依て當寺に葬むる延宝八年の冬孝孫行隆正武江次等立る銘せり

吉良氏古塋　堂前左の方にあり頼康の古墳も當寺にありといへども定かならず藤田の勝國寺にあるもの信ならんといふ興善寺の墓塔も此ぞあり

鶴松山實相院　登戸通道世田谷元宿の左の裏通弦巻村にあり曹洞派の禪林にして同所勝光院に属せり當寺ハ世田谷の吉良家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡にして其閑居の号を学翁斎と称せしと云学翁斎卒去の後（学翁斎ハ慶長八年癸卯九月六日卒とあり）息頼久當寺を開創ありて法号實相院殿学翁玄譽大居士の文字を採て寺号に用ひ天永琳達和尚開山とす（或ハ應天和尚ともいふ）本尊阿弥陀如来作詳ならず

学翁斎の墓碑　境内にあり又當山開闢鶴松院殿快窓壽溪大姉と称する石塔並ひ立り鶴松院何人なることをしらず猶可尋　氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子にして今川の一族堀越治部少輔貞基の次男にて駿州瀬名陸奥守一秀の弟なりといへり

弦巻郷　世田谷にあり此地ハ昔柔原右京進といへる人の所領たりし由永禄二年小田原北条家の所領役帳にみえたり

世田谷八幡宮　同所にあり相傳ふ八幡太郎義家朝臣の勧請なりと云則此地の産土神にして祭礼ハ八月十五日なり

龍華山永安寺　長壽院と号す天台宗にして東叡山に属せり本尊千手観音ハ恵心僧都の作なりといふ開山を清仙上人（俗姓ハ二階堂氏なり）開基ハ鎌倉公方源氏満朝臣なり中興開山ハ東海法印（俗姓石井氏なり）同中興開基ハ石井内匠兼雄法名を良賢居士と号す

龍華樹　堂前澗樹を号く今ハ枯たり當寺の開山清仙上人鎌倉大蔵谷永安寺の旧地より遷し栽たりとなり當寺を竜華山と号るも此樹によるとあり永安寺の旧跡ハ鎌倉大蔵谷瑞泉寺の門外右の谷を云往古永安寺ハ源氏満朝臣の菩提所なりしと云

石井氏移塋碑　本堂北の側にあり

相傳鎌倉公方氏満朝臣（左馬頭基氏の子なり）應永五年十一月四日逝去

あり永安寺殿壁山全公と号ス仍鎌倉の大蔵谷に新に一精舎を造り直に其法号を採て永安寺と号し建長寺の曇芳和尚を請して寺主たらしむ 諱周應夢窓國師の法嗣なり建長寺瑞林菴の開祖なり 夫より後満兼朝臣持氏朝臣相継て重修ありしに永享十一年二月十日持氏朝臣此寺に於て自害せられしかハ 管領上杉憲実の所為なり 其男成氏公 永寿王殿と云 幼稚なるに依て暫く難を美濃國に避らる然に嘉吉元年京都将軍の命を奉して再ひ鎌倉に帰入しありといへとも上杉の両執事良からされハ上を蔑し権柄を争ひ闘諍遂に止時なく享徳四年六月十六日今川上総介か為に鎌倉を追補せられ當社宮殿民居に至る迄悉く灰燼となり永安寺も又廢亡せし然あるに於て足利六世の繁昌一時に滅し都會空しく草莽の地となりしを爰に二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣に仕へて不二股肱の臣なり永享の時公の従臣悉く永安寺にて死す信濃守一人公の遺命あるを以て倶に死することを免されしにて遁る其後裔孫名ハ某法名清仙と云者あり永安寺を鎌倉幕府世々の墳壟安鎮の地たりしに荒亡年久しく兵馬馳走の巷となることを患へとし終に再復の願を発し延徳二年三月勝長寿院の門主 寺記に持氏公の猶子とあるを其諱を注さず の命を奉して此武州中丸郷大蔵村ハ其名鎌倉の旧地に同しきを曰拠として禅刹一宇を建立し鎌倉幕府世々の神主を安置し寺号をも又永安寺と称す門主某の功を挙て長寿院と云 當時の開闢なり 天正年間當寺第六世良深より以後台密の二教に改て堂宇を修補し然といへともはかなく柴椽草堂のまなりしを明暦の頃石井兼忠と云る人其父良賢居士の没後追福のため堂塔を重修し佛殿を荘厳せし是中興開基なりき

不動明王画幅 妙澤筆聖護院道興准后開眼せられしと云 伝ふ即紙中に華押を注してあり

妙澤和尚ハ嘉慶の頃の人ゟしく足利三代義満公の時世ニ當まう大草紙ニ
妙澤ハ夢窓國師の法嗣ゟして不動明王の化身なり是の時より始めて不動明王
の御影を画き（本朝画史云毎日一幅を画き数ヶ恵多し）寄特をあらハせしへのを秘とす
十八年道輿准后東奥下向の時其門徒なりし松井坊ニ宿しかひこれを閲眼あり
そ即時紙中ニ記搬ともかくれしを後石井氏の家ニ傳へしを兼重とてる人の時當寺ニ
附与せしとて

岡本半助裁許状一通　武蔵七黨系圖　古写本なり

氷川明神社　大蔵村ニあり永安寺別當奉祀せり祭神五座大己貴尊素盞嗚尊奇稲田姫手摩乳脚摩乳等なり祭礼ハ毎年九月廿一日なり相傳ふ暦仁元年（九月九日遷宮同廿一日始祭祀を行ふといふ）當地の主江戸氏（此江戸氏ハ桓武平氏の裔良文の流畠山の一族ゟしく北見氏の祖之）足立郡大宮の御神を勧請す旧を唯一宗源の社なりしゟ其後二百有餘年を経く天文年間松井坊とてる山伏奉祀の宮となり両部習合とす（此松井坊ハ武州都筑郡の人ゟしく大田道真の臣）なり依て道真ゟ崇せし処の十一面観音の像を傳来しそり挿せるの後氷川明神の本地佛となしまつるとそり（或云永禄の頃迄ハ當社の別當ニ松井坊奉祀）たりしゟ後田中三河守とりつる人神職とあり再唯一とせしと云　當社昔ハ五所ニ並ひ建く宮居巍さうしゟいつの頃ゟうちを荒廃しく唯此一社のミ残れまと云　其の灯の棟札ニ戴く氷川明神第四ノ宮とあるゆくあるくし　然ニ明暦年間永安寺第九世辨栄法印別當ニ補せられしより再ひ習合の社となし神躰及ひ本地佛等を新ニ安置せらるゝなりとあり昔の神躰ハ江戸氏の兜の立物ゟしく黄金の瓶子ニ畠山重忠と銘しくありしとなりされとも何の頃ゟか失ひうりとく今ハなしといふ

棟札一枚（當地石井氏の家ニ傳ふ按ニ棟札ニ神主田中松井坊敬白とありしハ田中と松井坊別人ニあらずして田中ハ松井坊ヶ俗姓ニてありしゟ）

面

哀愍衆生者　永禄八年乙丑正月十九日
武蔵國荏原郡（石井土郷）大蔵村氷川大明神第四ノ宮
我等今敬禮　神主田中松井坊敬白云云

裏

再建副願主　長島源太郎　清水源兵衛　石井玄蕃　伊丹孫次郎　河野大學

大旦那　武運長久　石井内近助平兼實敬白云云
庄屋

大野新兵衛　大工石渡

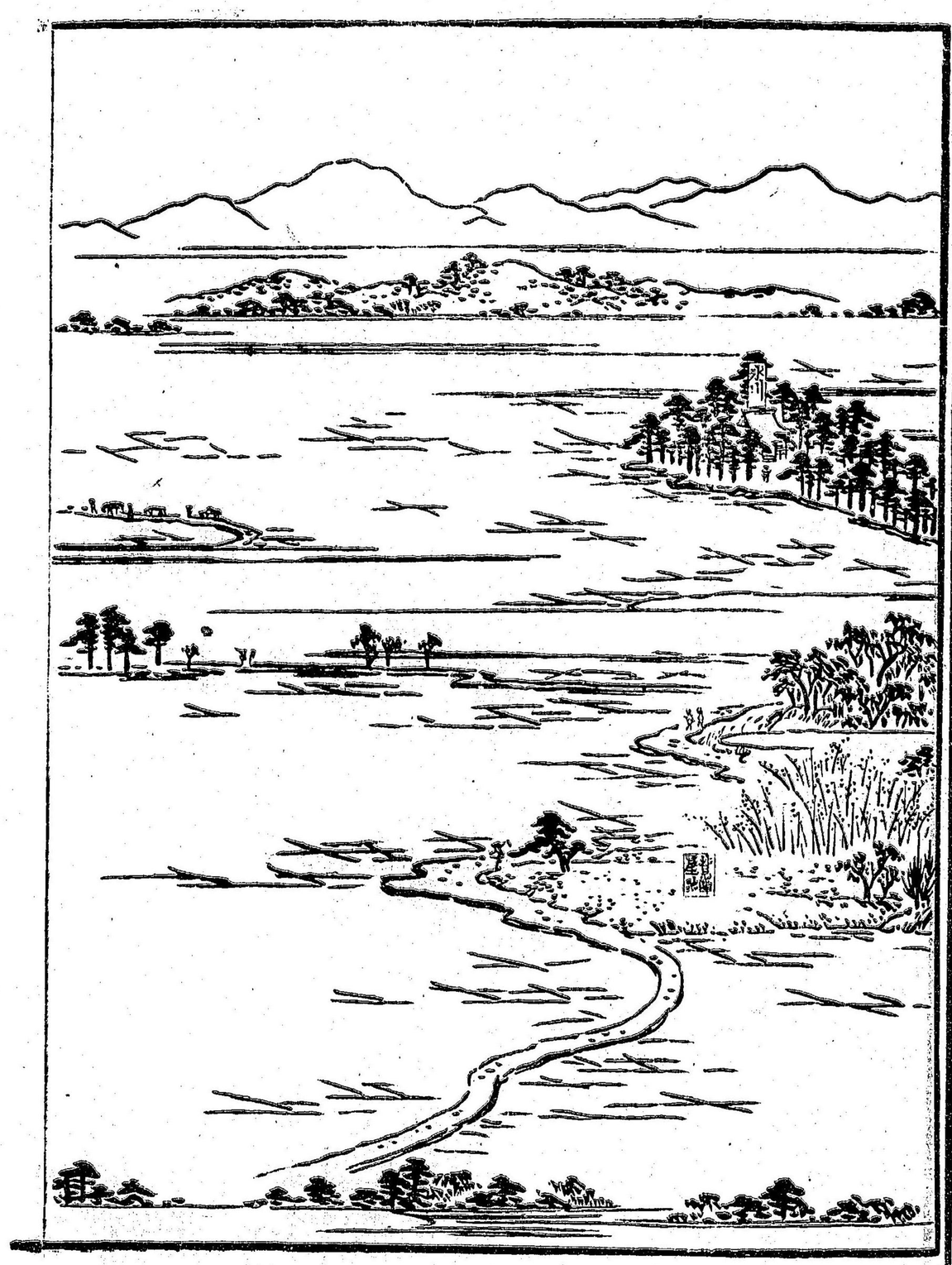
帯刀先生義賢之墓　大蔵村石井土の内殿山といふ地の東南喜多見村の境の農家清水氏の宅地の傍にあり　清水氏ハ清水冠者義高の後裔なりと云先に挙る氷川宮棟札の中に清水源兵衛とあるハ則この清水氏の祖なりとぞ　土人ハ大将塚と呼べり

東鑑曰治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曽冠者義仲主者帯刀先生義賢二男也義賢去久寿二年八月於武蔵国大倉館為鎌倉悪源太義平主被討于時義仲為三歳嬰児也乳母夫中三権守兼遠懐之遁于信濃国令養育之云々

相伝此地ハ義賢居館の旧址なりし故に殿山の称ありといふ　天明年間此地の農民清水氏義賢の塚をあばきしに石壁の中に古刀及び砂金の類を存せしとなりされど祟あるにより旧の如く埋蔵しけるとなり　其後大永年間石井氏某法名良覚と云し人京都より此殿山の地に移り住を（土人云く同所新坂の上神明宮の脇に大六天の宮あり此良覚の霊を祭ると云）或伊田中務大輔兼紀と云人の居跡なりともいへり（按に石井家の先祖良覚ハ武州久良岐郡釜利谷の伊丹氏なりしが小田原に属し暫く伊丹氏と詐せしなり然るを後世丹を田に誤り伝へしと云ならん歟）されど中務大輔兼紀と名乗るもの其縁家なりと所伝なしとぞ後世土人伝へ誤るなるべし又先に挙る氷川明神の棟札に石井内匠助兼實とあるハ良覚の子にして其子孫今猶連綿たり

大神宮祠　殿山の中にあり永安寺より別当兼帯す神木ハ至ての老松にして土人乳垂の松と号す

石井神社　抜巻村より西南の方大蔵村石井氏某の地にあり（大蔵邑古名荏原郡に属せし明暦より己降多磨郡に入たり）祭神詳ならず寛永年間石井氏兼忠社を旧地（石井土谷と云）より今の地へ移しまつり稲荷を相殿に合祭せり又近世故ありて同兼昌磐井と斎の仮名ハ違へども其訓の相似たるを以て斎稲荷と称せりとなり　土人云当社ハ武蔵国荏原郡二座の内延喜式神名帳に載られたる磐井神社是なりと（石の文字古事記日本紀等に伊斯或ハ伊波ともありて一字二訓なり土人云磐の文字最筆画多くして書きがたきゆゑ其便なるを厭ひて石の文字に改めたりとかや地名の文字改め用ひたる其例多し）旧地ハ今の社より七八町を隔て同邑石井土谷にあり其地に甘泉あり武蔵国風土記残編に所謂荏原郡磐井神社の辺磐井ありと記されたるは則此霊泉ありと


氷川

氷川明神社
禅善寺
慶元

云云 相傳ふ往古鎌倉右大将家の幕下安達藤九郎盛長の孫同出羽守景盛の次男石井石見守兼周その子同左衛門尉兼章仁治元年庚子執権武蔵守経時の吹挙により始て武州石井郷を賜りて此地に移り住む 石井郷も明暦の頃大蔵邑と共に多摩郡の内に加へられ今ハ大蔵邑に属して小名となれり今石井神社の旧地を石井土谷といへる古の称をうしなハざるの證なり此地古き御図帳あるひハ古碑の類ひにも荏原大蔵邑と記せし證とすべし又等々力満願寺古文書の中に弘治二年丙辰十二月十八日吉良左兵衛佐賴康より吻へ下の文に大蔵村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫満願寺へ一貫分とあり云々 故に石井を以て氏とし則當社をも崇しまつり石井氏累世鎮護の神とすといへり

按に荏原郡不入斗村に鎮座ましませし鈴の森八幡宮を以て社司等ハ式内磐井神社と称し又石川中納言豊人卿武蔵守に任し荏原郡に在せし頃靈亦まうりて始せし宮社なりと云伝ふ 按に續日本紀に延暦七年二月中宮大夫従四位上石川朝臣豊人を兼武蔵守とし同年七月大蔵卿をも兼と云 然に國の守上古ハ府中に在せしよし 旧史にも當國の府古多摩郡にあり大蔵村の頃荏原郡に属せしとも多摩郡に接しまつり府には遠からず恐らくは豊人卿此地に在してより後世大蔵の号ありしならん又武蔵國風土記残編に荏原郡磐井神社の條下に社辺に磐井ありと載せり然るを當社旧地石井土谷も今ハ多摩郡に加へられしといふ背ハ荏原郡なり其旧地甘泉涌出して石井と号し旁鑑これハ因あるに似たるを 按第二巻鈴の森八幡宮の条下を照合すべし

東覚山吉祥院地蔵寺と号ス大蔵邑の南鎌田村にあり天平十二年庚辰行基大士開創にて新義の真言宗なりしく小杉の西明寺に属せり

本堂 本尊地蔵菩薩 立像丈長一尺七寸 行基大士の彫像なり

不動尊 同堂内に安置す良弁僧都の作なりとく刑部少輔源義光頼所の守るなりとぞ

印子歓喜天 弘法大師の作鎌倉副元帥平泰時祈祷の本尊なりといふ 七観音画影 興教大師の筆往古當寺盛なりし頃ハ仁和寺に属せしより久安四年戊辰覚法親王兵乱をさけて此地に下り給ひ同年中夏の頃より初秋に至る迄當寺に宿せられし頃の寄附なりと云 日輪弘法大師画影 嵯峨帝八宗論の御影なり同大師の真筆とあり 然も是も仁和寺宮の寄附なりといへり

縁起曰天平十二年庚辰行基大士勅をうけて諸國に伽藍を造立したまふより其頃當國に至りたまふ然に此地に齢六十になれる貧女住む幼より地蔵尊を信しまゐらせ称名しばらくも止時なくて供養しまゐらする彼貧女一日行基菩薩の許に到て

未来成佛の道を問ける同十三年辛巳正月廿四日行基菩薩此地に至りたまひ地蔵尊の像を彫刻ありてこれを貧女に与へて曰く此地は則ち有縁の霊地なり汝直に精舎を営むべし吾其勝地を卜まへしとて拄杖を以て地上に書して是を定む（今地蔵屋敷と云は其旧跡なりとぞ）依て貧女は（其頃世に地蔵尼と字せしとなり）薙染して寺院建立の大志を企つるに同郷の富民秦氏某なる人糧財を喜捨し田園を附しければ精舎僧坊悉く落成し称名散花梵唄の声絶ることなかりし然に建武二年の兵乱に堂宇悉く灰燼となりしより已降年あるのを假に草堂に安しまりしに遥の後世田谷の吉良氏不測の霊夢を蒙りて大に崇敬ありて寺院再興ありしかど竟に天正の頃小田原北条家没落の後は吉良氏の家も共に亡びしかあり其後は漸香花の備もおろそかになりて今は僅の草堂一宇を存せるのみ（往古堂舎兵火の為に灰燼せし頃も本尊は自ら火焔を遁れさせたまひて恙なし其後此里に住る川辺氏某妻の安産を祈るに於てしるく奇瑞ありしかば報恩の為永世當寺の檀那となり其頃田園等を喜捨しまゐらせしなり）

観音寺

観音寺 吉祥院より八町ばかり西の方宇奈根村にあり當寺は永正年間天台の沙門實海（河越喜多院第十四世なり 天正五年八月十七日化寂せり）創建せる所の寺院にして深大寺に属せり本尊は十一面観音の木像は伝教大師の作なり故に寺号とせりといふ（昔は相州小田原にありて圓正寺と号せしが兵火にかゝりて炎上の後あるとき寺号を更るといふ）

荒井対馬治義墓（當寺にあり相伝ふ治義天文中上野国新田より来て小田原の北条家に仕へ後此地に遁れて民間に交はる 天正元年癸酉二月十七日没せる由碑面に見えたり 荒井氏の子孫今に郷士として相續せるものは此わたりにあり）

永劫山慶元寺

永劫山慶元寺 華林院と号す観音寺より七町あまり西の方喜多見村にあり浄業の精舎にして木机の泉谷寺に属せり本尊阿弥陀如来の坐像は一尺計ありて恵心僧都の作なりと云開山は真蓮社空誉上人と号せり當寺は江戸遠江守の後裔（江戸刑部少輔頼忠の子を江戸摂津守朝忠とよぶ此人も頼忠に同じく小田原に属せり頼忠の次男勝重始勝忠と云より江戸氏を改て其采邑喜多見の地名を以て氏

とし喜多見若狭守勝重と改名を小田原没落の後遊客となり卿當家は屬しける
かゝ江戸へ御當家代々居城の地なるを以てもとありて氏を改とゝ勝重の二男喜多見
五郎左衛門重恒其子若狭守重政より後其家滅す　喜多見氏建立の寺院なりとぞ

天神森　慶元寺の前小高き岡まあり　北見氏陣屋の跡なりと云　歌枕天神と号ぐ
寄托の来由　天王を相殿とせり　相傳往古澤庵和尚堀南宗寺ふ
勧請せられしを兼應年間喜多見久太夫重勝大坂まあり
頃神木の梅樹と共ふこの地ふ移し自の園中ふ勧請せ天神
森其旧跡なりと云神影八画像やゝく古土佐の筆と云後故
ありて此地石井兼重の家ふ傳へ梅樹も又自庭前ふ迄したり
後兼重の子通兼と云人大藏村の永安寺ふ安置せ
なを改よ永安寺ふも神木の著まあり

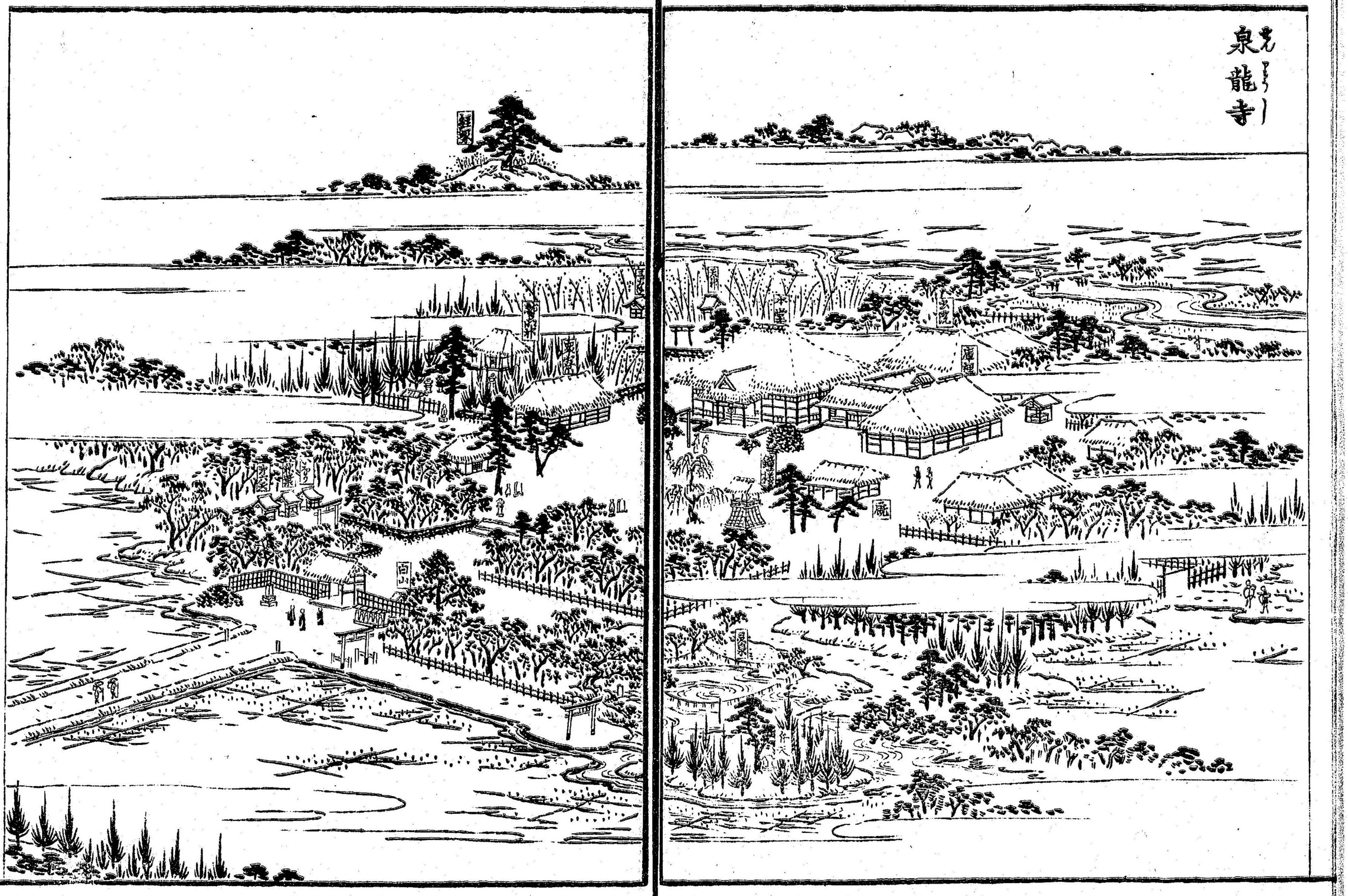
除蝗地神祠　北見村の内宿とゝる地ふ住る農家斉藤伊右衛門
某う家ふ傳へ毎歳四月八日ふ此神祠を豬人ふも蝗蛇に
觸れるゝ人此家ふ至ふ禁呪をとへ忽ふ痛を去毒を消

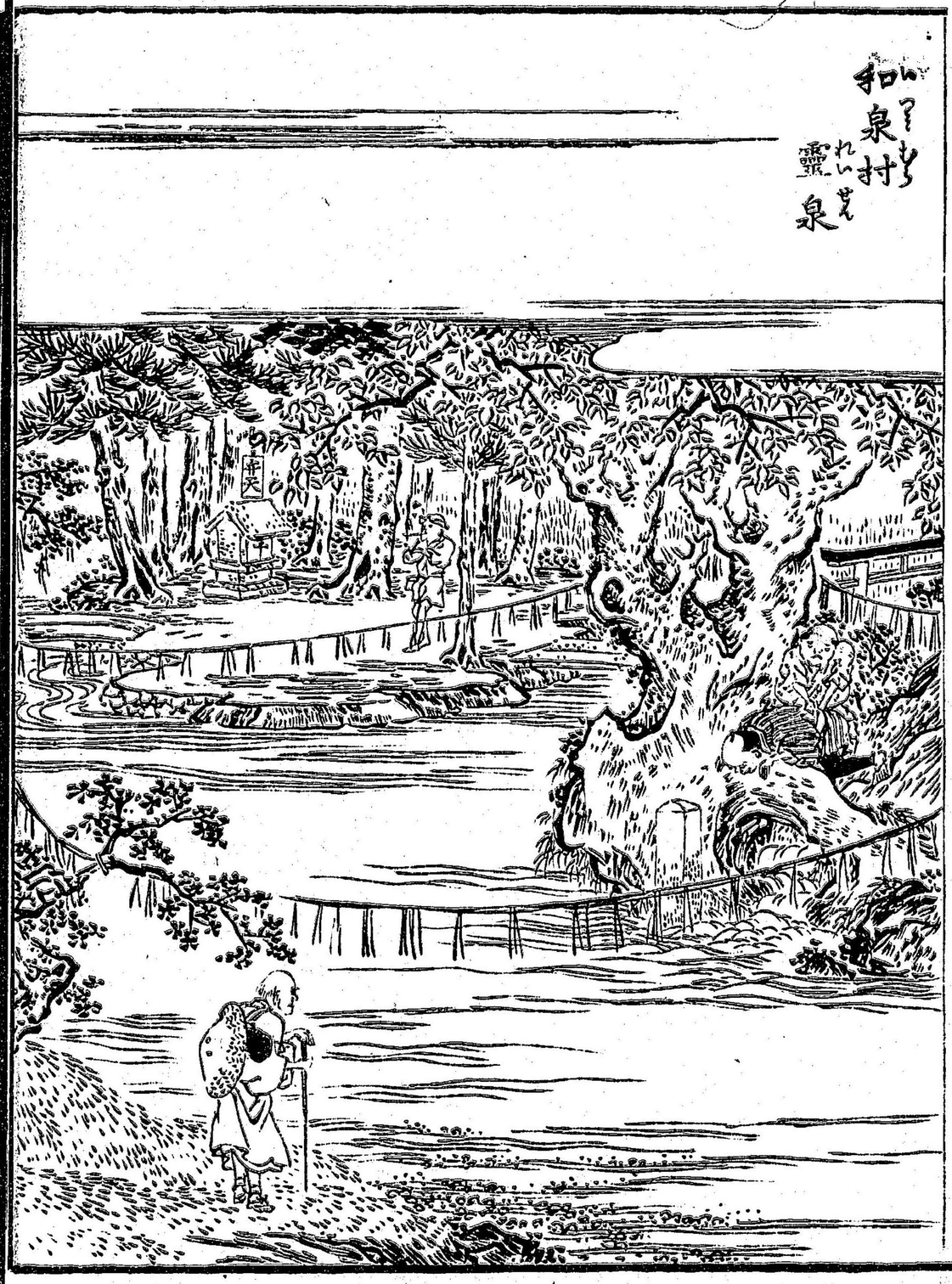
普命山禱善寺　華蔵院と号同所北の方へ廻ること三町餘ふ
ある天台宗ゆゝく深大寺村の深大寺ふ屬せり　氷川明神の別當寺ゆゝく昔八宮本

甚奇なる其神祠ふ永禄二年未九月廿日斉藤道善
藤原忠嘉再改之と注したり

本尊と云
八座像の藥師如来ゆゝく二尺五寸計ある脇士ふ十二神將
の像を置ゝり往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那とゝ
藥師堂　本堂の前左の方ふあり　宿願ゆゝく立像一尺八寸計の木像ゆゝく作者ふる
常光の子ゆゝく小田原北條家ふ屬す　江戸太郎重長五代の孫江戸彦次郎
故ふ遠俗宿願藥師ゆゝく通宵法施供養なしまゐらせ家へ迎しまゐらせ通ふ
称しまゐらするとぞ

氷川明神社　同所の左ふ並ふ禱善寺別當奉祀を祭礼ふ九月十
八日なる相傳勧請の年歴久遠ゆゝく詳なゝすとぞ永禄十
三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せ一頃の梁牌


光泉龍寺



扣泉村
靈泉

一枝當社を存す　寛永二年九月五日江戸氏の遠裔喜多見勝重當社を重建せりと

梁牌銘曰

別當宮本房

奉　聖主天中天　加陵頻伽聲　代官　香取新兵衛
再造氷川明神社頭一宇天道納受依　大工石渡
良縣衆生著我等今敬禮　鍛冶正吉
大檀那江戸刑部少輔頼忠

同背面曰

于時永祿十三庚午歳卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表　左右石柱の表面三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝同五郎左衛門鳩村
重恒等建立せりと

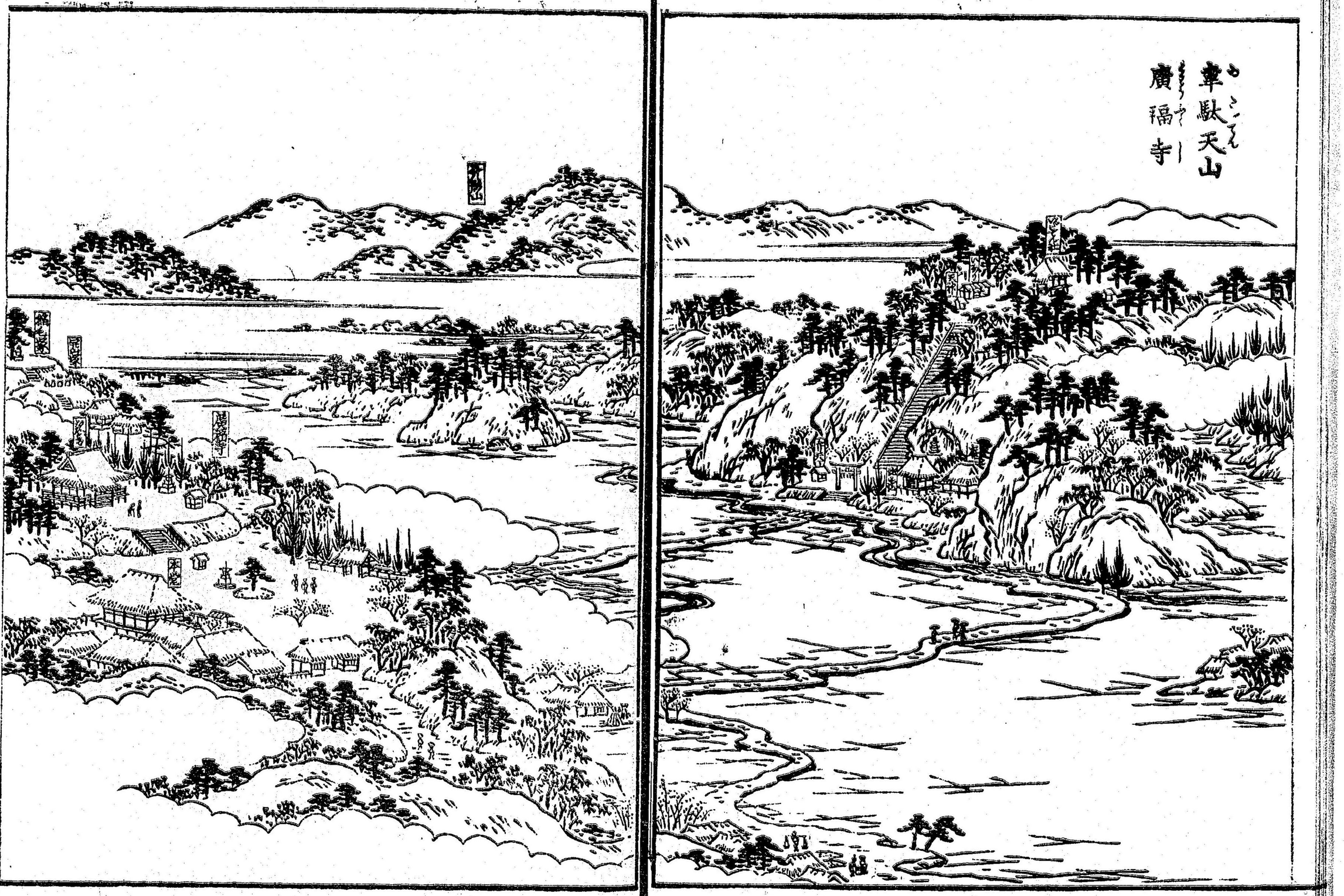
馬頭觀音堂　華表の右の方にあり境内高し崇むるといへ

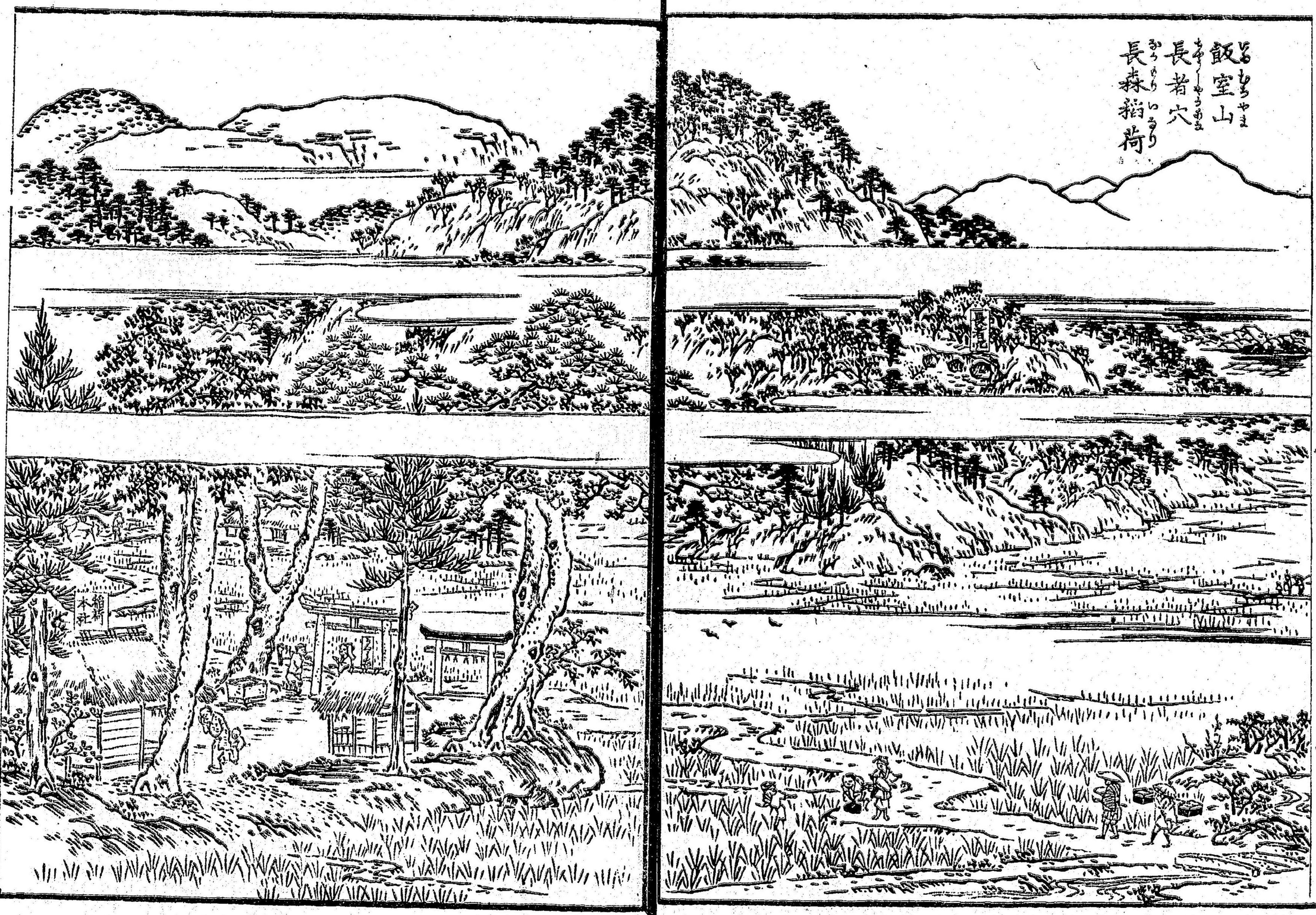
江戸遠江守旧館地　氷川明神の社地より一丁許巽の方小と

藤の擁雜たるを名つく今ハ除地とす　延文三年十月十日

竹澤右京亮と共に謀て矢口の渡にして新田左兵衛佐義興を
亡したりし江戸遠江守是なり 其するハ矢口明神の社下に在なり
雲松山泉龍寺 氷川明神より八町ばかりを隔て西北の方和泉
村にあり曹洞派の禅刹にして相州高座の宝泉寺に属せり
本尊釈迦如来の坐像ハ八寸計ありて脇士にハ阿難迦葉あり
像を置るも 丈七寸 脇檀に聖観音の像を安置せり良弁僧都の
作なりと云 当寺ハ良弁僧都の草創にして往古ハ法相華厳を
兼て大伽藍なりしとなり 中興を鏃叟瑞牛和尚と号れ相伝ふ
孝謙天皇の御宇天下大に旱魃す依て良弁僧都請雨の
法を修せられしに奇特ありて清泉湧出すと云 即門外南の方に
有る霊泉是なり 此地を和泉邑と名はくるも此清泉によりてなり 又小田原北条家の分限帳に江戸泉村七貫文と
するの地を加へしを・
霊泉総門に并びて右の方にあるも槻の樹の根より湧出して

沸こるも此池水のみる旱魃にも枯るゝ事なく此近里悉く耕
田の用水にもちひるとぞ寺号も此霊泉に依て名付と見えたり
池の中の島に蛇形の弁天の像を安せし宮居あり 此霊像ハ良弁僧都の作なりといふ
経塚 寺より後の方用水堀を越て一丁あまり艮の方畑の中にあり少き岡の上に三囲もあまりの老樹あり 往古良弁僧都此所に仏経を埋め松を植て印とせしと 此樹下に古碑六枚あり一ハ上に梵字を刻し下に六字名号を記し左右に明応六年巳正月十六日とあり又一ハ上に梵字を刻し下に阿含釈良弁と記し明応三年壬申六月十一日とあり又左に毎自作是念以何令衆生得入無上道速成就仏身とあり 其余の四枚ハ鉄損して文字読得がたし
松木山広福寺 昔ハ稲毛山と号しけりといふ 菅村の内府中往来の
道よりも右の方四町ばかりにあり 新義の真言宗にして三ツ頂の
高勝寺に属せり本尊五智如来ハ座像九尺計あり開山を慈覚
大師中興ハ長弁阿闍梨と号 安貞元年丁亥十月十日化寂せり
観音堂 本堂より後の山の上にあり 本尊正観世音の像五寸ばかりあり 胎中に稲毛三郎重成念持仏の観音の小像を収むるといへり 此堂中に
重成の肖像あり 此ハ重成以下の位牌を置けり
稲毛三郎平重成禅門法名道全 名の上に丸の中に上羽蝶の下に一文字の紋を画けり
元久二乙丑年六月廿四日


華獄天山
廣福寺


飯室山
長者穴
長森稲荷
本社
稲荷

其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舍弟榛谷四郎平重朝法名諦悟同男の榛谷太郎平重秀法名道風同小次郎平重秀法名如月一子小澤次郎平重政法名真悟等以上五人の靈牌ありいふも元久二年乙丑六月二十三日とあるも又同じ形の靈牌小稲五郎平行重法名玄理と注せしものも存せれとも没卒の年月忌日を注さず追て考ふべし

按ず元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政が讒訴を請け重忠父子を誅さむと計議ありて同廿二日由比濱ほおいて畠山六郎を誅し同日申刻二俣河ふおいて重忠愛甲三郎季隆が箭ふ中りて誅せらる後小次郎重秀およ郎從等自害を遂る廿三日又鎌倉中騒動ふ三浦平六兵衛尉義村謀て榛谷四郎重朝同嫡男太郎重季次郎秀重等を経師が谷ふ誅す稲毛入道ハ大河戸三郎が為ふ誅せらる子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一ふ誅せられて東鑑ふ見えたり何も此時死亡の人々ふして重成の一族なるが故ふ當寺ふ靈牌を置きしし又按ず榛谷太郎當寺靈牌ふハ重秀とあり大系図東鑑等ふハ重季とす同小次郎靈牌ふハ重秀とし大系図ふハ季重ふ作る猶一の考

一室圓如大禪定尼　建久六乙卯年七月上四日

かく注せし靈牌もあり寺僧も其人をしらざれとも東鑑ふ因て考ふに即稲毛三郎重成の室なること明けし

東鑑曰建久六年乙卯六月二十八日辛巳稲毛三郎重成妻北条息女於武蔵國病悩太危急之由飛脚到著下略

同書曰同年七月四日丙戌稲毛三郎重成妻於武蔵國他界日來病悩雖加療治終被侵風痾畢重成不耐別離之愁頓催勇敢心忽遂出家云云

稲毛三郎重成墓　観音堂の後の方山の上にあり小き五輪の石塔にして半土中に埋れたり

當寺境内ハ櫻樹多く春時爛慢たり故に近邑の士人閑花の時を待得て此地に來りて宴を催し遅々たる春の日も飽暮を惜く思ふなるへし

韋駄天宮　廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹にあり廣福寺奉祀せる所にして韋駄天の尊像ハ廣福寺の佛殿に安置せり祭礼ハ九月十五日に修行す

按に此地の小名を稲の目と称ふ識人云延喜式神名帳に武蔵國男衾郡稲貴神と云又神名帳頭註に稲乃貴神ハ稲田姫なりとあり疑らくは當社往古ハ稲乃貴社なりしを後世稲田姫と韋駄天とを混して誤まるなるへし歟とすれは稲目も又稲の目の誤なるへし歟

升形山　廣福寺より南の方の後の山を云稲毛入道重成居城の旧趾なりと山頂ハ八町四方ありて升の形状をなす故に斯号く重成ハ小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聟なるも秩父大夫重弘か甥重忠従弟にして頼朝公の幕下に屬して稲毛の地を所領とせり然に重成ハ重忠と日頃不和なるより牧の方と共に時政に讒しけれハ元久二年乙丑六月廿二日重忠野心の企とて時政勢を向けて畠山一族を誅伐す重成親族の好を忘れ重忠を讒害せしゆへ天道に背の罪遁るへしとて終に和田義盛大河戸三郎宇佐美与一等をして武蔵國へ發向せしめ同廿四日稲毛入道父子を誅せらるとなり　東鑑北条九代記等の書にみえたり

稲毛と称する地ハ廣大なりし登戸の渡より川崎の辺まての地を總て稲毛領と称して往古ハ四萬八千石の地なりしといへり　大平記にハ江戸遠江守同下野守伯父甥か所領稲毛庄十二郷とあり又小田原記に信玄江戸を廻りて小田原へ押寄むとするとき其下に矢口の渡を越そこより稲毛の平間と云地へ押よせ稲毛の十六郷を追捕せしともあり又永禄二年北条家の分限帳に竹内本月小倉長尾鈴木小田中分鹿島田端宿中田分鹿島田中村分矢向平間梁屋経久末長久本小田溝口平の村高田等以上稲毛の内とす證とすへし又同し頃北条家の武士打方渾正明連か家臣田島兵部左衛門之房横山式部弘成駒林図書定朝等皆此地に住しけりといひ傳ふ

飯室山　同所左の山續にして山頂に七面冨士浅間を勧請す

長者穴　同し山の東の裾にあり入口ハ一間四方あまりなれとも窟中甚廣く同し程の叢室二ツ並ひてあり土人も其名義をしらすといへり

長森稲荷社 同所四丁計を隔て菅生村府中往来の街より右の方蒼林の中にあり同所日蓮宗安立寺奉祀せり

祭神長森稲荷明神右星夜明神左海光曜明神 以上三神

券族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通相狐神阿参玄狐神阿推白狐神 以上五神

相傳元禄十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲といへるもの花洛にありし頃鳥羽縄手にして一人の美女に逢ふ其美女の云く我八伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりとて靈示あり翌る十一年の夏四月廿日又神告あるに任せ江戸に至り麻布日ヶ窪に住る中原与兵衛といへる者の家に勸請なし大に奇瑞靈驗あり然に正徳五年の夏の頃左仲没せるの後一子加藤次といへる者此御神を讓請て尊信を終に元文五年十一月安立寺の主僧日現上人此地に遷しまゐらせて法華勸請の御神となせり 中原与兵衛ヶ聟なりける有隅次兵衛といふ人此神を尊信し稲穂をひろひ銀封仏雁挙と感ぜし奇瑞あり今とても安立寺に残りし稲荷の

宝物

雪ヶ坂　飯室山の南の續よりも曲折して西へ下る坂路を云登戸の辺より平村辺への通道なり頗る美景の地なり

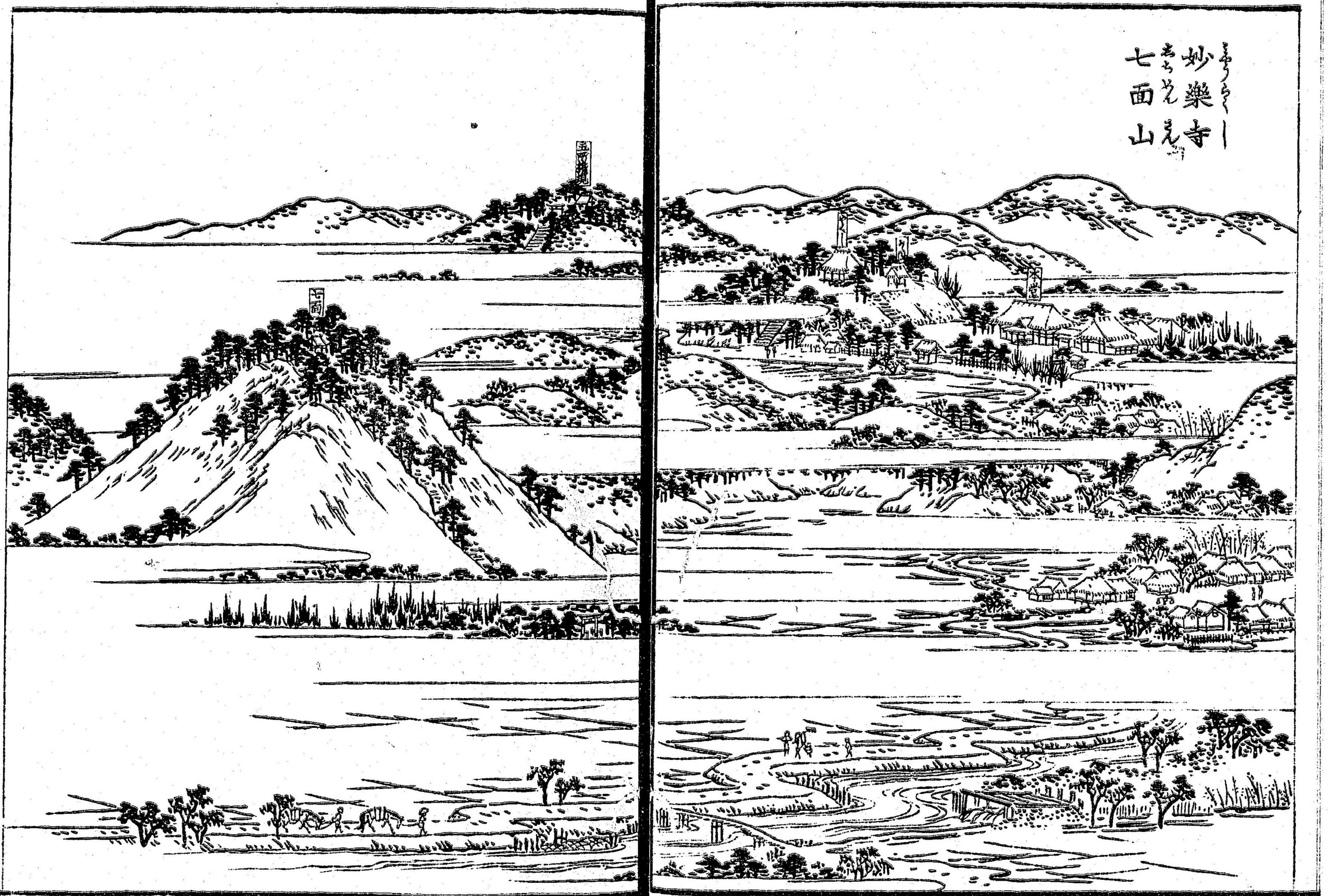
藥師堂　長尾村の内二子街道の右側山の上にあり本尊藥師如来の靈像ハ影向寺の本尊と同木にして慈覚大師の彫造なりと云秘佛にして常に拝することなし　天台宗同所妙樂寺別當なり

大師巖室　土人大師穴と称ふ藥師堂の山の後西向の所にあり入口ハ一間四方ばかりなり空中ハ二間四方にして高サも相同し享保の頃一人の山伏心願のありけるにや断食して此窟中に一七日の間籠りたりと云傳ふるのミにて大師と称する所謂ありがたし　今窟中に青き挽石の古碑四五枚あり

五所權現社　藥師堂の南の山續にあり祭神詳ならず神躰ハ何れも座像にして丈七八寸ばかり烏帽子を冠りめさるゝ或ハ僧形のものもありて都て五躰なり　此木彫あしく尤古物なり粉劣見分かたし　毎年正月二日桃樹の枝を伐て弓とし箭を放ち旧式の祭吏あり

杉山明神祠　相州厚木街道溝ノ口の驛より左に入て十六町ばかり南の方久本邑にあり上の宮と称するハ別當龍臺寺　天台宗深大寺に属す　毘沙門堂の本尊ハ慈覚大師の作なり　の西の山續にありて其間一町半を隔つ下の宮も同し寺の堂の左の方石階の上にあり祭神詳ならず もとより當社ハ延喜式内同國都筑郡星川邑鎮座の杉山神社の摸なるべし祭礼ハ九月廿九日なり　此社へ觸穢の者詣れハ必災ありとて土人甚恐怖せり

稲毛藥師堂　野川邑の内府中往来の道より三丁計西にあり醫王山影向寺と号す　天台宗多摩郡深大寺に屬せり　聖武天皇の御願にして行基大士開基を其後文德清和兩帝御再興ありて慈覚大師修造せり三帝の勅願而大師構営の靈場にして利益著し　此寺上古ハ僧坊百戸三箇寺九院ありて晝夜仕候しけるも盛大の寺院なりしとなり


妙楽寺
七面山

本堂本尊瑠璃光如来（御頭もろとも行基大師の作なり再興の御首ハ座像長五尺　脇士日光月光天共に五尺五寸あり恵覚大師の作なり）

影向石（又佛足石とも称す堂前右の方にあり垣をめぐらし入口に戸鎖ありて扉に人をして入しむる事なし石の大サ六尺四方石面ハ平かにして中真に一尺五寸計の凹なる所ありて常に水を湛へ上に家根を覆ふ是を醫王水と称し病あるもの服飲して霊験を得るといふ）

影向石之碑（入口の左に建り）其文左のごとし

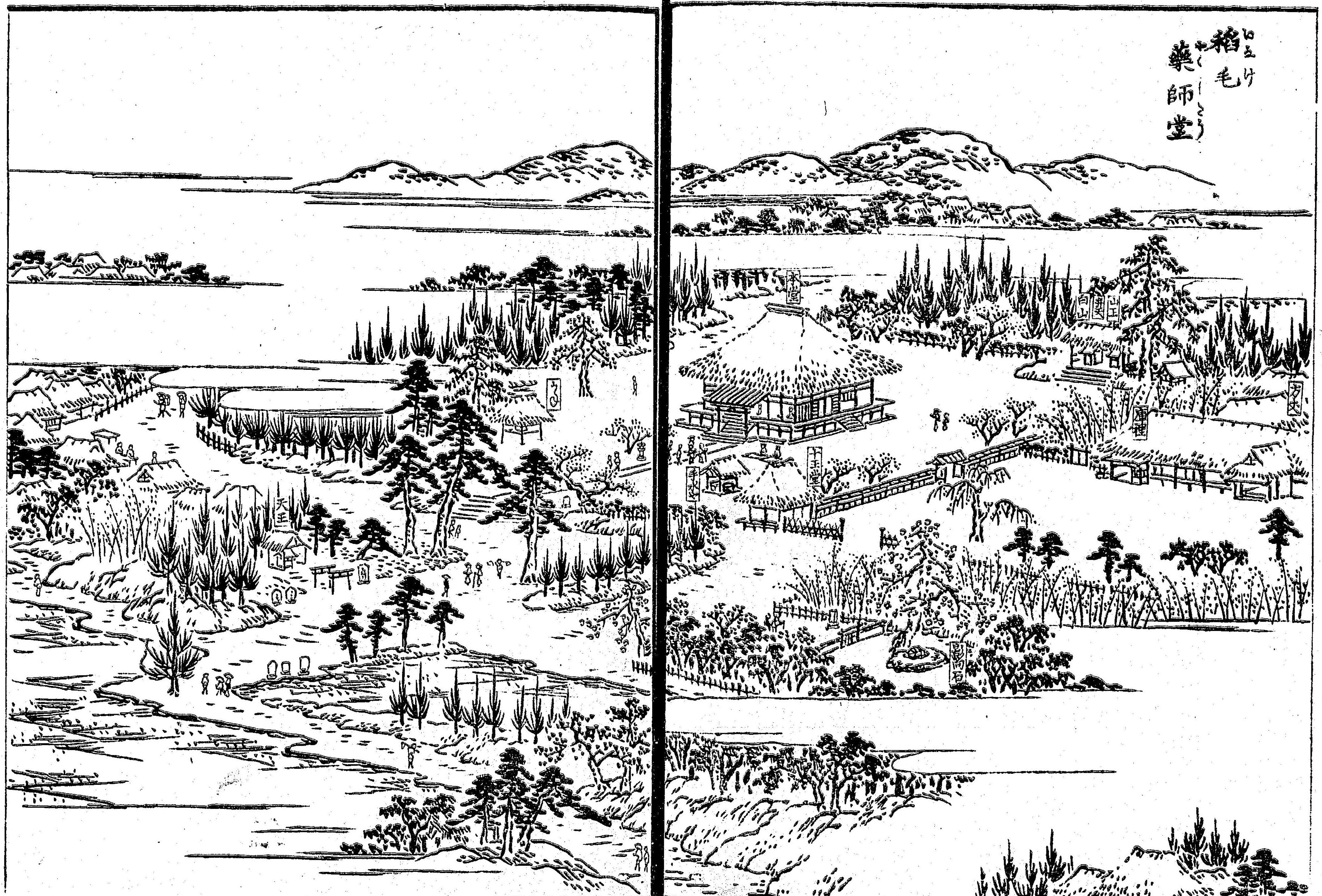
影向石碑

嗚呼神道之妙聴明正直也哉此地堂構社皆天平
之年初基焉　文徳帝之御宇中興焉悉因王造云
有石象凹清泉常満一飲其水則沈痾盡愈人々至
誠所以感於神也矣余曾患眼也多年矣醫藥極術
而未得其験偶至此禱之則變明漸愈雖未如平人
焉大半獲快矣鳴囀霊泉之妙河潤千果也哉敬拜
神霊之威徳而片石以識不朽且表尊信之志也矣
延享丙寅季秋　東都法眼桂川先生門人和州城
下郡大泉村森本亘直立之

東武　菊池政房代撰

平林惇信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の尅に至て聖武天皇の妃（光明皇后是なり不比等の大臣の二女なり）俄に御悩あり天皇自薬師仏を御祈念ありしに翌年辛辰二月十二日の夜一人の沙門忽然として天皇の御前に来り告奉りて曰く武蔵国橘樹の里に（和名抄橘樹郡の中に橘樹といへる地名を記したり今此地名亡ひたりといへども此あたりを云しなるべし）一の霊石あり中心に水を湛へたり仏在世の時仏此霊石に向ひ三国に飛行して永く有縁の地に止るべしと云々然に其石忽然として飛移し此日本の地に移て彼地に止まり件の霊石ハ釈尊の御足を捧げまし大蓮花の其一葉を踏とゞめて末世に残し置たまふ所実に奇特の霊石にして彼地も又霊仏安座の勝刹なり早く一の伽藍を建立し医王尊を安置しなハ皇后の御悩立所に平愈あるべし殊更王城の鎮護として国土豊饒なるべしと坐を立かと見えて其行方を見失ひたまふ天皇此奇特をきこしめされ行基菩薩に薬師仏彫造の勅ありて又武蔵国に勅使を下したまふ同年四月八日勅使当国に下向ありて此霊地を探り得たまひ竟に伽藍造立


稲毛薬師堂
いなげやくしどう
本堂
白山
山王
方丈
庫裡
十王堂
手水
影向石
天王

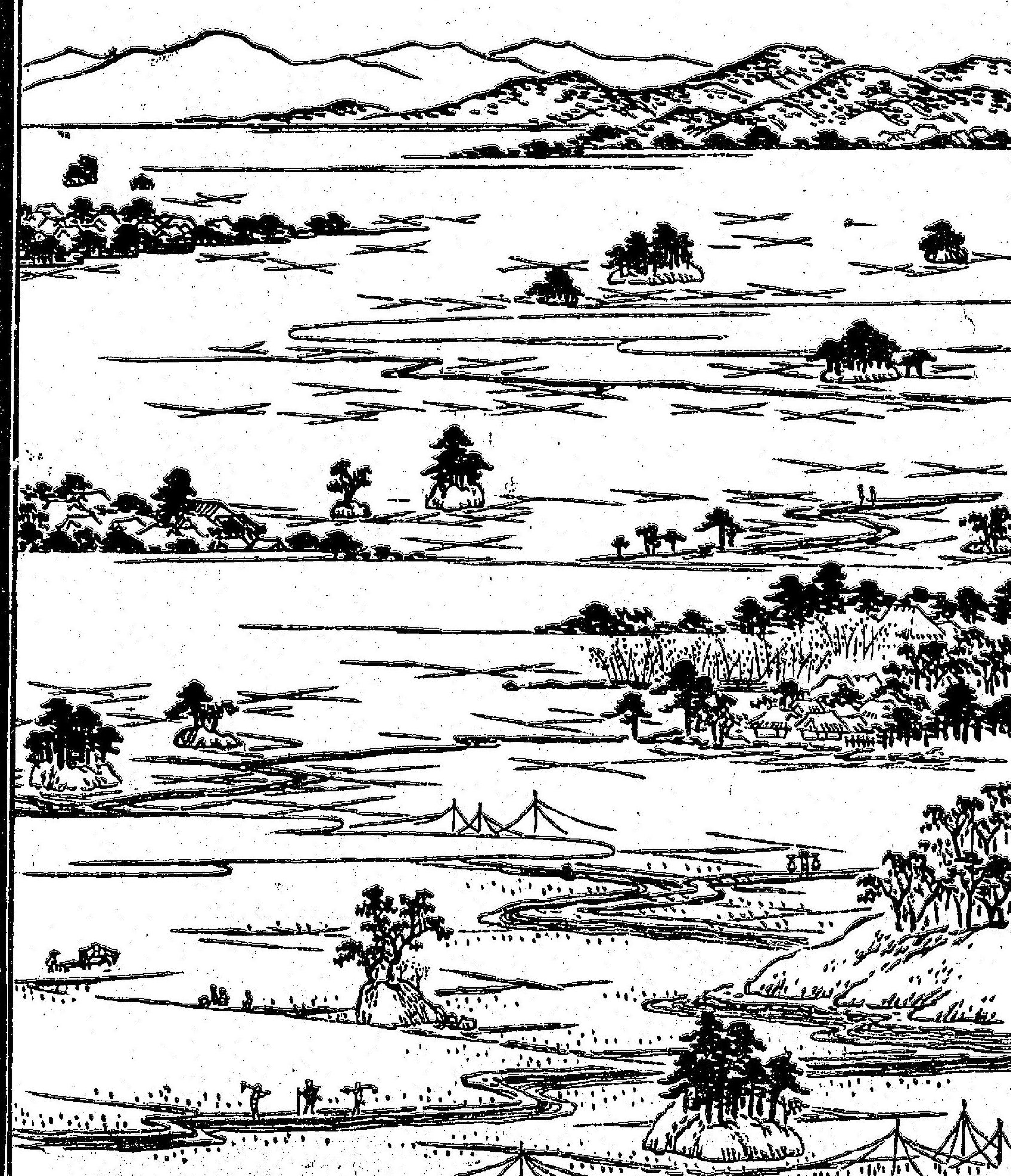
あり又行基菩薩ハ良材を得て薬師佛の尊像を彫刻しまふ此地を去る五十余町巽の方小倉と号る地に一の池あり此間夜毎に竜燈をさゝく又右の出燈も四月八日よりおこるとなり佛堂造立落成の後橘樹郡の地を以て寄附しまふ時に天平十二年庚辰十一月なり其後文徳天皇の御宇に當て惟喬惟仁御同胞の太子御位定の時慈覚大師惟仁皇子の御為に種々の御祈ありて天安元年丁丑の八月當山に勅使を立られ一堂塔法再営ありし翌年戊寅初秋悉く落慶して舊観に復せ同年八月本尊を京師より移しまふ本尊駿河國青島の里に至まふ夜自ら光つて當山辰巳の方の大盤石の上に立せあふて奇異とす則影向石是なり其時大師曰く我此山の躰をみるに靈石靈水四の谷四の峯あり是八葉胎藏の徳を備へて末世に至る迄二世の悉地圓満せしむる所ありとて勅使と共に帰洛の後奏聞ありしかバ天皇再ひ改いて橘樹郡を寺に充しむ此年の春三月竟に惟仁太子位につかせらる清和帝是なり是偏に此本尊の衛護のよつてあらしむる所なりしとて威徳山と号けられ近江國蒲生郡の地を御寄附の宣旨ありしとぞ

十三塚　土人ハ十三本墓と呼べり野川村の耕地の中此所彼所に散在せり雜樹茅草茂り相傳ふ新田佐兵衛佐江戸遠江守が為に伐まけて矢口の渡ありて亡ひあひし時随ふ所の家臣の墳墓なりとぞ又とくと詳ならず

舟田　子母口村の内府中道の右にあり橘明神の神田にして長二十歩ばかり幅十四歩あまり有る水田なり舟の形にして其田ふち悉く陸田なり舟河原と称せる地ハ社より十町ばかり東に當りて今ハ民村の字となれり次の橘明神の条下と合せみるべし

橘明神社　同所府中道より四町ばかり右の方山の上にあり別當ハ真言宗にして蓮乗院と号す祭礼ハ隔年九月九日に修行す祭神ハ弟橘媛を祀ると云神體ハ一尺三四寸計ありて男躰女躰二

十三塚



軀を安置せり（女躰ハ弟橘媛 男躰ハ日本武尊）勧請の始詳ならん此地の人他郷へ
出る事ある時ハ必先當社に詣て然して後發足せされハ路中過あり
とて大に恐怖せり

古文書一通子母口村の里正伊藤氏の家に蔵む子母口背ハ渋口なるへし此書によりて明けし

渋口郷目録

一町　大戸宮　神田

二段　立花宮　神田

領家方　能登出作

宇田壹町四反

田壹町　散在

合貳町四反（此内四段小せきあんゆるすみ免のごとく 以上一貫貳百三十七文　分銭）

以下略之

岩松孔那代國経申ス武蔵國稲毛ノ新庄ノ内

橘明神祠

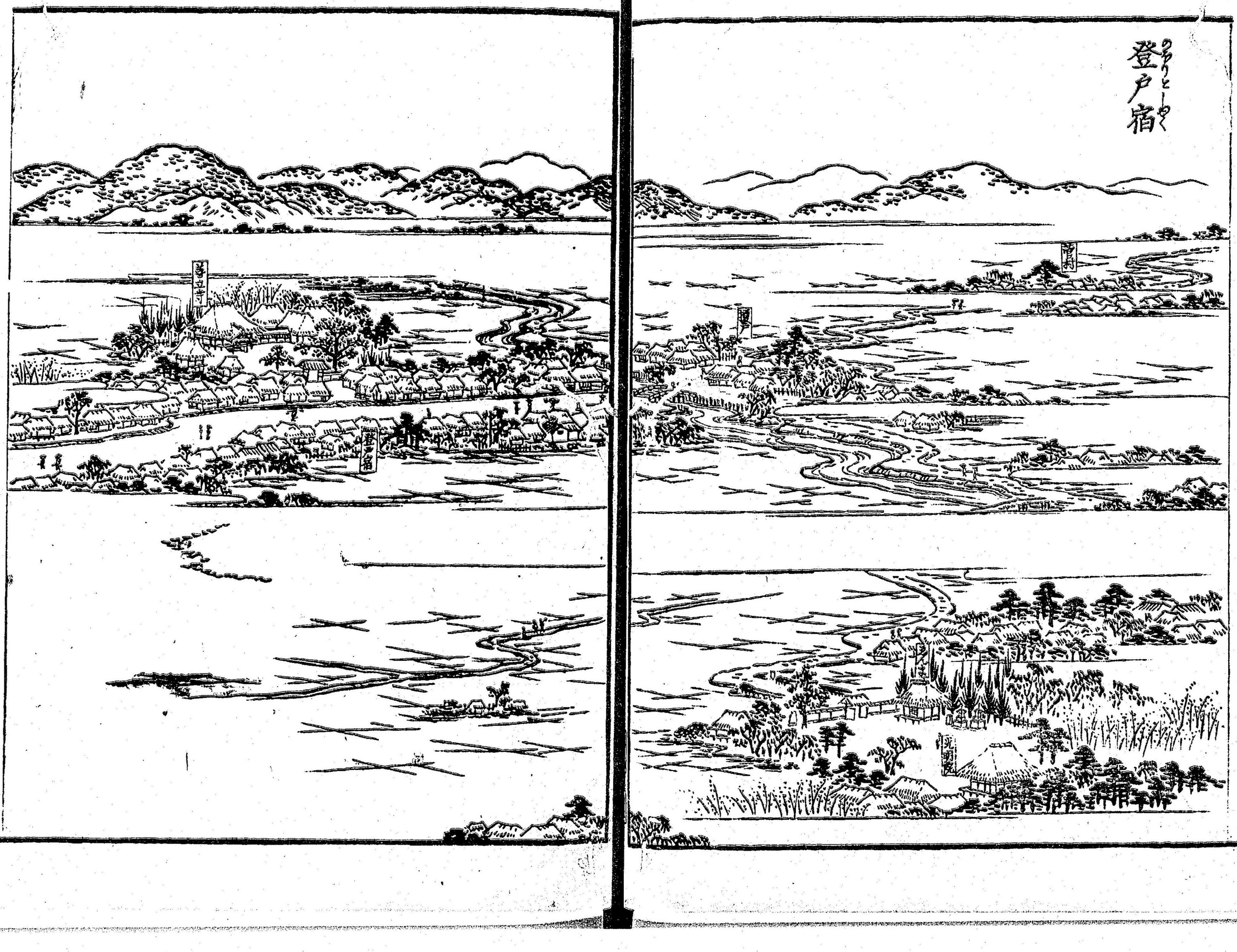
溝口ノ郷ノ事任セ置ル、御はへらる旨差遣シ使者ノ欲ニ
御法ヲ背キ下地ニ於テ圍繞所也テ江戸ノ蔵人入道
并金同ク信濃入道三貞同ク四郎入道道儀等
率テ多勢ヲ構ヘ城郭ヲ無是非ノ擬ス及合戦ニ之間
不従ハ於彼ハ若此等ノ條ニ於テハ
八幡大菩薩六所大明神ノ御罰ヲ此ノ身ニ蒙ルベシ以テ此
旨ヲ此ノ旨ヲ以テ執達ニ於ハ如件仍テ

正徳元年七月廿三日

沙弥聖欣　在判

進上　御奉行所

祠傳往古日本武尊東征の時此地より發船ありと云
先に舉る所の記に何れ其明らかならずと云上古ハ或ハ武尊此海中風浪の難に
品川神奈川の北共にひとつの海なりしとぞ
逢給ひし頃橘姫の御衣及ひかふり等の具ハ此山の下に漂着せし


登戸宿
等立寺
登戸宿
常明院

ともいふてその説一ならしれ　舟田は昔の渡船の着てありし旧跡なりと云

右近屋敷　社地の右にあり農民藤七といふ人居住す右近古ハ当社に奉祀のそのやしき藤七ハ其末裔なりとて今猶連綿として子孫繁昌せり

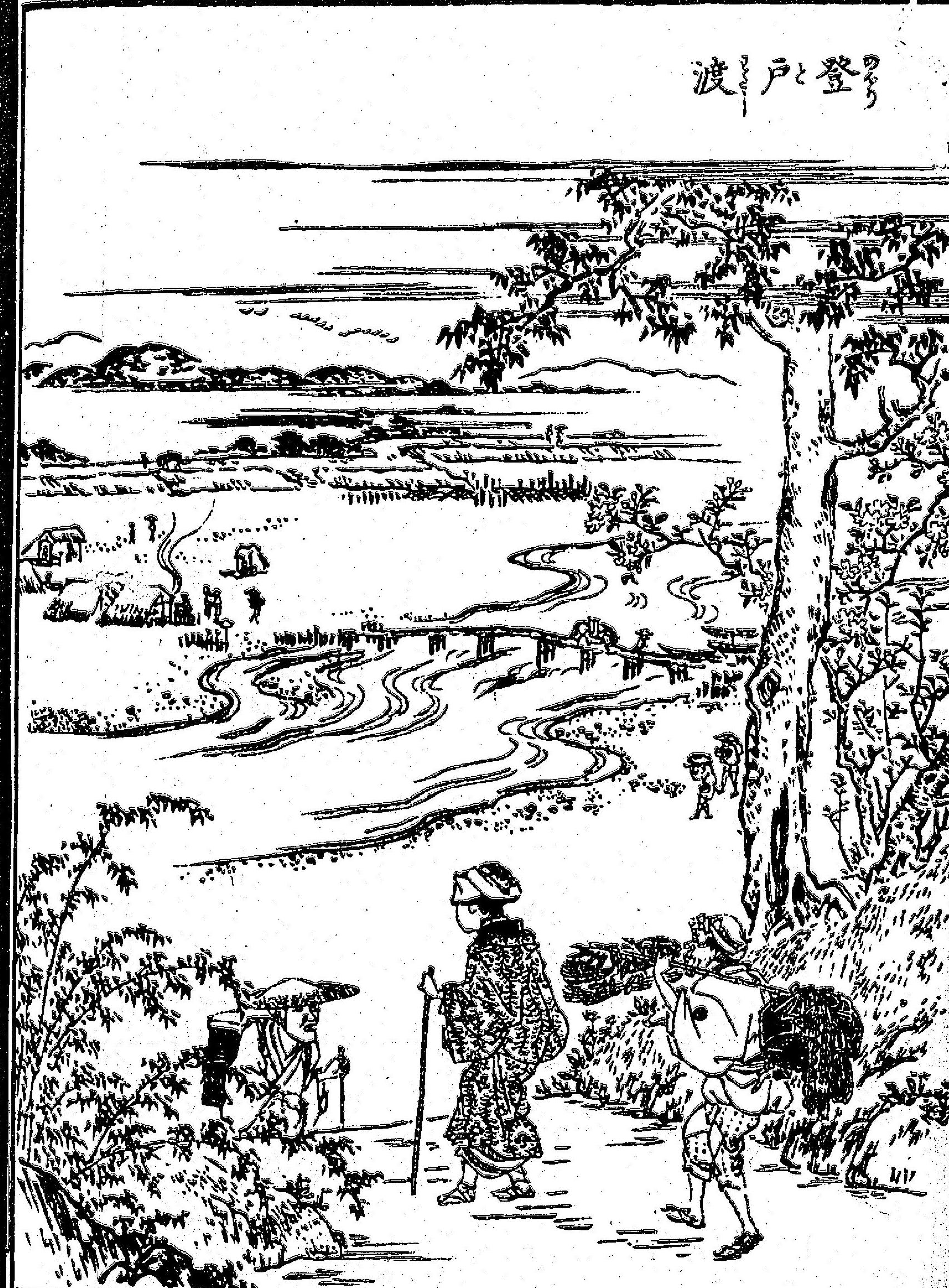
左近屋敷　同じく社地の左にあり右近屋敷と共に附地なりしかと左近屋敷の方ハ今ハ畑となりて人居ハあらず

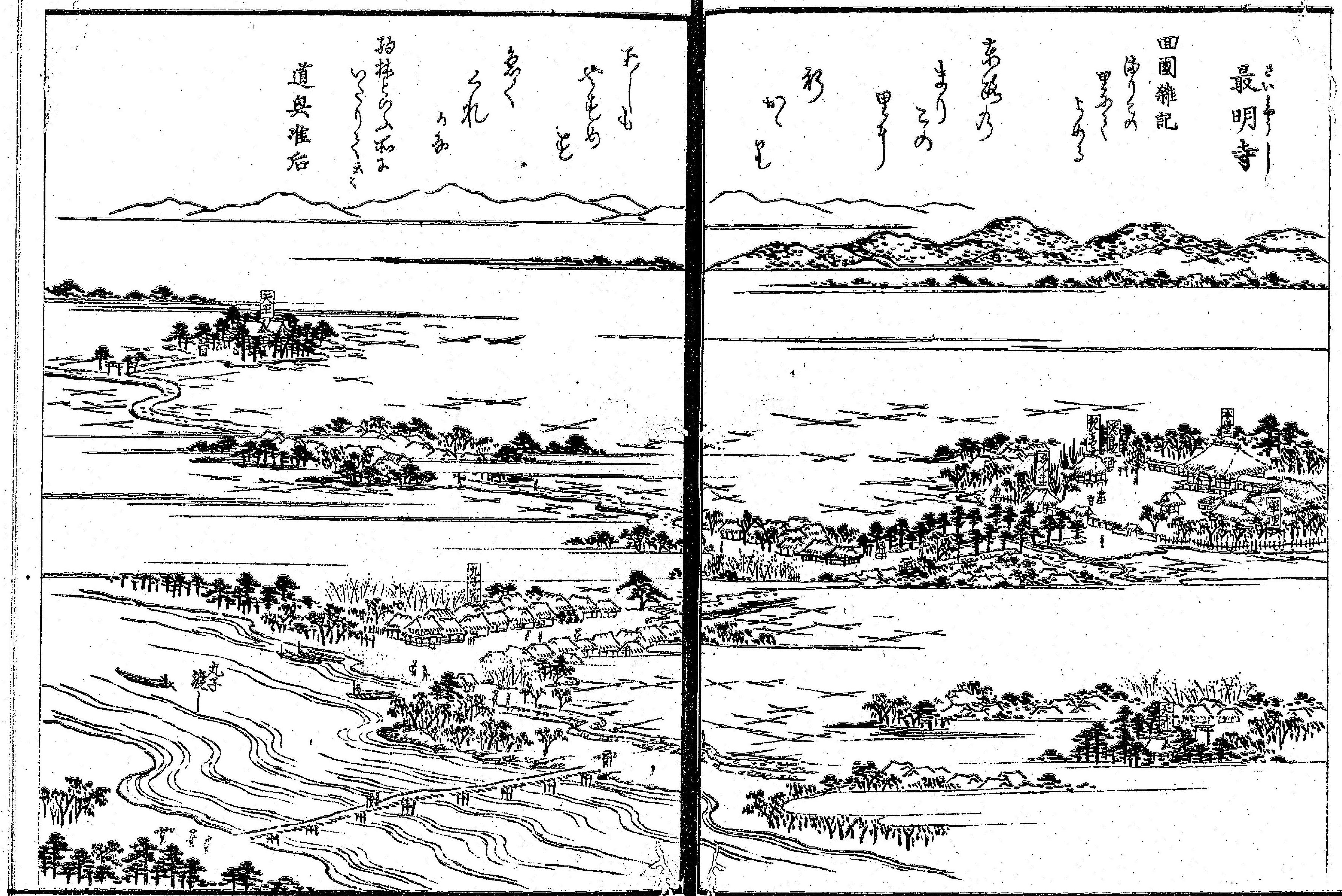
橘姫神廟　社地より二丁ほど東に当りて山の中腹にあり　五六歩の地を封して茅藤の類繁茂せり

相伝ふ日本武尊東征の時此海上逆浪の災に逢ふ玉ひ弟橘姫の御衣及び御冠の具など流れ寄たりしを土中へ収め旧跡ありとぞ

大戸明神　橘明神の社より後へ二町あまり田りて西の方此山の上にあり蓮乗院兼帯す祭神大斗乃辨神を祀ると云　神世七代の中にして二柱神なり則女神にましまして男神を意冨斗能地神と申奉る　神躰ハ一尺三四寸ありて男女の容貌にして二軀あり　彼は男神形ハ意冨斗能地神女神の形ハ大斗乃辨神の神影なるべし　祭礼ハ隔年九月九日に修行せり

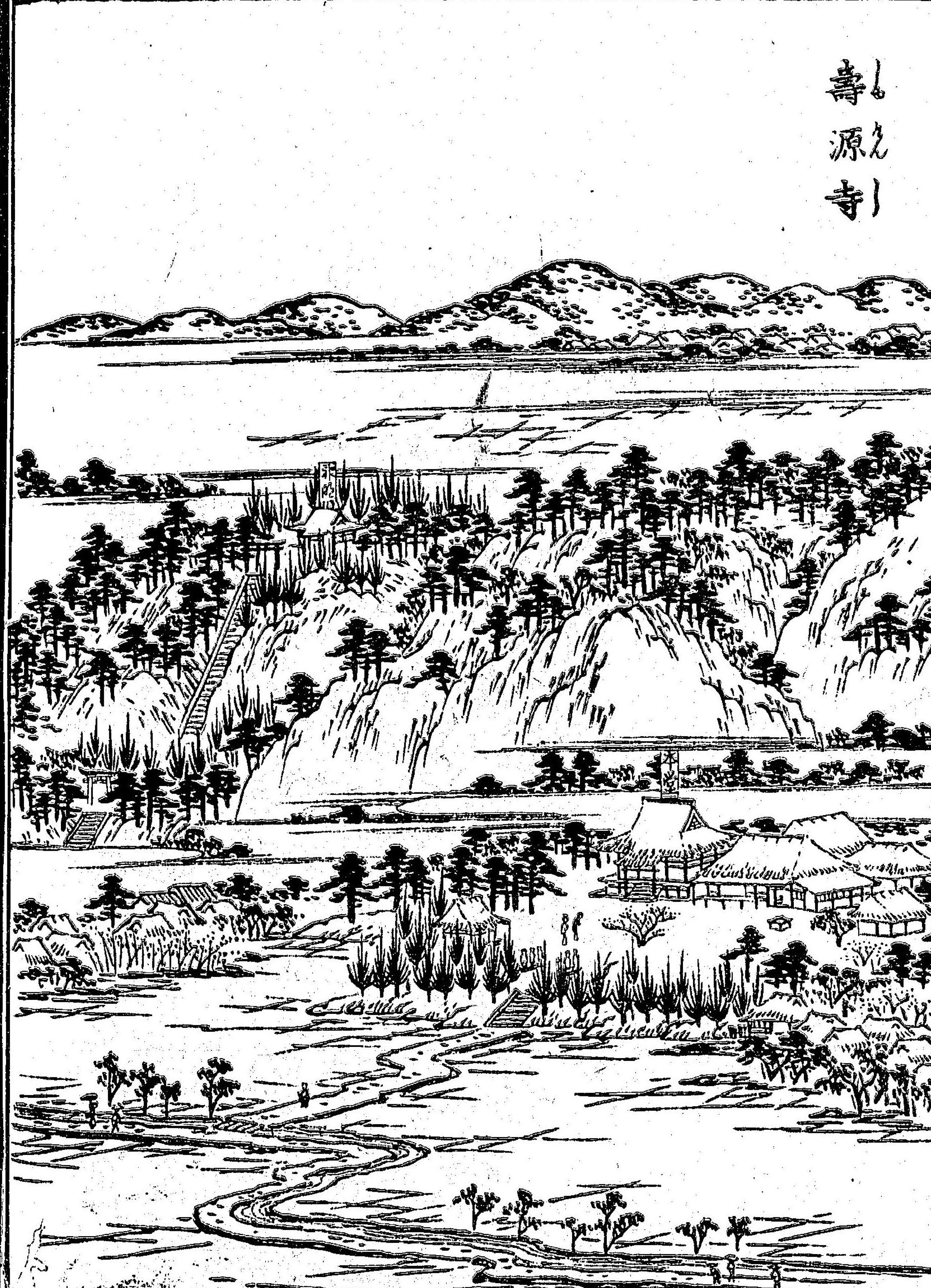
龍宿山最明寺　金剛院と号丸子街道の西小杉邑にあり新義の真言宗にして江戸愛宕下の真福寺に属せり大日如来を本





さいみやうじ
最明寺
回國雑記
東路の
まりこの里に
道興准后
丸子渡

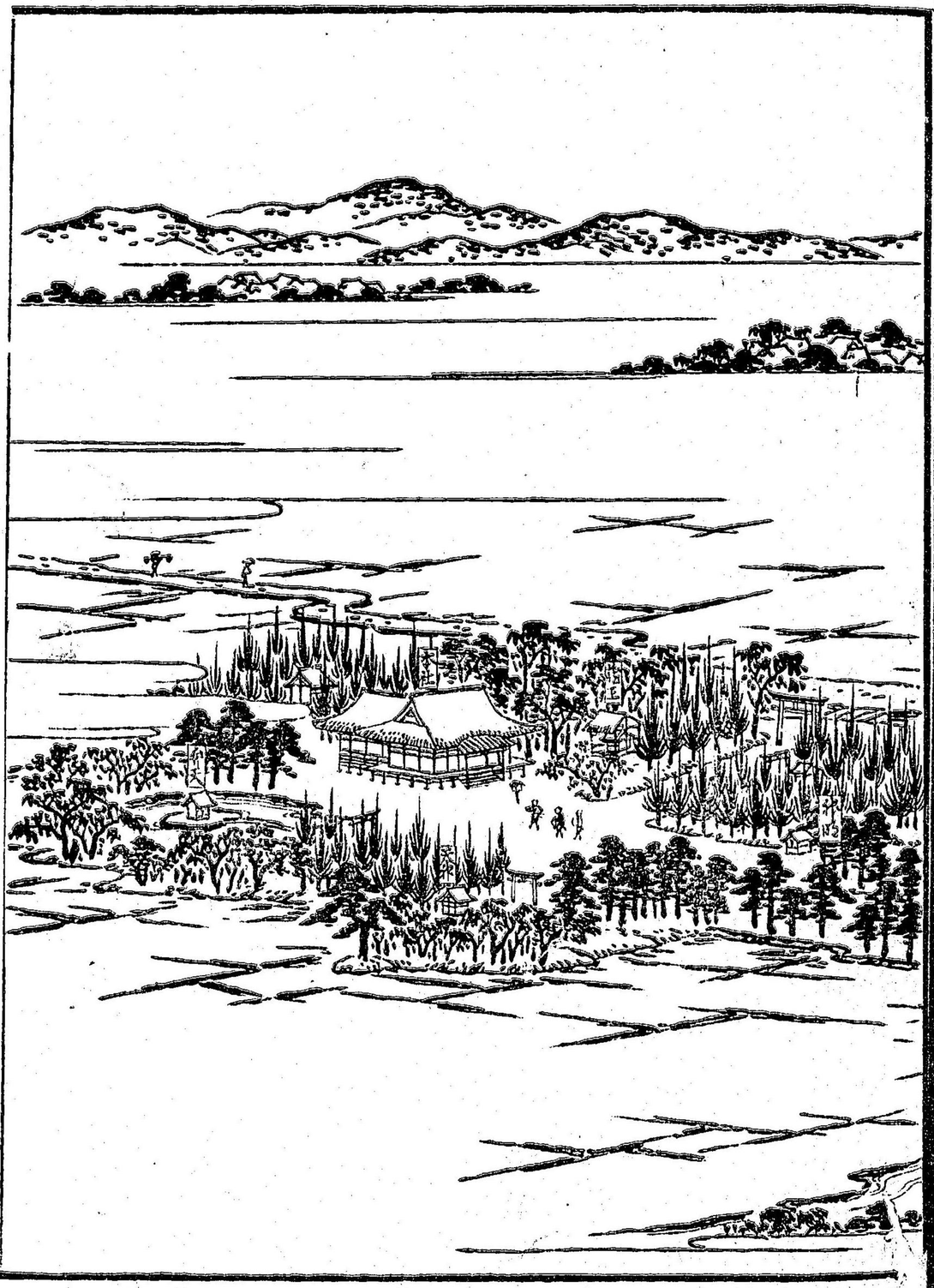
壽源寺

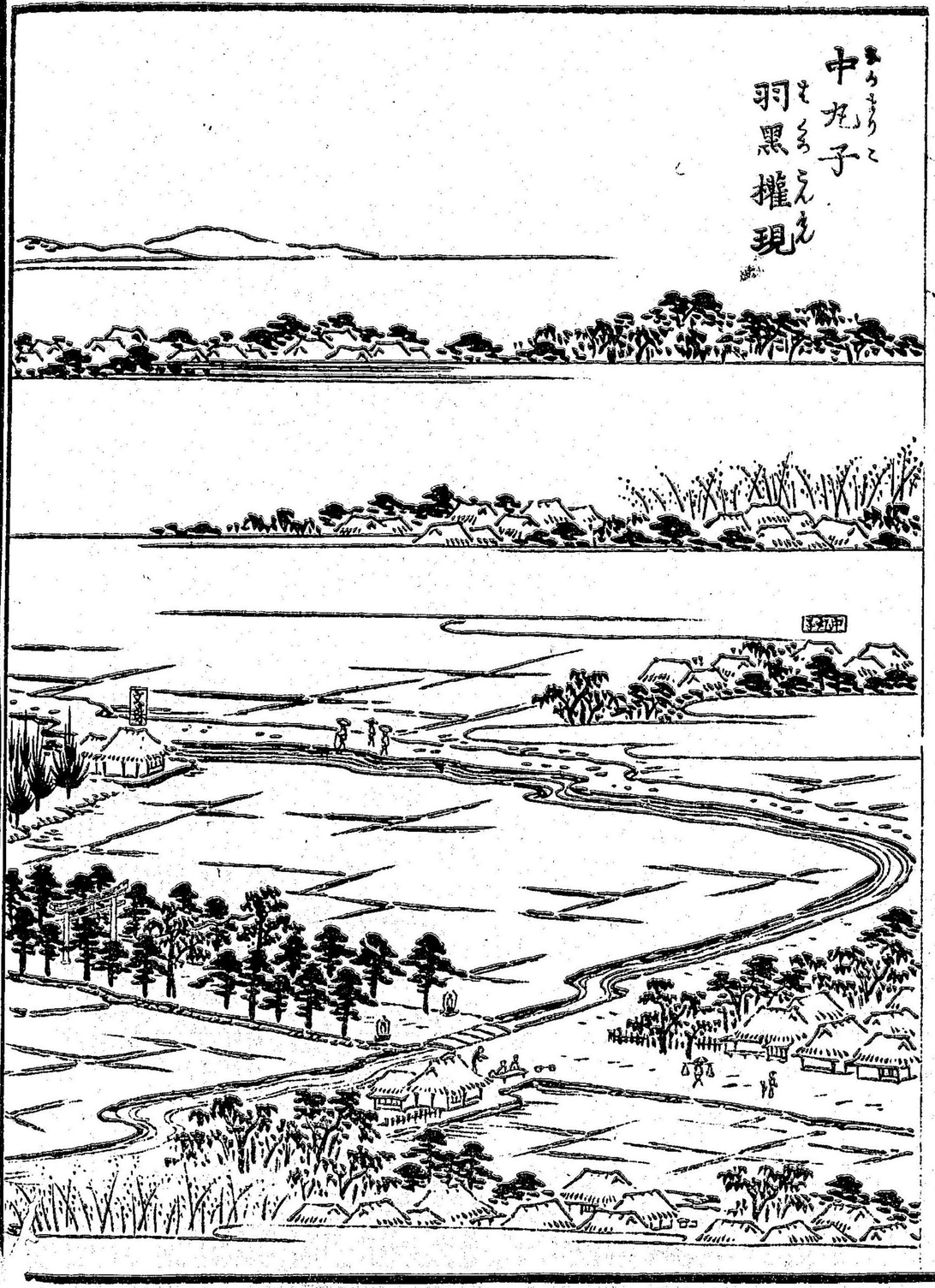


像をかゝるとす北條時頼公の創建なりと云傳へて堂宇に
三鱗の紋を附られ（元禄の頃洪水の災にかゝりて旧記を失ふといへり）
普照山壽源寺　唯称名院と号ス南加瀬村岡の中腹にあり浄
土宗なり四十六世念誉覚栄和尚今の堂宇を営建して坐像
丈六の観音を安置せり當寺梁牌の銘に建武元年甲戌創
建にして往古ハ加瀬山智恵光院新如来寺と号せしとなり
開山ハ良山上人と称す十一世良察上人の頃寛正元年庚辰兵
火のために亡ひけりとなり

東鑑曰　承久三年辛巳六月十四日宇治橋合戦手
負人々　中加世左近将監同弥次郎死了云云

小杉御殿地　最明寺の大門の傍農家の後園の地にて旧趾
なりと云　慶長十三年に御造営ありて其後万治三年にたゝみ
られしと云　則此辺省耕のために殿をたてし御殿なりといふ
按に永禄二年小田原北条家の分限帳に小菅大炊助と云名あり又同書子
小菅摂津守稲毛小田村の地を領するとあり小菅正字なるへし小田原記に




中丸子
羽黒權現

大永四年正月十三日上杉の家臣太田源六同源六郎謀反を起し小田原へ相図を定め氏綱伊豆相模を引卒せし江戸の城ハ上杉修理大夫朝興居住しこましく居なりしをとらげむるの武略なりきとぞ品川小杉へ打向て献をまりしとあるも此地のうちをいふと

山王権現社　上丸子渡口より五町ばかり西南道より左の小路より

祭神大巳貴命一座なり　祭礼ハ六月十四日　神主山本氏奉祀す

此山本氏祖先を山本平内左衛門と称す往古当社勧請の頃近江国より此地に随ひ住むとなり　相伝ふ人皇三十代欽明天皇の御宇庚申の年元年なり　近江国坂本より移しまゐらすと云　後平重盛公上下の丸子及ひ今井等の地を当社の神領に寄附ありしとなり

其頃重盛公奉納の短刀と称するものあり又重盛公の印と云伝ふる物あれとも今秘してみる事なしといふ

今二十石の神領を添らる　文明八年当社焼亡せしより旧記を亡すといへとも　小田原北条家の古文書二通今猶存せり

羽黒権現　稲毛山王より八町ばかり南の方中丸子村にあり　別当ハ真言宗にして瑠璃光山無量寺と号す　相伝ふ天正年間羽州羽黒山より勧請すと云く　本地仏弥陀薬師観音等の木像を安置す　行基大士の作なりといへり

土人云昔奥州会津の人小町三蔵といへる馬追善の為江戸に住せし事年久しく中風の病に侵され半身不遂にして竟に非人となりしく此所彼所にさまよひ歩行　其頃当社を已か栖とせしか承応三年甲午六月一日山伏一人来て告て曰く汝此社殿にあれとも其身甚穢し暫く離遊し名を弥海と改むへしとありて姿をあらため弥源と号く同四年乙未正月十一日当社の御神の霊応によりしく病全快せしかハ神恩を報し奉らんとて此地にありしく朝夕神前へ香花神燈をかゝけ生涯此社の神に仕へまつりしとあり

華表の額に羽黒大権現と書せしは朝鮮国雪峯の筆と云

丸子渡口　相模街道にして　其邑上中下に分れたり　上丸子中丸子ハ多摩川より西にありて橘樹郡に属せり　永禄二年北条家の分限帳に上丸子の地千貫御家所領とあり又下丸子ハ荏原郡に属して川より東にあり下丸子八市旭善三といふ人領せしよし同書にみえたり

東鑑曰

治承四年庚子十月十月以武蔵国丸子庄賜葛西三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但不申其実為御給構自他所招青女之由言上云云

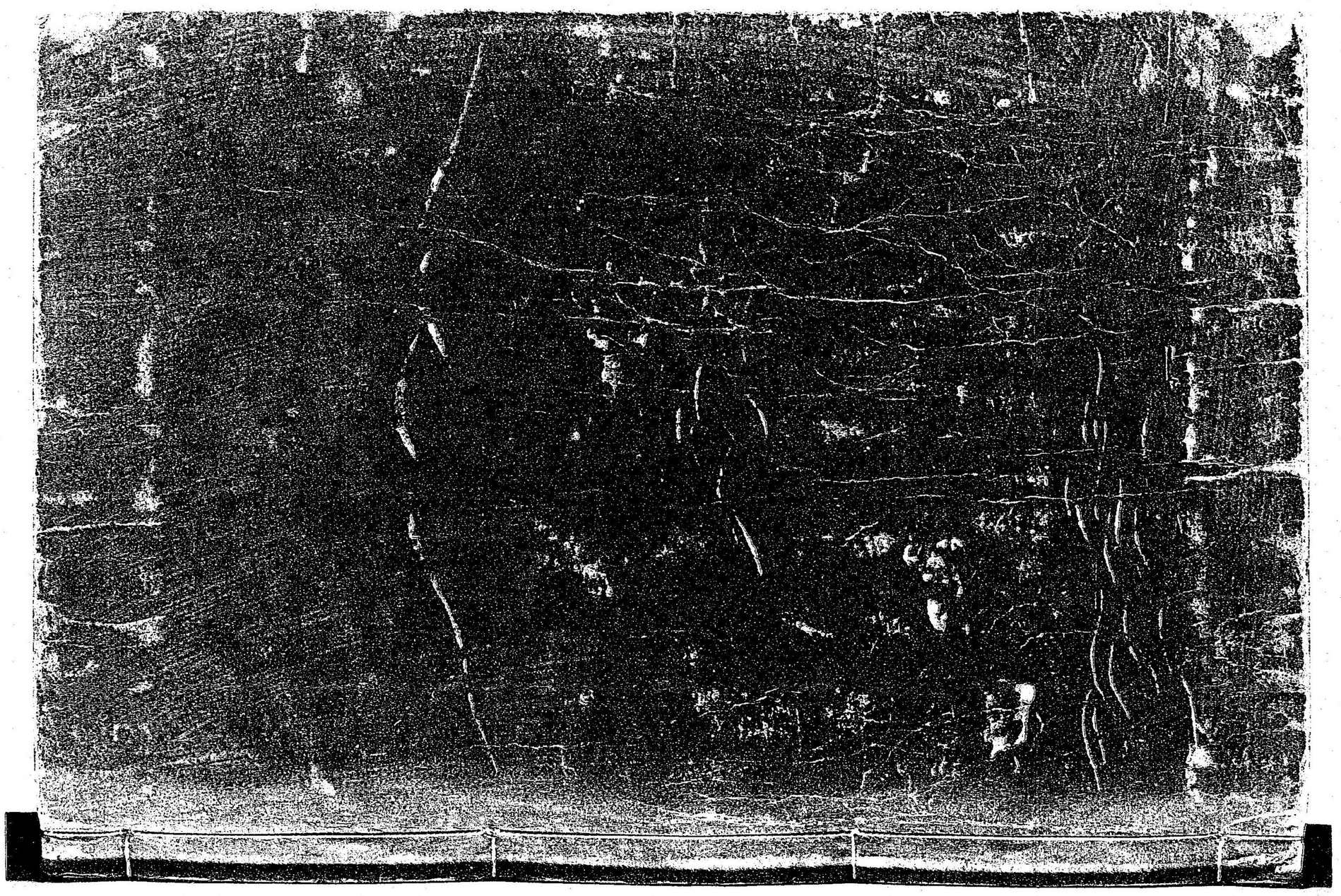
回国雑記　ゆりこの里にてよめる

来つるのまりこの里にまかるとかしやあまたるとくしれぬる

弱林といへる所にいりて云く

道興准后

国立国会図書館



国立国会図書館